

県営低コスト化水田農業大区画整備事業（梅原地区）

に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（7）

富山県福光町

**梅原加賀坊遺跡Ⅰ
梅原胡摩堂遺跡群Ⅰ
梅原落戸遺跡群Ⅳ
梅原安丸遺跡群Ⅲ**

1997年3月

福光町教育委員会



梅原安丸V遺跡2地区

序

福光町の東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯ですが、東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（梅原地区）の実施に伴う梅原加賀坊遺跡、梅原落戸遺跡、梅原胡摩堂遺跡、梅原安丸V遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存することになりましたが、用排水路用地及び水田部分の一部について本調査を実施しました。

調査の結果、鎌倉時代の舟着き場跡、倉庫跡、平安時代の畠跡などが発掘され大きな成果がありました。本書は、その調査結果をまとめたものです。出土品とあわせて、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山県農林水産部・ほ場整備事業梅原地区委員会を始め、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成9年3月

福光町教育委員会
教育長 石崎 栄一

例　　言

1. 本書は、県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）に伴う富山県福光町梅原加賀坊遺跡、梅原落戸遺跡、梅原胡摩堂遺跡、梅原安丸V遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成8年5月15日から同年11月29日までである。調査面積はあわせて4,590m²である。
2. 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
3. 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長加藤仁が調査事務を担当し、生涯学習課長西村勝三が総括した。調査担当者は以下のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター　主任　久々　忠義
福光町教育委員会　主事　佐藤　聖子

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分担は各文末に記した。

4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。
池田恵子・池野正男・越前慶祐・往蔵久雄・大山喬平・河合　豊・岸本雅敏・楠瀬　勝・小島俊彰・太嶋　勇・中川　達・西井龍儀・林　敏三・舟崎久雄・堀　宗夫・前田　廣・溝口博文・宮田進一・桃野真晃・吉田敏信・小幡鮎子・塚田和也・西村倫子（富山大学考古学研究室学生）
金森淑子・西川和美・山村恵子（遺物整理作業）
(敬称略・五十音順)
5. 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

目　　次

| | | | |
|------------------------|-------|---------------------------|-------|
| I 位置と環境 | 1 | 第12図～第17図 梅原安丸V遺跡2地区の遺構 | 22～28 |
| 第1図 位置と周辺の遺跡 | 1 | | |
| II 調査に至る経過 | 2 | 第18図 梅原胡摩堂遺跡13地区の遺構 | 29・30 |
| 第1表 遺跡の概要 | 2 | 第19図 梅原加賀坊遺跡1地区・梅原落戸遺跡 | |
| 第2図 遺跡の範囲と調査区位置図 | 3 | 10地区・梅原胡摩堂遺跡11地区の遺物 | 31 |
| III 調査の概要 | 4 | | |
| 1. 調査の経過 | 4 | 第20図 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺物(2) | 32 |
| 2. 調査の方法 | 4 | 第21図 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺物(3) | 33 |
| 3. 梅原加賀坊遺跡1地区の概要 | 4 | 第22図 梅原安丸V遺跡2地区の遺物(1) | 34 |
| 第3図 梅原加賀坊遺跡1地区の基本土層 | 4 | 第23図 梅原安丸V遺跡2地区の遺物(2) | 35 |
| 第4図 地形と区割 | 5 | 第24図 梅原胡摩堂遺跡13地区の遺物 | 36 |
| 4. 梅原落戸遺跡10地区の概要 | 6 | 図版1 梅原加賀坊遺跡1地区の遺構(1) | |
| 5. 梅原胡摩堂遺跡11地区の概要 | 7 | 図版2 梅原加賀坊遺跡1地区の遺構(2)、出土 | |
| 第5図 堀と建物の配置 | 9 | 遺物 | |
| 6. 梅原安丸V遺跡2地区の概要 | 10 | 図版3 梅原落戸遺跡10地区の遺構(1) | |
| 第6図 地形と区割 | 10 | 図版4 梅原落戸遺跡10地区の遺構(2)、出土遺物 | |
| 第7図 遺構概略配置図 | 11 | 図版5～図版11 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺構 | |
| 7. 梅原胡摩堂遺跡13地区の概要 | 15 | 図版12～図版18 梅原安丸V遺跡2地区の遺構 | |
| IV まとめ | 16 | 図版19・20 梅原胡摩堂遺跡13地区の遺構 | |
| 参考文献 | 16 | 図版21・22 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺物 | |
| 第8図 地形と区割 | 17・18 | 図版23～図版25 梅原安丸V遺跡2地区の遺物 | |
| 第9図 梅原加賀坊遺跡1地区・梅原落戸遺跡 | | 図版26 梅原胡摩堂遺跡13地区の遺物 | |
| 10地区・梅原胡摩堂遺跡11地区の遺構 | | 付図1 梅原加賀坊遺跡1地区・遺構配置図 | |
| 第10図 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺構(2) | 20 | 付図2 梅原落戸遺跡10地区・遺構配置図 | |
| 第11図 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺構(3) | 21 | 付図3・4 梅原胡摩堂遺跡11地区・遺構配置図 | |
| | | 付図5 梅原安丸V遺跡2地区・遺構配置図 | |
| | | 付図6 梅原胡摩堂遺跡13地区・遺構配置図 | |

I 位置と環境

富山県福光町梅原地区には、縄文時代から近世までの梅原遺跡群が存在する。福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部端に位置し、県境には、養老三年（719年）、泰澄大師によって開山されたといわれる医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。上平村と接する南側に位置する大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

梅原加賀坊・梅原落戸・梅原胡摩堂・梅原安丸Vの各4遺跡は、小矢部川の支流である大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に位置する。標高70m前後を測る一帯には、今回の調査対象遺跡の他に梅原出村・梅原上村・田尻・久戸の各遺跡が密集している（第1図参照）。梅原安丸・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東海北陸自動車道を建設する際発掘調査が行われ、12世紀中頃から18世紀にかけての大集落跡が発見された〔富文振1994〕。この南後方には、うずら山・宗守・竹林I・竹林II・東殿・徳成などの縄文時代を中心とした遺跡が存在する。また、梅原胡摩堂遺跡6・7地区からは弥生時代中期の土器・管玉・石鏃が出土し、梅原安丸III遺跡では古墳時代の堅穴住居跡1棟を検出しており〔福光教委1991・1994〕、原始時代から今日まで連綿と人々が生活していたことがわかる。

文献資料では、古代には福光町の一部が砺波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家である梅原坊があった。

（佐藤聖子）



1. 梅原安丸遺跡 2. 梅原安丸II遺跡 3. 梅原安丸III遺跡 4. 梅原安丸IV遺跡 5. 梅原安丸V遺跡 6. 梅原出村II遺跡 7. 梅原出村III遺跡 8. 梅原上村遺跡 9. 梅原落戸遺跡 10. 梅原加賀坊遺跡 11. 梅原胡摩堂遺跡 12. 田尻遺跡 13. 久戸遺跡 14. 宗守遺跡 15. 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 16. うずら山遺跡 17. 久戸東遺跡 18. 田屋川原古戦場 19. 田中遺跡 20. 仏道寺跡 21. 遊部城跡 22. 常楽寺跡

II 調査に至る経過

平成元年、21世紀に向けての大型農業に対応するため、遺跡の所在する梅原地区において『低コスト化水田農業大区画は場整備事業計画』が策定された。この事業は平成2~9年度を事業年度とし、梅原地区92haを対象とする計画であった。しかし、この計画地内を南北に縦断する東海北陸自動車道の建設に伴い、遺跡の発掘調査がすでに実施されており、計画地内においても遺跡の広がりが予想された。そのため、町教育委員会は県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、平成元年度に計画地内の20haで、2年度には残りの73haで遺跡分布調査を実施し、広範囲において遺物の散布地を確認した。さらに2年度には、国庫補助を受けての試掘調査を実施し、遺跡の範囲確認を行ったところ、遺構の依存状況が良好であった事から、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた結果、遺跡の大半は盛土を行う事で水田下に保存し、一部の面工事・農道・用排水路部分について発掘調査を実施する事となった。以降、毎年度試掘調査と本調査を継続して実施し、試掘調査については平成7年度で調査を完了した〔福光教委1991・1992・1993・1994・1995・1996〕。

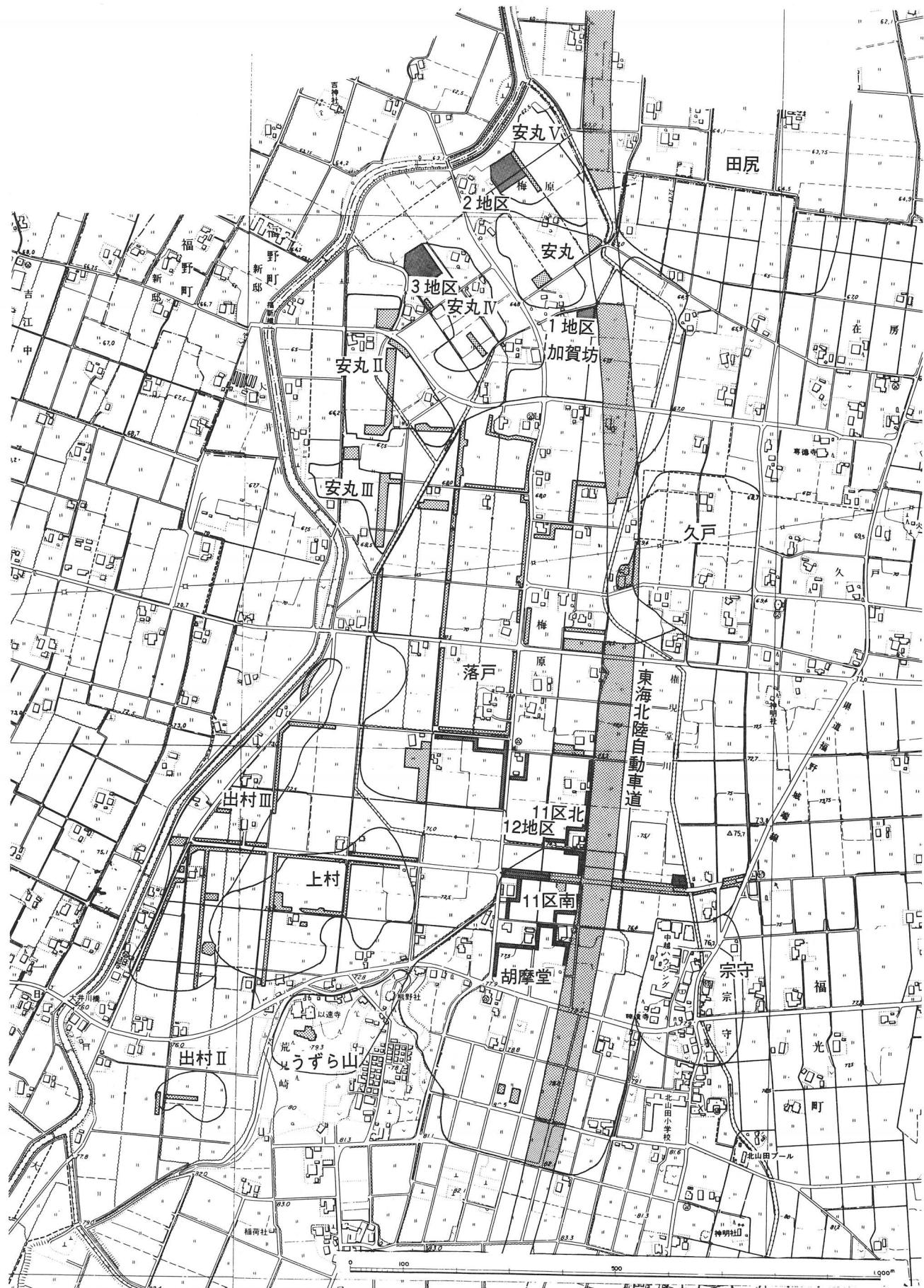
これまでの調査面積は次のとおりであり、遺跡の内容は第1表のとおりである。

| | 試掘調査対象面積 | 本調査対象面積 | 本調査対象遺跡 |
|-------|------------------------|---------------------|---------------------------------|
| 平成2年度 | 約164,000m ² | 2,186m ² | 梅原安丸Ⅱ遺跡、梅原安丸Ⅲ遺跡、梅原安丸Ⅳ遺跡、梅原安丸Ⅴ遺跡 |
| 平成3年度 | 約124,500m ² | 5,238m ² | 梅原安丸遺跡、梅原安丸Ⅱ遺跡、梅原安丸Ⅲ遺跡 |
| 平成4年度 | 約145,000m ² | 4,700m ² | 梅原上村遺跡、梅原出村Ⅱ遺跡、梅原出村Ⅲ遺跡 |
| 平成5年度 | 約116,000m ² | 3,900m ² | 梅原落戸遺跡、梅原出村Ⅲ遺跡、梅原上村遺跡 |
| 平成6年度 | 約130,000m ² | 3,450m ² | 梅原落戸遺跡 |
| 平成7年度 | 約110,000m ² | 3,235m ² | 梅原落戸遺跡 |

(佐藤聖子)

第1表 遺跡の概要

| No. | 遺跡名 | 所属時代 | 発見された遺構 | 発見された遺物 |
|-----|-------|--------------------|---|---|
| 1 | 梅原安丸 | 縄文、中世、近世 | 掘立柱建物柱穴、穴、溝、竪穴、井戸、池状遺構 | 土師質土器、珠洲、磁器、漆器、五輪塔、石臼、下駄 |
| 2 | 梅原安丸Ⅱ | 縄文（後期）、古代、中世、近世 | 掘立柱建物、同柱穴、溝、井戸、土器溜まり | 縄文土器・石器、須恵器、漆器椀、土師質土器、珠洲、陶磁器 |
| 3 | 梅原安丸Ⅲ | 縄文（後期）、古墳、古代、中世、近世 | 竪穴住居跡（古墳）、掘立柱建物、柱穴、穴、溝、井戸 | 縄文土器・石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲、陶磁器 |
| 4 | 梅原安丸Ⅳ | 縄文か、古代、中世、近世 | 掘立柱建物柱穴、穴、溝、竪穴状遺構、井戸 | 縄文土器、須恵器、土師質土器、珠洲、陶磁器 |
| 5 | 梅原安丸Ⅴ | 縄文か、古代、中世、近世 | 掘立柱建物、掘立柱建物柱穴、穴、溝、井戸 | 縄文土器、須恵器、珠洲、土師質土器、陶磁器、曲物底板 |
| 6 | 梅原出村Ⅱ | 縄文（晚期）、古代、中世 | 柱穴、穴、溝 | 縄文土器・石器、須恵器、土師質土器、珠洲、銅錢、銅製キセル |
| 7 | 梅原出村Ⅲ | 縄文、古墳、古代～中世、近世、近代 | 竪穴住居跡、柱穴、穴、溝、井戸、遺物包含層（縄文・古代） | 縄文土器・石器、須恵器（墨書き土器）、土師器、土師質土器、珠洲、越前、陶磁器、銅貨 |
| 8 | 梅原上村 | 縄文、古代～中世、近世 | 柱穴、穴、溝、遺物包含層（古代） | 縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲、越前、八尾？、陶磁器、石臼、古錢 |
| 9 | 梅原落戸 | 縄文、弥生、古代、中世、近世 | 川、穴、遺物包含層（縄文）、掘立柱建物（含倉庫）、土坑（古代）、掘立柱建物、道路、土坑、溝（中世）、溝（近世～近代）、柱穴 | 縄文土器・石器、弥生土器、内黒土器（古墳）、須恵器、土師器、土製品、鉄滓、馬齒、炭化米、種子、骨片、木製品（古代）、土師質土器、珠洲、常滑、越前、瀬戸美濃、輸入陶磁器、土製品、木製品、製塙土器、火鉢、羽口、小柄、鉄滓、銅貨（中世） |
| 10 | 梅原加賀坊 | 縄文、古代、中世、近世 | | 縄文土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲、磁器 |



第2図 遺跡の範囲と調査区位置図（1万分の1）

III 調査の概要

1. 調査の経過（第2図）

今回の調査は、平成7年度の協議に基づき、ほ場整備事業の田面削平工事並びに用排水路付け替え工事に伴う本調査である。調査遺跡は梅原加賀坊遺跡・梅原落戸遺跡・梅原胡摩堂遺跡・梅原安丸V遺跡の4遺跡で、調査地点は5地区である。

これらの遺跡は、東海北陸自動車道の建設に伴い昭和57年に県埋蔵文化財センターが行った分布調査と、当該工事に伴い平成2年に町教育委員会が行った分布調査で発見された。梅原加賀坊遺跡・梅原胡摩堂遺跡については、自動車道の路線部分を昭和63年に県埋蔵文化財センターが試掘調査を行い、平成元年から同4年まで財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が本調査を実施している。

ほ場整備事業に伴う調査は町教育委員会が担当し、梅原落戸遺跡は平成4年から同6年に試掘調査、平成5年から同7年まで9ヶ所で合計7,395m²の本調査を、梅原安丸V遺跡は平成2年に試掘調査と1ヶ所395m²の本調査を実施している。また、梅原加賀坊遺跡と梅原胡摩堂遺跡については、自動車道東側について、平成7年に試掘調査を行った。

今回の調査地点・地区名・工事内容・発掘面積は次のとおりである。梅原加賀坊遺跡は遺跡の北端で自動車道の東に接するところで1地区と呼ぶ。農機具格納庫建設予定地で550m²を発掘した。梅原落戸遺跡は遺跡南端で10地区と呼ぶ。用水路付け替え工事で310m²を発掘した。梅原胡摩堂遺跡は遺跡中央西寄りの11地区を中央東寄りの13地区の2ヶ所である。11地区は用排水路付け替え工事で1,035m²、13地区は田面削平工事で450m²を発掘した。梅原安丸V遺跡は遺跡の西寄りで2地区と呼ぶ。田面削平工事にかかる2,245m²を発掘した。

2. 調査の方法

調査は、まず重機により耕作土の掘削を行った。その後、地区ごとに基準杭の設置及び調査区割を行った。調査区割は、調査区の形に応じておおむね南から北方向にX軸、西から東方向にY軸をとり、それぞれ2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリ及びヘリコプターにより撮影した写真から図化した。

3. 加賀坊1地区の概要

(1) 地形と層序（第3・4図、図版1）

1地区は海拔約65.5mである。北川の水田は約1m低く段差がある。その境には西南から北東へ流れる川（大井川の分流とみられる）があり、遺跡のすぐ北側で東南から流れてくる権現堂川と合流する。地表から黄色土の地山面（遺構確認面）までの深さは約50cmで、その間は大きく4層に分かれる。①層は現代の耕作土、②層は黒色土で中世の遺物が含まれる。③層は黄褐色砂礫混じりの黒褐色土で古代の遺物が含まれる。④層は黒褐色土で縄文時代の遺物が含まれる。

| |
|---------------------|
| ①層 現代の耕作土 |
| ②層 黒色土（中世） |
| ③層 黄褐色砂礫混じり黒褐色土（古代） |
| ④層 黒褐色土（縄文） |

第3図 1地区の基本土層

(2) 遺構 (第9図、図版1・2、付図1)

奈良・平安時代の溝3・土杭2・柱穴4、風倒木痕などがある。

A. 奈良・平安時代

溝SD01～03

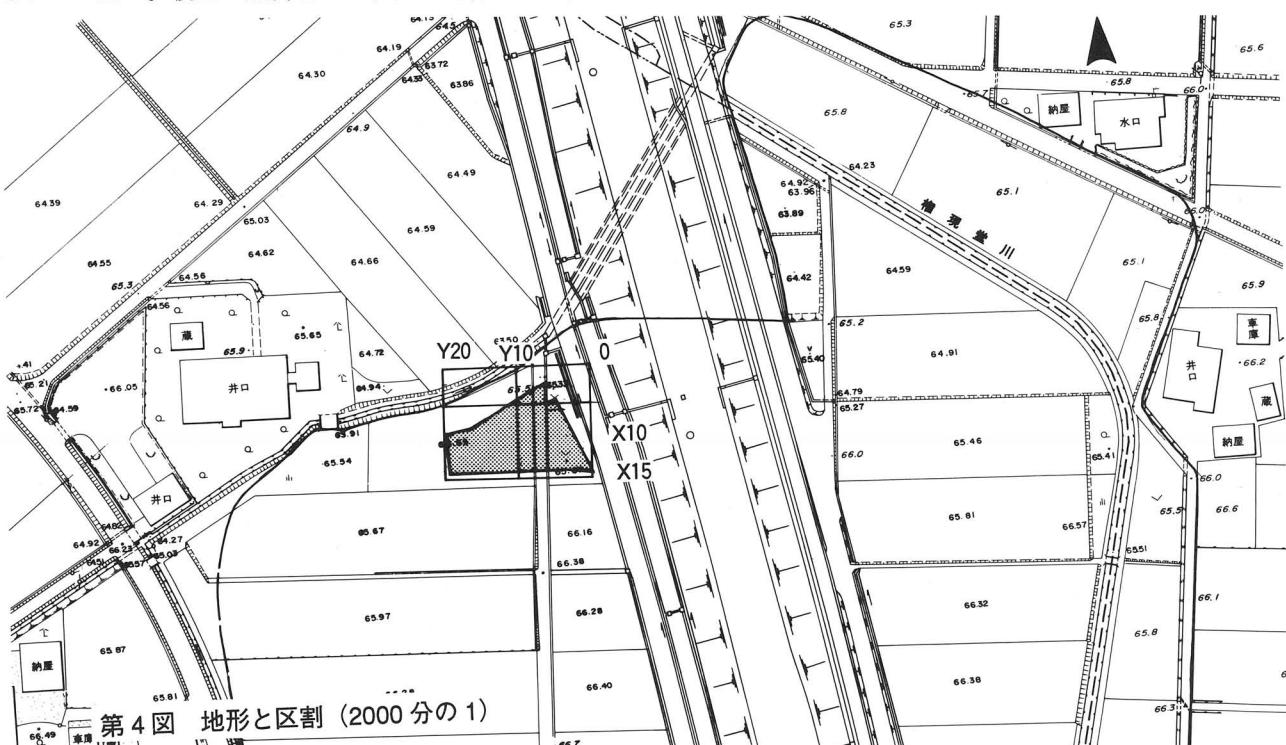
SD01は、調査区中央北寄りにある幅約50cm深さ約20cmの東西方向の溝である。ゆるく蛇行している。覆土は黒褐色の細かい砂であり、水の流れがあったことがわかる。水は西から東へ流れていたものと考えられる。出土遺物は、縄文土器、奈良時代の須恵器杯・土師器皿がある。SD02は、SD01の北側にある幅約30cm深さ10cmの南北方向の溝である。SD01に直交しており、それから分岐した溝とみられる。覆土は黒褐色の砂である。出土遺物は、奈良時代の須恵器杯・土師器碗がある。SD03は、SD01の北側約6mにあり、幅約55cm深さ30cmの東西方向の細長い溝である。覆土は黒褐色の細かい砂で、水の流れがあったことがわかる。検出部が短いので流れの方向は不明であるが、SD01と同様東へ流れていたものだろう。出土遺物は平安時代の須恵器杯蓋・土師器皿がある。なお、SD01・02は、平成2年に行われた東海北陸自動車道の調査区加賀坊A地区で発見されたSD21とつながるものとみられる。A地区ではSD21と直交する溝SD19がある。SD19の流路の方向は真北に対して約2度東へ傾いた方向である。古代の条里施行に關係した溝の可能性も考えられるが、梅原落戸遺跡や梅原胡摩堂遺跡での古代建物や溝の方向は、北に対して西へ傾くものが多く全体的な共通性はうかがえない。

土坑SK01・02

SK01は調査区西端にある。北側部分が農道下にあり本来の形状は不明であるが、最大幅1.9m深さ約20cmの穴である。覆土は黄褐色粘質土である。出土遺物は須恵器杯・土師器皿がある。SK02はSD03の西側にある。北側部分が農道下にあり長さは不明であるが、幅4.5m深さ約15cmの穴である。覆土は黒褐色の砂である。西側の角が切れてSD01とつながるようであり、SD02とも接することから、水を溜めておく池のようなものかもしれない。出土遺物はない。

柱穴P1～4

P1～4はSD02の南側にあり、SD01を斜めに横断するように並ぶ。柱穴は直径約40cm深さ約10cmで約1.4mの間隔をおいて並ぶ。覆土は黒褐色土で、出土遺物はない。



土坑SK03～13

調査区中央に土坑が連続して並ぶところがある。一つはSD01の北側でその流路に並行に長さ0.5～1.6m幅30～70cm深さ10～20cmの楕円形の土坑が7つ以上並ぶ。また、SK02の南側でSD01に直交するように長さ0.8～1.5m幅30～60cm深さ5～10cmの楕円形の穴が3つ並んでいる。覆土は黒褐色土で、出土遺物はない。古代・中世の道路遺構にみられる波板状凹凸面と呼ばれるものに似ているようでもあるが、道跡とも思われない。

(3) 遺物（第19図、図版2）

縄文時代、奈良・平安時代、中世のものが整理箱（長さ65cm幅40cm、深さ10cm、以下同じ）で1箱ある。

A. 縄文時代

縄文土器深鉢の破片があるが、時期は不明である。

B. 奈良・平安時代

8世紀後葉から9世紀中葉の須恵器・土師器がある。

SD01（1・2）1・2は須恵器杯である。底部が平坦で体部の外傾度が50～60度のもので、岩木窯跡群の瓶焼谷窯跡出土品に近い。時期は8世紀後葉とみる〔福光町1993〕。

SD02（4・5）4は須恵器杯、5は土師器碗である。5は内黒で底部は糸切り後ヘラケズリする。9世紀中葉か。

SD03（3）3は土師器皿である。井波町犬藪遺跡出土品に類例がある。時期は9世紀中頃とみる〔岩倉・上野1985〕。包含層（6～8）6は須恵器杯蓋である。口縁端部は短いが完全に丸くなっていない。瓶焼谷窯跡に類例があり、時期は8世紀後葉とみる。7は土師器碗である。内面に茶色の漆が付着しており、漆容器として使われていたものである。9世紀代とみる。8は土師器甕の口縁部である。端部が角張るので、時期は8世紀代である。

C. 中世

包含層（9～11）9は土師質の鉢の口縁部である。梅原胡摩堂遺跡に類例があり、16世紀代のすり鉢とみられる〔富文振1996〕。10・11は土師器である。いずれも口縁部をヨコナデするが、底部との境が屈曲しないで口縁部が外傾するものである。時期は14世紀代とみる。

（久々忠義）

4. 梅原落戸遺跡10地区

(1) 地形と層序（第8・9図）

10地区は海拔約70～72mである。地山面までの深さは20cmから1mで、南側一帯（X5～40Y69とX29Y76～90区）は谷地形となっている。調査区東側では地山まで60cmの深さがあり、その間は4層に分かれる。①層は耕土、②層は床土、③層黒褐色土で中世の包含層、④層は黒色土で古代の土器が含まれる。

(2) 遺構（第9図、図版3・4、付図2）

奈良・平安時代とみられる柱穴・溝が、X60Y15～30区・X45～59Y69・70区・X30～49Y91区にややまとまとある。幕末・明治時代の溝もある。

P20はX60Y27区にある径50cmの柱穴で、土師器甕の破片が出土した。SD01は、X49Y91区にある幅1m深さ20cmの溝である。出土遺物はない。

(3) 遺物（第19図、図版4）

縄文時代の打製石斧（図版4下）、奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の珠洲・土師器・宋錢、唐津皿・鉄刀がある。遺物は整理箱で1箱ある。

12はX35Y91出土の須恵器杯蓋である。天井部をヘラケズリしている。13はX59Y23出土の高台杯である。高台が外へ張り出す特徴があり、8世紀代とみる。14はX60Y25出土の須恵器杯である。8世紀代とみる。15はX43Y70出土

の土師器碗である。口径が広く体部が内湾して立つ特徴から9世紀前半代とみる。16はX60Y3~15区出土の土師器甕である、8世紀代とみる。17はX60Y2区出土の珠洲すり鉢である。珠洲編年第IV期（14世紀前半）とみる。18は、X60Y14区出土の元祠通寶である。

（佐藤聖子）

5. 梅原胡摩堂遺跡11地区の概要

（1）地形と層序（第8図）

11地区は海拔72.5~77.3mである。南側は河岸段丘、北側は氾濫原で、その境は約1.5mの段丘崖となっている。地表面から黄色土地面までの深さは15~50cmで、その間は大きく2層に分かれる。①層は耕土または盛り土、②層は黒褐色で中世の包含層である。

（2）遺構（第9~11図、図版5~11、付図3・4）

中世・近世の建物跡3・堀7・溝3・井戸15・土坑14・柱穴などがある。幕末・明治時代以降の遺構もある。

堀SD01・02・05・07・09・19・21

SD01は、X7~9Y1・2区にある幅5.2m深さ1.4m底幅1.5mの東西方向の堀である。堀内の北側に幅80cmの段がある。覆土は黒褐色土で、瀬戸美濃・越前が出土した。SD02は、X37・38Y58~61にある幅4.3m深さ1.2m底幅2.5mの南北方向の堀である。北方でSD07とつながると考えられる。覆土は黒褐色土で、出土遺物はない。SD05は、X76・77Y13~19区にある幅約3.5m深さ1m底幅2.2mの東西方向の堀で、Y13・14区では南北方向の堀とつながるようである。覆土は黒色土で、瀬戸美濃天目茶碗が出土した。SD07はX67・68Y59・60区にある幅4m深さ50cm底幅3mの南北方向の堀である。覆土は黒褐色で、土師器皿が出土した。SD09はX120・121Y75区にある幅3.3m深さ1m底幅1.7mの東西方向の堀である。覆土は黒色で、珠洲が出土した。SD19は、X20・21Y73にある幅4.5m深さ1.5m底幅2.5mの東西方向の堀である。覆土は褐色土で、青磁・越前が出土した。SD21は、X125・126Y63・64区にある幅3.2m深さ1m底幅1.6mの南北方向の堀である。覆土は黄褐色土で、出土遺物はない。以上のうちSD09・SD19は、東海北陸自動車道関連調査で発掘されたB地区のSD4602・SD7600とそれぞれつながる遺構である〔富文振1994〕。同調査の堀のありかたと今回の調査から、当地域一帯は、東西方向と南北方向の堀によって整然と区画されていることがわかる（第5図）。堀の方向は北に対して約10度東に傾いた方向とそれに直交する方向である。

出土遺物から、堀の形成時期は16世紀代である。この時期この地区には、真宗寺院梅原坊があったことがわかっており、この堀で区画された遺構群は梅原坊を中心とした寺内町と考えられる。

この他に幅の広い溝や狭い溝がある。SD06はX32・33Y14~16区にある幅7.4m深さ80cmの溝である。覆土は黒色土の混じりのないもので遺物もない。自然の小谷の可能性が高い。SD10はX125Y171区にある幅1mの溝。SD22はX83Y75区にある幅80cm深さ60cmの東西方向の溝である。

建物SB01、SK08・17

SB01はX32・33Y26~28区にある。短辺50cm長辺1mの小判形をした柱穴が4つある。柱穴の長軸方向が南北であること、東西に溝が並行することから、棟方向は南北方向と考えられる。相対するP1とP2、P3とP4の間隔はそれぞれ2.3mと2.7mである。これらが一棟の建物の柱穴であるのか立替えがあったのかは不明である。時期は、同区から越中瀬戸が出土していることから、16世紀後葉とみる。SK08はX51~54Y54~57区にある。一辺7m以上の地山からの深さ50cmの方形の竪穴で、西側に一辺30~40cm厚さ15cmの大きな河原石を2列に並べている。南側には石列はなかった。石列は東面を揃えており、西石列の西側は竪穴を掘削し石を並べた後に石混じりの黄色土で埋め戻しているので、この西石列が建物の西端と考えられる。西石列と東石列は河原石ひとつ分の段差があり、その間は厚さ18cmの黄褐色砂礫土を敷き詰めて貼り床状になっている。西石列の東面に沿って厚さ2cm長さ40cmの板のようなものが打

ち込まれている。その板は壁板の可能性がある。東石列の東側は、貼り床状の黄色土の層が認められるが石列間に比べ厚みが一定せず軟らかい。SE10があることから、この部分は豊穴状であったのではないかと考えられる。裏込土や覆土から越中瀬戸・唐津・伊万里などが出土しており、時期は18世紀と考えられる。SK17は、X71~74Y74にある幅10.9m深さ30cmの方形の豊穴、覆土は黄色粘土混じりの黒褐色土で、SK08に似る。土台建物の下部になるかもしれない。

この他に、X23~37Y68・69区・X123~125Y75区・X67・68Y72~74にSK01・02・P1~15・21・22・24・25などに柱穴状の穴があり、そのあたりに建物があったと考えられる。P4から青花、P5から青花・土師器、P7から唐津・伊万里、P9から伊万里、P10から土師器皿、P13から瀬戸美濃天目茶碗・P17から土師器・越中瀬戸鉢・珠洲、P20から珠洲、P21から土師器鉢、P22・25から土師器皿、P24から瀬戸美濃皿・越中瀬戸が出土しており、時期は16世紀から18世紀までのものがある。

井戸SE01~19・SK03・07

井戸は、いずれも径60~140cmの素掘り円筒型である。SE13は石組であつたらしく河原石が崩れた状態で出土した。覆土の状態から、掘り方は径1.4mで石組の内径は80~90cmであったとみられる。遺物が出土した井戸は、SE03・10・14・15、SK07の5基であり、16世紀から17世紀代に作られたものと考えられる。

土坑SK05~16・18・19、SX01・02

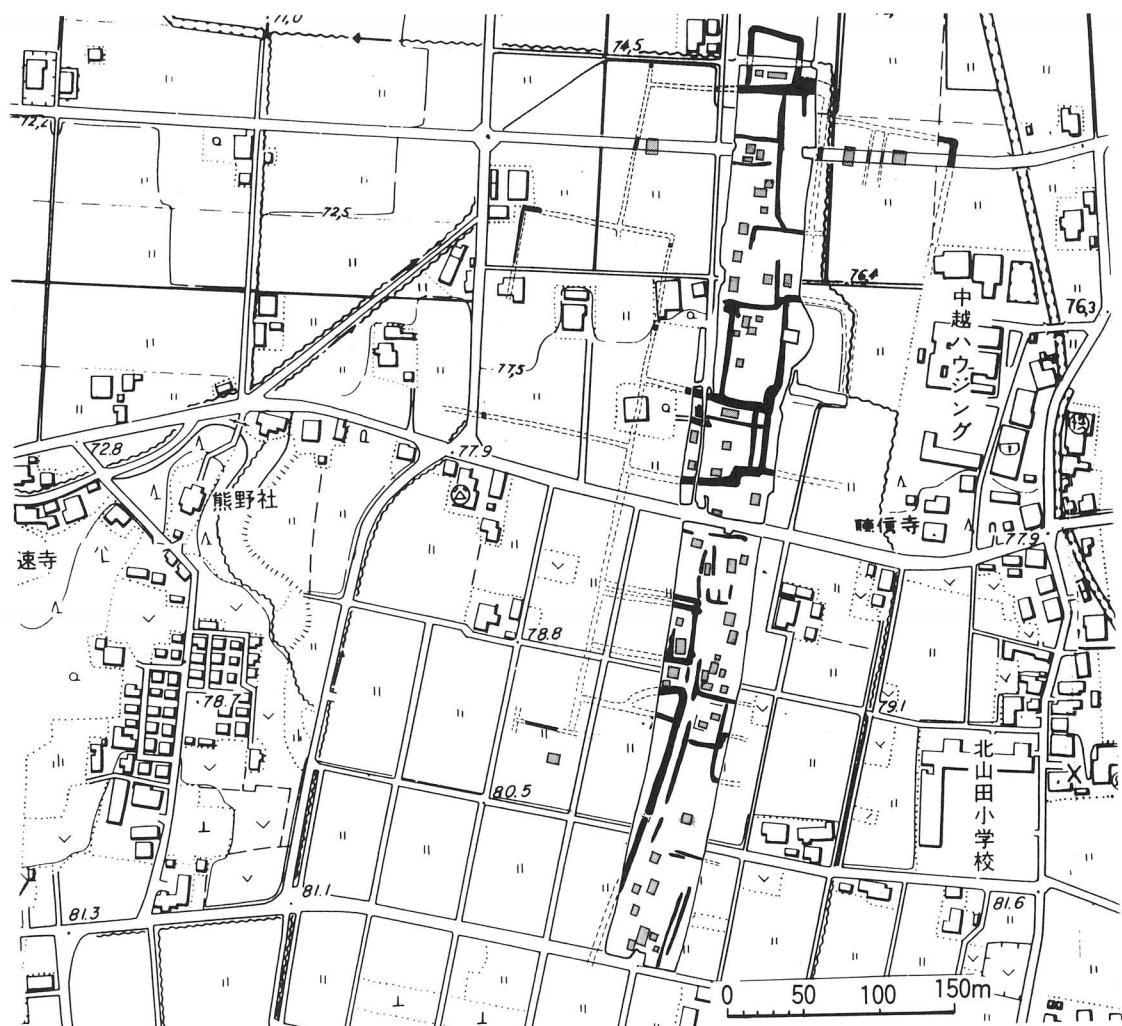
SK05は、X37・38Y69・70区にある一辺1mほどの方形の穴、瀬戸美濃の天目茶碗・すり鉢が出土した。SK06は、径1mの穴。伊万里碗が出土した。SK09は、X95Y19・20区にある一辺2mの穴。青磁・越前が出土しており、時期は16世紀中葉とみる。SK10はX87~89Y19・20区にある一辺4.3mの豊穴。珠洲・土師器が出土しており、時期は16世紀代とみる。SK11は、SK09とSK10の間にある幅1.5mのL字状の穴。瀬戸・美濃・土師器皿が出土し、時期は16世紀代とみる。SK12は、X32・33Y21・22区にある径3.5mの円形の穴。覆土は礫が詰まっていた。時期不明。SK13はX32・33Y32~34区にある一辺3m穴。越前甕が出土した。SK14はX32・33Y39区にある幅2.8m深さ60cmの穴とみるが、溝の可能性もある。青磁が出土しており、時期は16世紀代とみる。SK15は、SK13とSK14の間にある方形の穴。遺物はない。SK16は、X67・68Y65~67にある幅3.6m深さ15cmの方形の穴、溝の可能性もある。出土遺物はない。SK18は、一辺1.5mの穴、出土遺物はない。SK19は、X124・125Y75・76区にある一辺1.5mの方形の穴、瀬戸美濃が出土し、時期は16世紀中葉とみる。SX01・02はX46~50Y57・58区にある。SX01は幅2.3m深さ40cmで、覆土は石が多く含まれており、越中瀬戸・常滑・唐津・珠洲などが出土した。時期は18世紀代である。SX02は幅2.3m深さ40cmの豊穴で、遺物はない。

(3) 遺物（第19~21図、図版21・22）

中世・近世のものが整理箱で12箱ある。19はSD01出土の瀬戸美濃灰釉丸皿で、内面に菊花の印花文がある。16世紀中葉とみる。20はSK14出土の青磁碗で、体部に線引きの蓮弁がある。15世紀末から16世紀前葉とみる。21はSK01から出土した越中瀬戸のすり鉢である。22はSK07出土の瀬戸美濃のすり鉢で、茶色の鉄釉がかかる。16世紀末から17世紀初とみる。23はX22Y2区出土の越前すり鉢で、16世紀中葉とみる。24はSB01付近から出土した鉄釉越中瀬戸皿である。25はSK03から出土した灰釉越中瀬戸皿である。16世紀後葉とみる。26はSK05出土の越中瀬戸皿である。17世紀とみる。27・28はSD19出土である。27は青磁碗の底部。側辺を欠かし円盤状にしている。28は越前甕で、口縁部の断面が三角形となるのは14世紀後半代の特徴とされる。29はX32Y9から出土した珠洲甕の胴部である。内面に格子状押圧文があり、13世紀代に類例がある。30~36はSK08とその上層から出土した。30は緑釉唐津皿、31は緑釉瀬戸美濃皿、32は白磁皿、33は越中瀬戸皿、34は珠洲甕、35は瓦器鉢、36は鉄釉越中瀬戸鉢である。36は石組裏込土内から出土した。32・33は16世紀代にさかのぼるものとみられるが、その他は18世紀代とみる。37はSK09出土の越前甕である。

口縁部形態から16世紀中葉とみる。38はSK09付近から出土した瀬戸美濃の鉄釉天目茶碗である。16世紀前半代とみる。39はSD05出土の瀬戸美濃の天目茶碗である。16世紀前半代とみる。40はP21出土の土師器すり鉢である。41はP22出土の土師器皿である。口縁端部が軽く内湾するロクロ成形のもの。口縁部に油煙痕があり、灯明皿である。16世紀代とみる。42はSD08出土の青磁香炉である。16世紀代とみる。43はSK19出土の瀬戸美濃の灰釉皿である。内面にかたばみの印花文がある。16世紀前半とみる。44・45はX63~68 Y10・11区出土である。44は珠洲、45は土師器すり鉢である。46はSD22付近出土の珠洲甕である。口縁部形態は珠洲編年第Ⅲ期（13世紀後半）である。47はSE15出土の下駄である。側辺が平行で四隅が丸い形態は、上市町弓庄城跡SD1002や10地区SE27に類例があり、16世紀中葉の時期のものである。48は五輪塔火輪。49は石臼。いずれも桑山石製である。

50~83・86は、X206~211 Y75区から出土したものである。50~71は土師器皿である。いずれ口縁部をヨコナデする土師器である。口縁部が内湾しながら立つ50~53・55~65、外反する54、直立ぎみに立つ68~71がある。時期的には13世紀から15世紀までのものである。72は口縁部が外傾する土師器鍋である。内外面ハケ目がある。東海北陸自動車道関連調査で発掘されたSD5312や石川県辰口西部遺跡群に類例がある。13世紀後半から14世紀代の中世の土鍋と考えられる。73~78は珠洲すり鉢である。珠洲編年第Ⅰ~Ⅲ期（12世紀末~13世紀後半）のものである。79は珠洲壺である。珠洲第Ⅱ期（13世紀前半）か。80は珠洲甕である。珠洲編年第Ⅲ期（13世紀後半）か。81は常滑の甕とみられる。常滑編年6a型式（13世紀第4半期）とみる。82は瀬戸の花瓶である。瀬戸編年窯窓Ⅲ期（13世紀末から14世紀）にあたると見られる。83は碁石であろうか。86は硯である。緑灰色の凝灰岩製である。84はX124・125 Y73区から出土した瀬戸美濃の鉄釉天目茶碗である。16世紀代とみる。85は白磁瓶である。13世紀前半代とみる。



第5図 堀と建物の配置 黒塗り箇所は堀（破線は推定）網点は建物

6. 梅原安丸V遺跡 2 地区の概要

(1) 地形と層序（第2・6図）

2地区は海拔約63mである。遺跡の西側を大井川が、東側を権現堂川が流れしており、すぐ北側で合流する。西側と北側の水田は約50cm低く段差があるが、調査の結果、13世紀には大井川がそこまで流れていたことがわかった。

地表から地山面（黄色砂礫・粘土層）までの深さは20~40cmで、①層は現代の耕作土、②層黒色土（中世の包含層）である。②層は調査区西側でわずかに認められるが、全体的に以前の区画整理によって削平されている。

(2) 遺構（第12~17図、図版12~18、付図5）

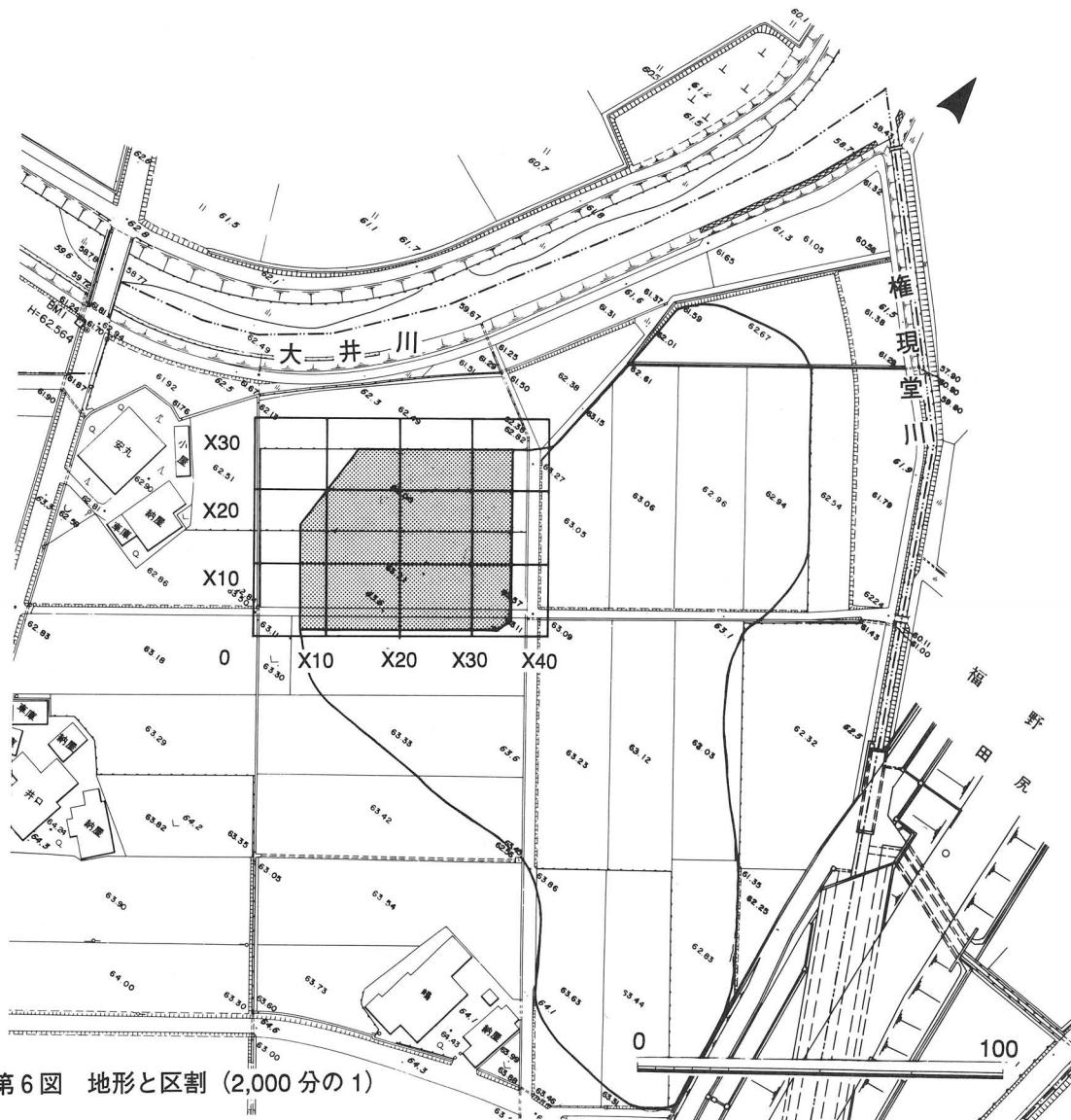
中世の掘立柱建物5・土坑24・井戸3・溝3・川2などがある。江戸時代以降の遺構（SK09・21~23）もある。

掘立柱建物

SB01~05の5棟があり、調査区中央から東寄りに立地する。建物の棟方向はほぼ南北にあるが、真北に対して18~34度の幅で変動がある。

SB01

調査区東寄りにあり、SB02・SX03と重なりがある。東西4間（10m）×南北4間（11.6m）の総柱建物である。棟方位は北に対して約30度東へ振れる。床面積は約116m²で、建物群のなかでもっとも大きい。柱間寸法は、桁行は



$3.3+3.2+3.2+2.2$ m梁行は $2.6+2.6+2.8+2$ mで、建物の南側と東側の1間が狭い。柱穴の掘方は30~40cmの丸いもので、深さは5~60cmで幅がある。P 7・9・12・14・17・19がとくに深いことから、中2間を主屋として4面に庇がついた建物であったと考えられる。柱は残っていないが、柱穴の大きさから柱の太さは15cm前後であったと推定できる。出土遺物はない。時期は、舟着き場と同時期と考えられるので13世紀前半とみる。

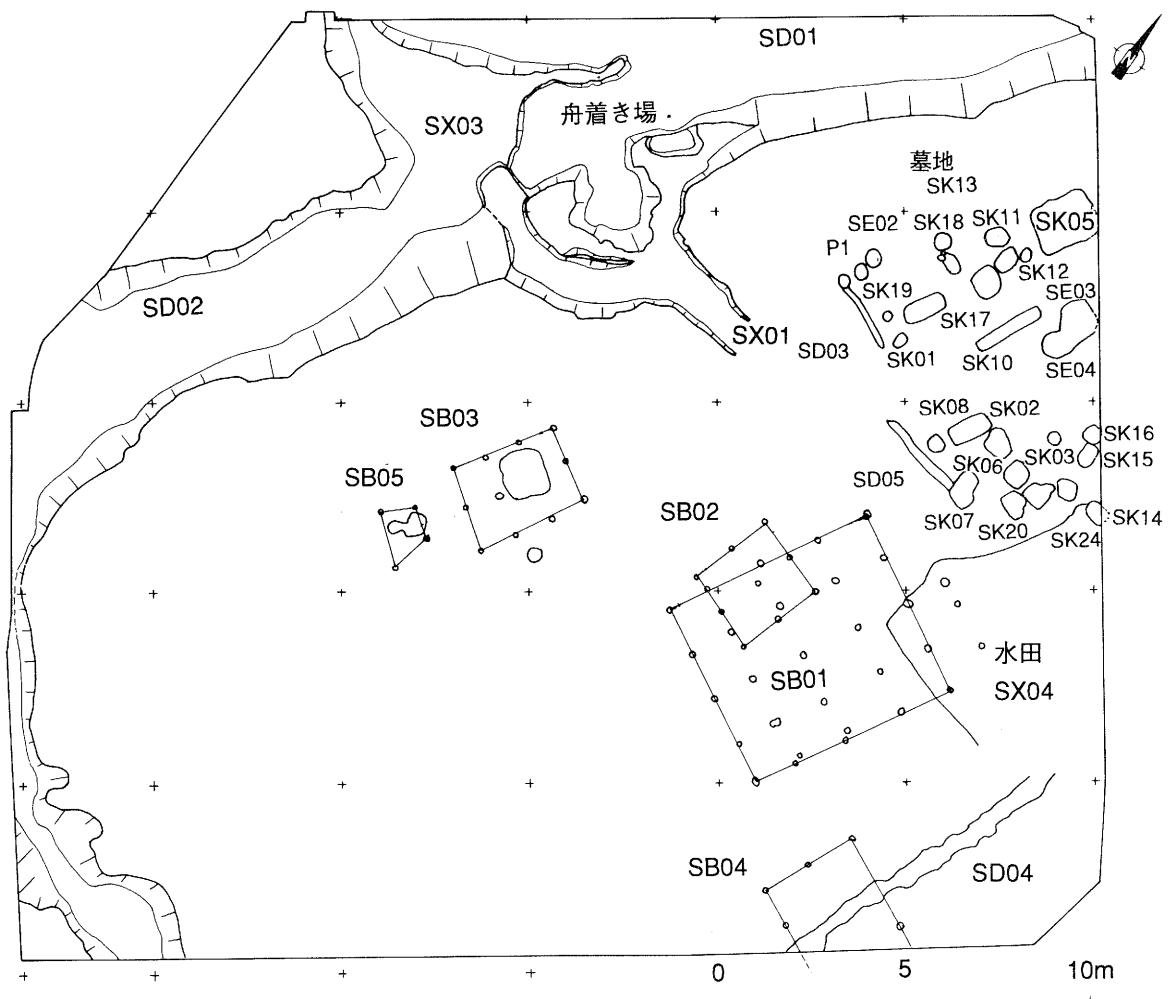
SB02

SB01と重なりがある。東西2間(4.5m)×南北2間(4.7m)の総柱建物である。棟方位は北に対して約18度東へ振れる。床面積は約 21m^2 である。柱間寸法は、桁行は $2.3+2.4$ m梁行は $2.25+2.25$ mである。

柱穴の掘方は20~30cmの丸いもので、深さは5~40cmで、東側列が浅い。柱は残っていないが、柱穴の大きさから15cmほどであったと推定できる。出土遺物はない。柱穴の覆土がSB01のものより灰色がかったりることから、時期はSB01より新しい13世紀後半とみる。

SB03・05、SK01

SB03は東西2間(4.1~4.6m)×南北3間(5.8~6m)の南北棟の建物である。棟方位は北に対して約34度東へ振れる。床面積は約 21m^2 である。柱間寸法は、梁行は1.8~2.4mで、桁行は1.9~2.1mである。建物内部北寄りには、一辺2.4m深さ10cmの浅い方形の掘り込みSK26がある。建物内部南寄りには中柱があるが、SK26のある部分には中柱が認められない。SK26部分が柱を必要としない土間空間であったことが想定される。柱の掘方は20~30cmの丸いもので、深さは10~20cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから柱の太さは15cmほどであったと考えられる。出土遺物はない。時期は13世紀代とみる。



第7図 遺構概略配置図

SB05はSB03の南側に隣接する付属屋とみられる。東西が1.8mと3m南北が1.8mと2.3mの間隔のある4本の柱穴がある。内側に短辺1.1m長辺2m深さ6cmの土坑があり、それを覆う程度の簡単な上屋を構成していたものであったと想像する。柱穴の掘方は25cm前後の丸いもので、深さは5~15cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから太さは15cmほどであったと推定できる。出土遺物はない。時期は13世紀前半とみる。

SB04

SB01の東側にある。東西3間以上(5.4m以上)×南北2間(5.4m)の東西棟の側柱建物である。棟方位は北に対して約68度西へ振れる。床面積は約30m²以上である。柱間寸法は、梁行は2.7m、桁行は不定である。柱穴の掘方は30cm前後の丸いもので、深さは15~30cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは10cmほどであったと推定できる。出土遺物はない。時期は棟方向がSB02と近いことから13世紀後半とみる。

井戸SE01・03・04

SE01はSB03の東側に接しており、この建物に付属する井戸と考えられる。上部径約80cm底径50cm深さ約1.25mの素掘り井戸である。出土遺物はない。時期は13世紀前半とみる。

SE03・04は調査区東寄りに重なってある。SE03は上部径約1.5m底径90cm深さ約1.6mの素掘り井戸である。出土遺物は土師器皿がある。SE04は上部径約1.8m底径1m深さ約1.6mの素掘り井戸である。覆土は黒褐色土である。出土遺物は珠洲すり鉢がある。覆土の切り合いでSE04が新しい。時期はSE04出土の珠洲の年代からは14世紀前半とみる。

豎穴SK05

調査区北東部にある。南北3.2m東西2.5m深さ85cmの豎穴である。壁面が直立する。覆土は黒褐色である。出土遺物は土師器皿・珠洲すり鉢がある。時期は14世紀代とみる。地下式の倉庫であろうか。

土坑と溝

調査区北東部に長方形と方形の土坑群が集中している。これらの土坑群は、東西二群のまとまりに分けられ、SD03・05は各群の南側を画しているようにみられる。土坑はその形態などから墓坑と考えられるが、土坑内から遺骨などの出土はない。ただ土坑群の西側にある川SD01と、土坑群の東縁の包含層から火葬骨とみられる白色化した骨片が出土している。土坑群の時期は建物群と軸方向がほぼ共通であることや重なりもないことから、13世紀代に同時に存在したものと考えられる。

西群の土坑と溝SK01・10~13・17・18、SD03・10

SK01は幅1.05m長さ2.35m深さ15cmの長方形のもの。覆土は褐色砂礫土で、壁面が直立していて木棺墓を思わせる。出土遺物は土錘がある。SK11~13・17・18は、一辺1~1.5m深さ15cmの方形あるいは円形のもの。出土遺物はない。

SD03は幅30cm長さ4m深さ10cm、SK10は幅65cm長さ3.8m深さ30cmの長方形のもの。覆土は礫混じり褐色土で、壁面が直立しており木棺墓を思わせる。出土遺物には摩滅の著しい打製石斧がある。摩滅は人為的なものではなく、川を流れてきたためにできたものとみられる。中世の人が拾って副葬したものかもしれない。SK01は木棺墓としては長いので東西の各墓群を画する溝の可能性もある。

東群の土坑と溝SK02・03・06~08・14~16・20・24

SK08は幅1.05m長さ2.25m深さ40cmの長方形のもの。覆土は褐色砂礫土で、壁面が直立していて木棺墓を思わせる。SK03・06・14~16・20・24は一辺80~130cm深さ10~20cmの方形のもの。覆土は黄褐色土である。SK02から珠洲叩き壺の胴部片、SK03から土師器皿の破片が出土した。

水田SX04と溝SD04

調査区東寄りにある。SX03はSB01と重なりがあり、SD04はSB05と重なる。SX04は、地山が粘質土の部分を南北12m以上東西約12mを平坦に削平した面で、西側と南側に深さ20cmほどの段差がある。平坦面の主軸方向は北に対し

て約15度東にふれる。平坦面には幅10cm弱の小さな凹凸があり、鍬や鋤による耕作の跡とも見られる(図版18)。SD04は、幅90cm深さ15cmの直線的な溝で、溝底の深さから南から北へ水の流れるようになっており、SX04の東南隅に至ることから、水田への給水用の水路と考えられる。出土遺物は土師器皿がある。時期は15世紀とみる。

川SD01・02・05

SD01は、調査区西端にある深さ約1.7mの川である。当時の川幅は不明であるが、現在西方約30mに流れている大井川が、かつてはここに右岸があったものと考えられる。覆土は上半分近くは灰黒色土で、江戸時代以降の堆積土である。その下には黄褐色礫が60cmほど堆積し、川岸および最下層は黒色土である。出土遺物は土師器・珠洲があり、時期は12世紀後半から13世紀である。

SD02は、調査区南西部にある幅6.5m深さ1mの川で、SD01に合流する。大井川が上流で分かれた分流が再度合流したものであろう。覆土は上半分が黒褐色土、下層が褐色砂礫土である。出土遺物は、土師器・珠洲・青磁・白磁があるが、下層には遺物はまったく含まれないので、舟着き場が機能していた時には、水の流れはほとんどなかったとみられる。SD05は、調査区南部にある幅5.2m深さ1.25mの川である。SD02である可能性もあるが、川幅が異なること、権現堂川の分流が遺跡の南側にあったとみられることから、別の川であろう。覆土は褐色礫土を間にはさんだ黒色土である。出土遺物はない。

舟着き場SX01～03

舟着き場は、調査区中央西寄りにあり、旧大井川SD01の右岸にある。舟溜まりSX02・03とその周りの平坦面、そこへ下りる道SX01からなる。SX01は陸から舟着き場へ下る道である。幅2～2.7m深さ30～45cmで、SX02の東から下りて、南側を回りSD02の旧河道を渡り、SX03の南側の平坦面に至る。SD02を渡るところで、河底埋土の上に幅1.5m長さ1.8mにわたり厚さ10cmの黄色土を敷いている。SX02は、川岸を長さ15m幅5m高さ30～40cmを平坦に削平し、中央に一辺4～5m深さ1mの掘り込みを設けたもの。SX03とつながるところは幅3.3m深さ60cmとやや狭く浅くなっている。平坦面の覆土は黒褐色土、掘り込み内の覆土は、上層は黄褐色土あるいは黒色土、下層は黒灰色土で、箸・漆器碗などの木製品が含まれていた。

SX03は、SD02の河道を幅5m長さ6m深さ40～50cm掘り込んだもので、SD01との境には杭が打ち込まれていた。杭の遺存していた長さからみてSX03部分での水面から川底までは約60cmほどであったと推定できる。SX03の南側に幅1.5～6m長さ10mの平坦面がある。水位はこの面の境にある。

(3) 遺物 (第22・23図、図版23～25)

縄文時代晩期、奈良時代、中世ものが整理箱で約17箱ある。ほかに、江戸時代以降の陶磁器などがある。

A. 縄文時代

縄文土器(87～90)・磨製石斧・打製石斧(図版23)がある。87は条痕地に平行沈線間に列点文を施す深鉢。88は斜縄文の深鉢。89は条痕文がある深鉢。90は無文の深鉢底部で、底に網代痕がある。時期は87・89が晩期後葉の下野式とみられる。88・90は不明であるが、後期後葉であろうか。

B. 奈良時代

91は、須恵器高台杯である。厚手であることなどから時期は8世紀代であろう。

C. 中世

土師器、珠洲、越前、瀬戸、青磁、白磁、土錘、漆器碗・箸などの木製品がある。

土坑SK01～03 (92～94)

92はSK03出土の口縁部ヨコナデの土師器。13世紀代か。93はSK02出土の珠洲甕の胴部。14世紀代か。94はSK01出土の土錘である。

井戸SE03・04 (98・100)

98は口縁部ヨコナデの土師器皿である。口縁部が少し立つもので、13世紀後半か。100は珠洲すり鉢である。口縁端面が狭く水平であることから、時期は珠洲編年第IV期（14世紀前半）である。

溝SD04 (99)

99は口縁部が外反するヨコナデ土師器皿である。15世紀代とみる。

豊穴SK05 (95~97)

95・96は口縁部ヨコナデの土師器皿である。口縁部の外傾度が強い96は14世紀代とみる。97は珠洲すり鉢で、口縁端面が外傾するので、時期は珠洲編年第III期（13世紀後半）である〔吉岡1994〕。

舟着き場SX01・02 (101~104・145~160)

101は底部に糸切り痕を残すロクロ土師器で12世紀後半、102は口縁部ヨコナデの土師器皿で13世紀代とみる。103は珠洲の叩き目甕・壺の胴部。叩き目が細かい。105は珠洲すり鉢で、口縁端面が狭く内面に張り出すことから、時期は珠洲編年第II期（13世紀前半）である。104は白磁皿である。145は体部内外面黒の漆器碗である。内外面黒色で、高台裏に漆を塗らないなどの特徴は、県内では13世紀代の漆器に認められる〔久々1986〕。146は2ヶ所に浅い彫り込みがある木製品で、包丁などの柄と考えられる。146は、一方に突起を作り出す木製品で、刀形代のようにもみえるが明らかでない。149~157は箸である。箸は破損品も含めると約100本が出土した。147は竹製のヘラ。148は先端が尖った木製品である。158は下駄の足のようである。159はカシやクヌギのような堅い木で、方形の柄穴がある。鋤・鍬類の柄穴部分とみられる。焼け焦げている。160は回りをきれいに切断した板である。箱物の一部か。161は周囲に不定な削りを施した板で、先端が焦げている。このほかに、自然木の枝、斧で削った木屑などもたくさん出土しており、ここで木製品の加工が行われたことがわかる。

川SD01・SX03 (106~116)

106は高台付土師器碗・皿の台部とみられる。平安時代か。107は底部に糸切り痕を残すロクロ土師器で12世紀後半、108は珠洲叩き目甕の口縁部。口縁部が方頭であるので、時期は13世紀後半である。109~114は珠洲すり鉢。109・110は口端面が狭く水平または外傾し、時期は13世紀前半である。112・113もおろし目が粗く13世紀前半とみる。114はおろし目がやや密で、13世紀後半とみる。115・116は珠洲小型壺である。115は胴部に櫛目の平行線・波状文があり、13世紀後半であろう。

川SD02 (117~131)

117・120は底部に糸切り痕を残すロクロ土師器で12世紀後半。118・119・121~126は口縁部ヨコナデの土師器である。118~124は13世紀代、125・126は、125が上向き126が下向きで重なって出土した。底部が平坦で口縁部が立つもので、14世紀代とみる。127・129は珠洲甕の口縁部と胴部。127は13世紀前半である。128は珠洲すり鉢。130は12世紀代の白磁皿。131は体部外面に蓮弁文を刻む青磁碗で、13世紀代のものである〔山本1995〕。

包含層 (132~144)

132~138は珠洲のすり鉢である。132~137は口縁端面が狭く水平または外傾しており、珠洲編年第II期から第III期（13世紀）、135・138は口縁端面がやや広がるもので、時期は14世紀である。139は珠洲の叩き目甕・壺の胴部で、叩き目に「+」の文様が浮き出ている。装飾叩打文とよばれ、第I・II期のものに限って認められるといふ〔吉岡1994〕。

140~142は越前である。140は口縁部断面がL字状となる甕で、常滑編年5型式に似る。時期は13世紀第2四半期とみる〔中野1995〕。141は口縁部が幅狭くなり肥厚する甕で、越前大甕IV群a（16世紀前葉）にあたる。142は小型壺とみられるが、白色がかかった小豆色をしており、13世紀代のものと思われる。143は白磁碗である。144は内面に緑灰色の灰釉がかかっている。瀬戸の平碗の底部とみられる。

（久々忠義）

7. 梅原胡摩堂遺跡13地区の概要

(1) 地形と層序（第18図）

13地区は、海拔75mである。東側に権現堂川が流れる。地形は平坦で北へ向かって緩やかに傾斜する。地表から地山面までの深さは約70cmで、その間は4層に分かれる。①層は耕土、②層は旧耕土または盛り土、③層は褐色土で古代・中世の包含層、④層は縄文時代の包含層である。古代・中世の遺構は③層と④層の境で検出される。

(2) 遺構（第18図、図版19・20、付図6）

平安時代の畠跡3、中世の掘立柱建物2がある。調査区東南部で昭和前期の権現堂川の川跡（SD01）がある。

A. 平安時代

畠跡SF01・02・03

SF01は、幅10～30cm深さ3～15cmの溝が8条からなるもの。溝と溝の幅（畠にあたる部分）は1.5～1.7mである。溝の方向は、北に対して約20度西へ振れる。SB01P2と重なりがあり、覆土の状況からSB01より古い遺構であることがわかる。SF02は、幅15～20cm深さ5～15cmの溝が6条からなるもの。畠幅は1.3～1.6mである。溝の方向は、北に対して約13度西へ振れ、SF01の方向よりやや東へ傾いている。SF03は、幅25～30cm深さ5～10cmの溝2条からなるもの。溝と溝の幅（畠にあたる部分）は1.5mである。溝の方向は、北に対して約26度西へ振れる。

溝SD02

SD02はSF01と重なりがあり、SF02より時期が新しい。覆土は褐色土である。遺物はない。

B. 中世

掘立柱建物SB01・02

SB01は、調査区南寄りにあり、平成6年度調査で南側柱列が発掘されている。東西2間（5.4m）×南北2間（4.8m）の総柱建物である。棟方向は北に対して約5度東に振れる。床面積は約25m²である。柱間寸法は、梁行2.6+2.7m桁行2.4+2.4mである。柱穴の掘方は径20～30cmの丸いもので、深さは40～50cmである。柱は残っていないが、柱穴の覆土の違いから柱の太さは12～15cmほどであったと考えられる。出土遺物はなく、詳しい時期は不明である。

SB02は、調査区東寄り、旧権現堂川の川縁にある。東西1間（2.2m）×南北3間（7.4m）の南北に細長い建物である。棟方向は北に対して約3度東に振れる。床面積は約16m²である。柱間寸法は、梁行2.5+2.8+2.1m桁行2.2mである。柱穴の掘方は径20～30cmの丸いもので、深さは東柱列が5～20cmと浅く、西柱列は50～80cmと深い。柱は残っていないが、柱穴の覆土の違いから12～15cmほどであったと考えられる。出土遺物はなく詳しい時期は不明である。

(3) 遺物（第24図、図版26）

縄文時代後期、平安時代、中世のものが、整理箱で2箱がある。

A. 縄文時代（162～166）

162は、外面に斜縄文、胴上部に平行沈線を巡らす深鉢である。口縁部には突起状の波頂部が付くらしい。163は無文の口縁部に2条の沈線が巡る深鉢である。164は斜縄文の深鉢、165は横方向の条痕文らしき模様がある深鉢である。166は、口縁部をヨコナデしたような不鮮明な凹線文がある。これらの時期は、後期末葉と考えられる。

B. 平安時代（167～169）

167は、須恵器高台付きである。168は須恵器碗、169は土師器甕口縁部である。169の口縁部が立って内傾する特徴は9世紀中頃とみる。

C. 中世（170～177）

170・171・173はヨコナデ土師器皿、172はロクロ土師器碗である。174は株洲すり鉢、175・176は青磁、177は渥美の三筋壺、178は鉄釉瀬戸美濃の小壺とみられる。12世紀後半から15世紀代までのものである。（佐藤聖子）

IV　まとめ

1. 梅原加賀坊遺跡1地区では、縄文時代・奈良・平安時代・中世の各時期の遺物が出土し、8世紀後葉から9世紀中葉の溝（水路）が発見された。隣接する東海北陸自動車道の敷地内の調査では、この溝が接続する溝とそれにはほぼ直交する溝が発見されている。その溝の方向は、梅原地内の他所で発見されている古代遺構の方向とは一致しないが、当時の土地区画の様子を知る手がかりとなる。
2. 梅原落戸遺跡10地区では、奈良・平安時代の遺構が広く点在することがわかった。
3. 梅原胡摩堂遺跡11地区では、堀で縦横に区画された町割りの様子がわかった。このことは、一向一揆がさかんな頃に梅原に寺内町が作られていたことを物語る。
4. 梅原安丸V遺跡2地区では、縄文時代晚期・奈良時代・中世の各時期の遺物が出土し、13世紀から14世紀までの掘立柱建物・井戸・土坑（墓）・舟着き場・水田・水路・川が発見された。
遺跡の周辺には、明治時代初期に舟着き場があり、川舟がしきりに発着していたといわれる。また、ここから城端へ向かう道があり、問屋業者の倉庫もあって荷物が往来して賑わっていたと伝えられている〔井口1960〕。鎌倉時代にさかのぼる舟着き場とみられる遺構が発見されたことで、この地域が中世・近世を通じて南砺地域の輸送・交通の拠点であったことがわかる。また、当時この地域は山田郷とよばれ、京都円宗寺の荘園石黒荘の一部であった。鎌倉時代の古文書によれば、山田郷には荘園の年貢を納めた倉があり、水運を利用して年貢が輸送されていたことがわかっている〔平凡社1994〕。掘立柱建物には、梁間桁間同数の倉庫とみられる建物や馬小屋とも考えられる土間のある建物もあり、この場所が荘園年貢を集積し輸送される基地であった可能性がきわめて高い。
5. 梅原胡摩堂遺跡12地区では、平安時代の畠跡が見つかった。古代の開発の様子を知る手がかりとなる。

（久々忠義・佐藤聖子）

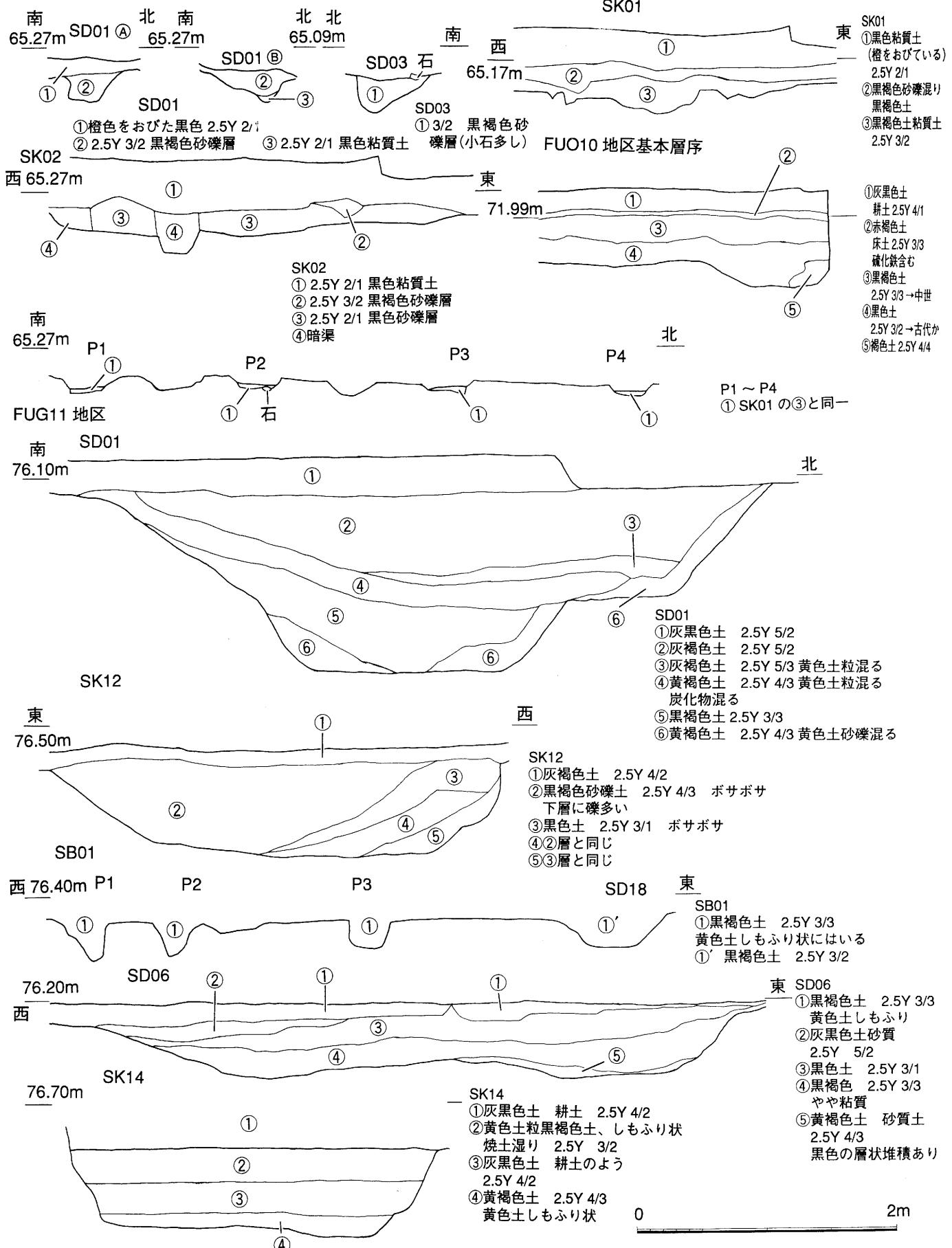
参考文献

- 富山県埋蔵文化財センター 1989『東海北陸自動車道遺跡試掘調査報告－福光町編－』
福光町教育委員会1991『富山県福光町梅原安丸遺跡群I』
財団法人 富山県文化振興財団1991『東海北陸自動車道関連発掘調査概報(2)』
福光町教育委員会1992『富山県福光町梅原安丸遺跡群II』
福光町教育委員会1993『富山県福光町梅原出村遺跡群I・梅原上村遺跡群I』
富山県福光町・医王山文化調査委員会1993『医王山文化調査報告書 医王は語る』
福光町教育委員会1994『富山県福光町梅原出村遺跡群II・梅原上村遺跡群II・梅原落戸遺跡群I』
財団法人 富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』
福光町教育委員会1995『富山県福光町梅原落戸遺跡群II』
福光町教育委員会1995『富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群II』
福光町教育委員会1996『富山県福光町梅原落戸遺跡群III』
福光町教育委員会1996『富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群III』
財団法人 富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
財団法人 富山県文化振興財団1996『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告』
岩倉節郎・上野章1985「井波町犬藪遺跡出土遺物の紹介」「大境」第9号
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』
中野晴久1995「常滑・渥美」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編
久々忠義1986「富山県内出土の漆器について」「大境」第10号
井口仁志1960『梅原小杉耕地整理事業誌』
平凡社1994「山田郷」「日本歴史地名大系第16巻富山県の地名」
井上喜久男1992「尾張陶磁」
上市町教育委員会1985『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』

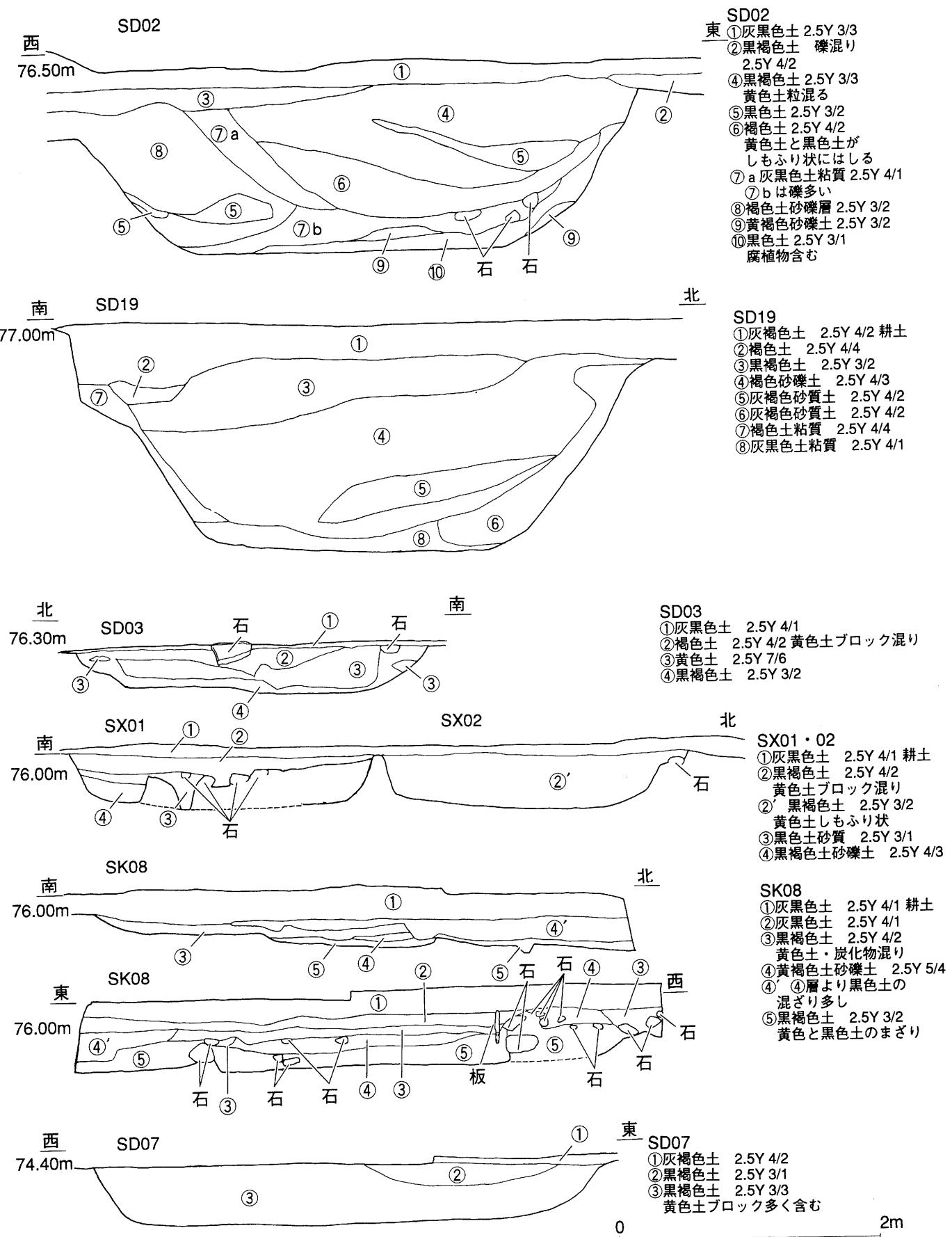


第8図 地形と区割 (2000分の1)

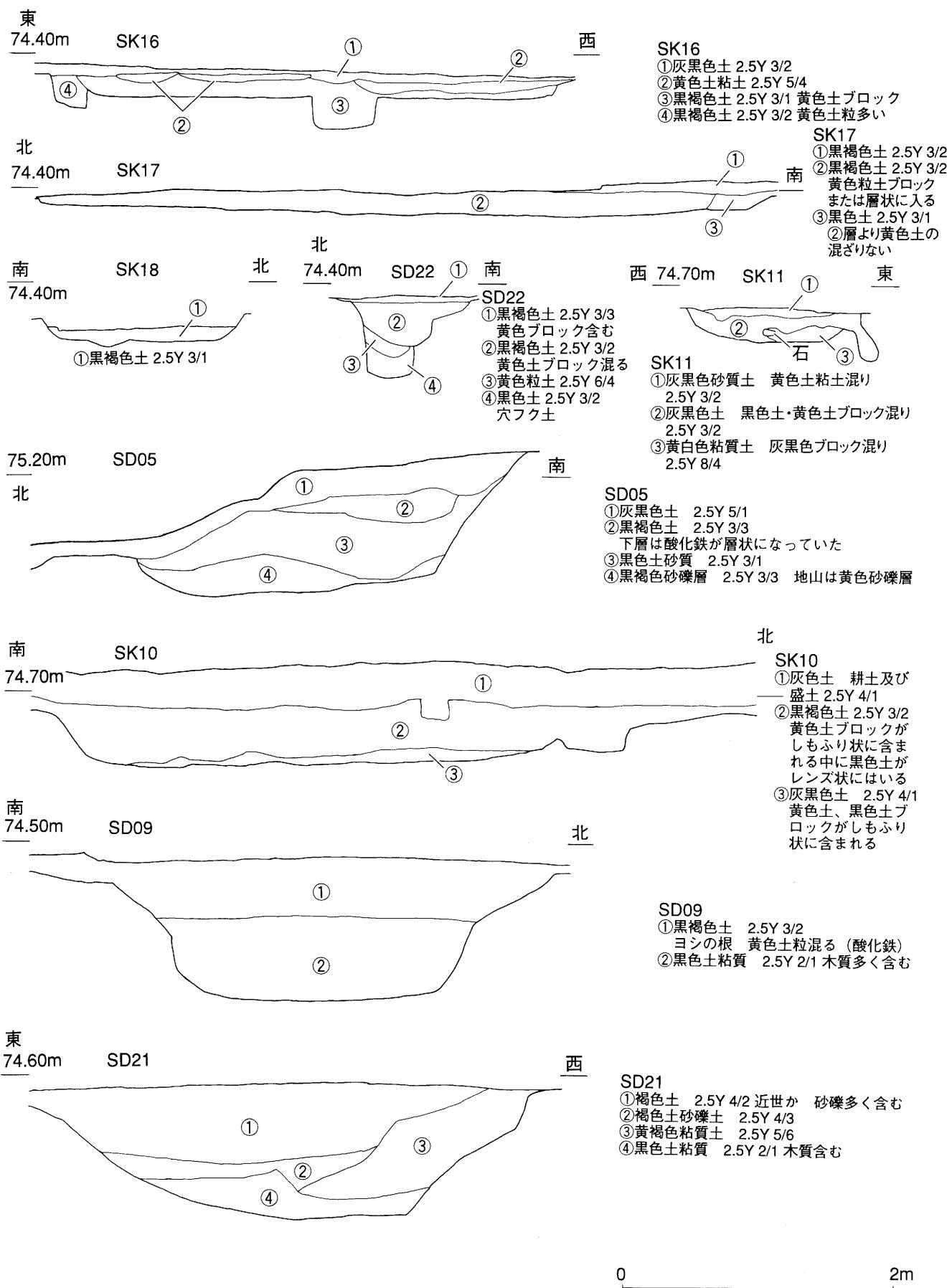
FUKG1 地区



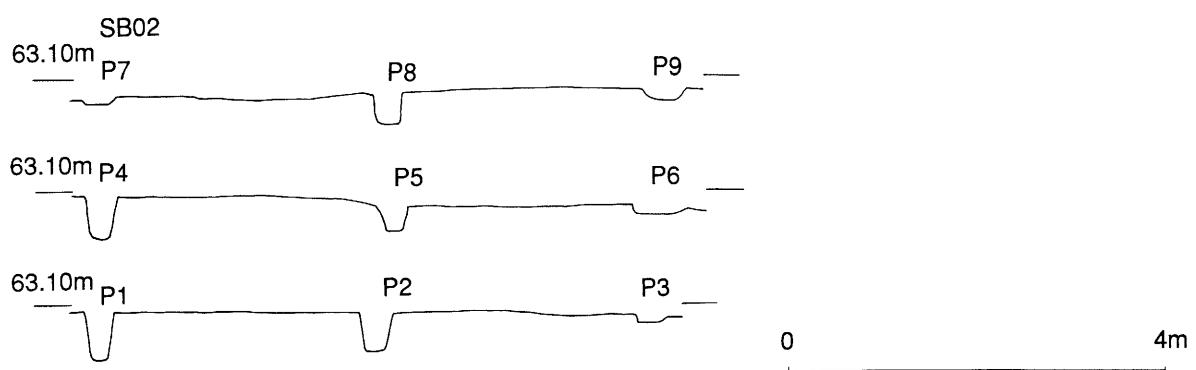
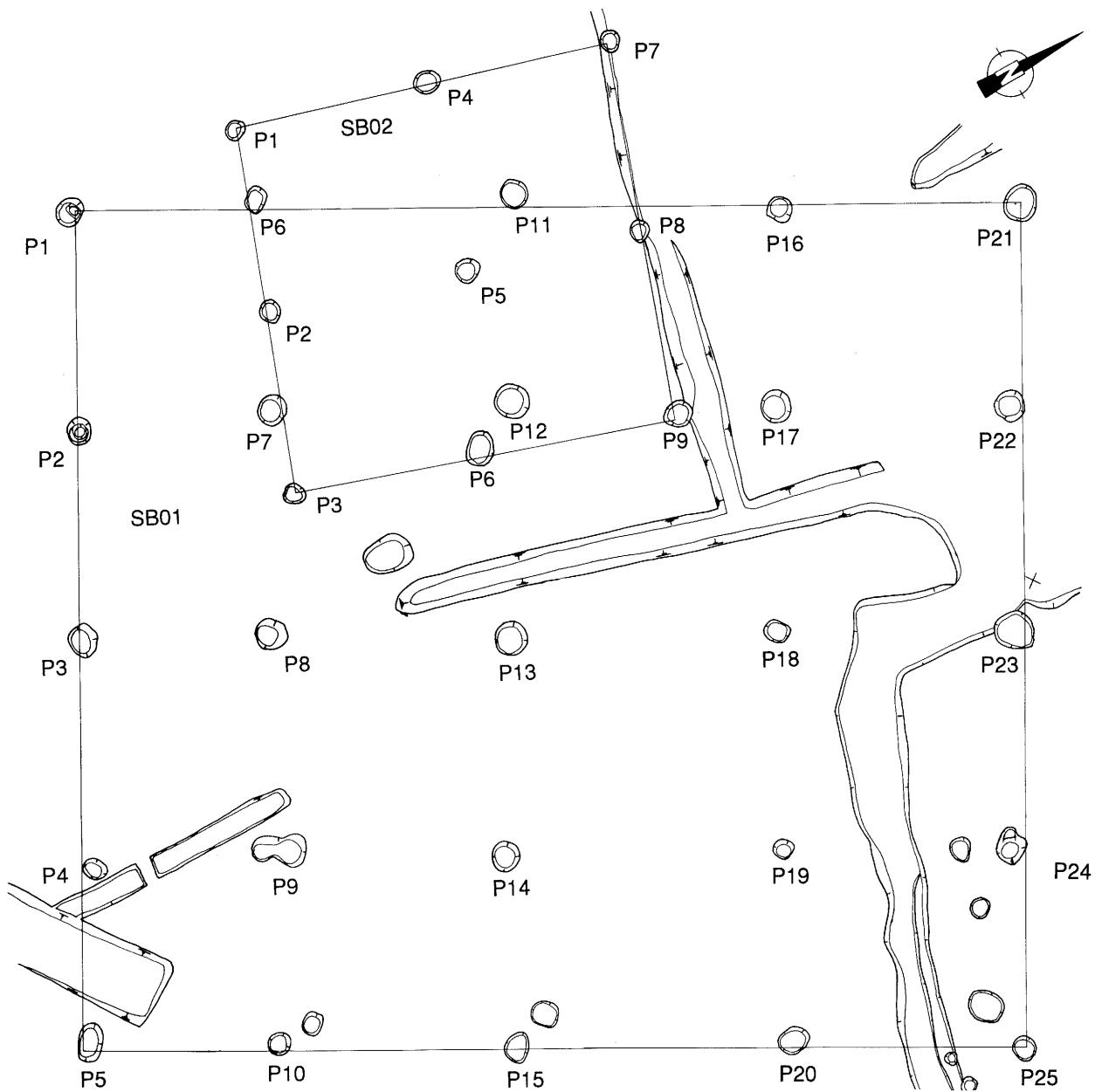
第9図 梅原胡摩堂1地区・梅原落戸10地区・梅原胡摩堂11地区的遺構 (11地区・SB01、SD06は1/30)



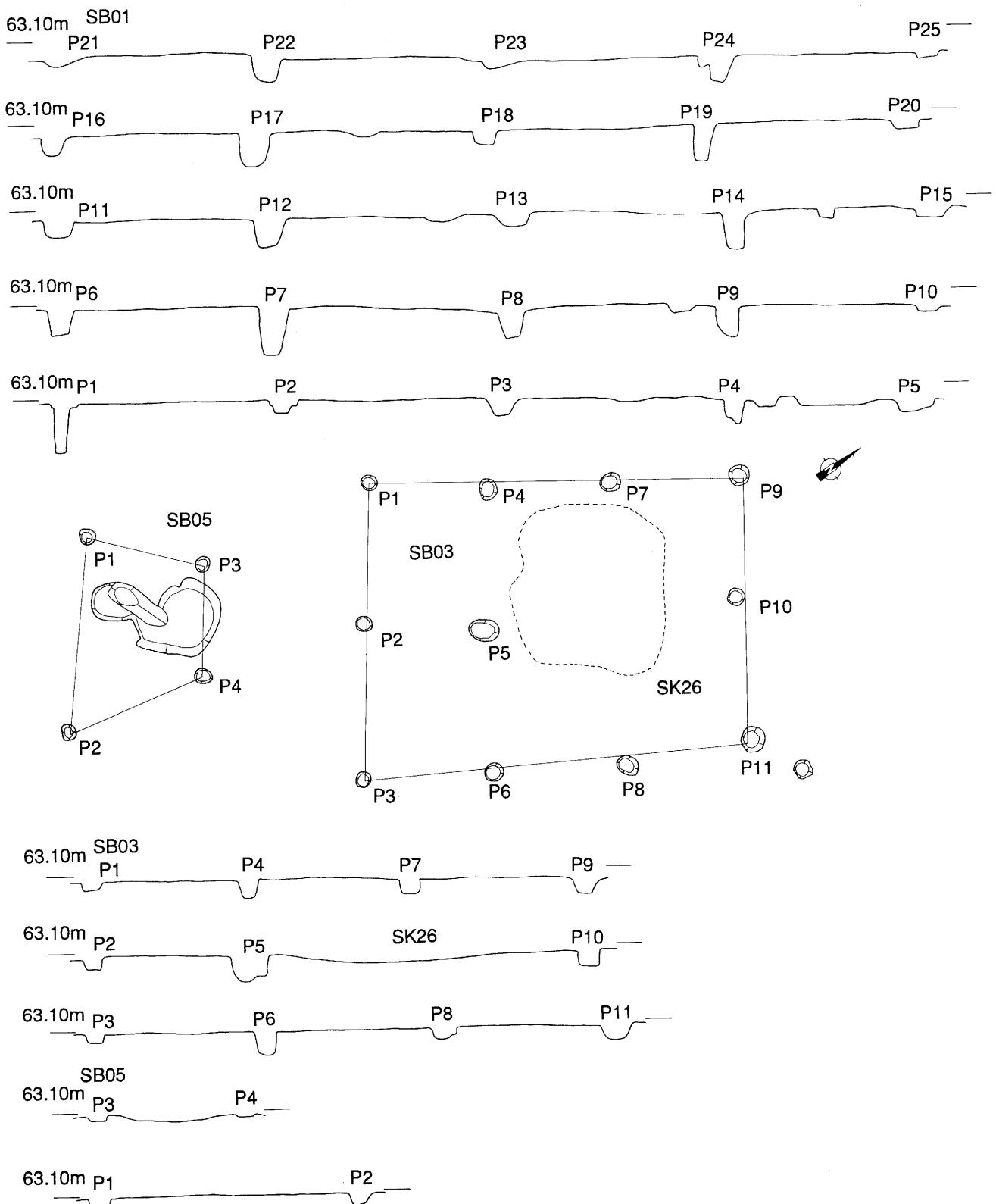
第10図 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺構(2) (SX01・02、SK08は1/30)



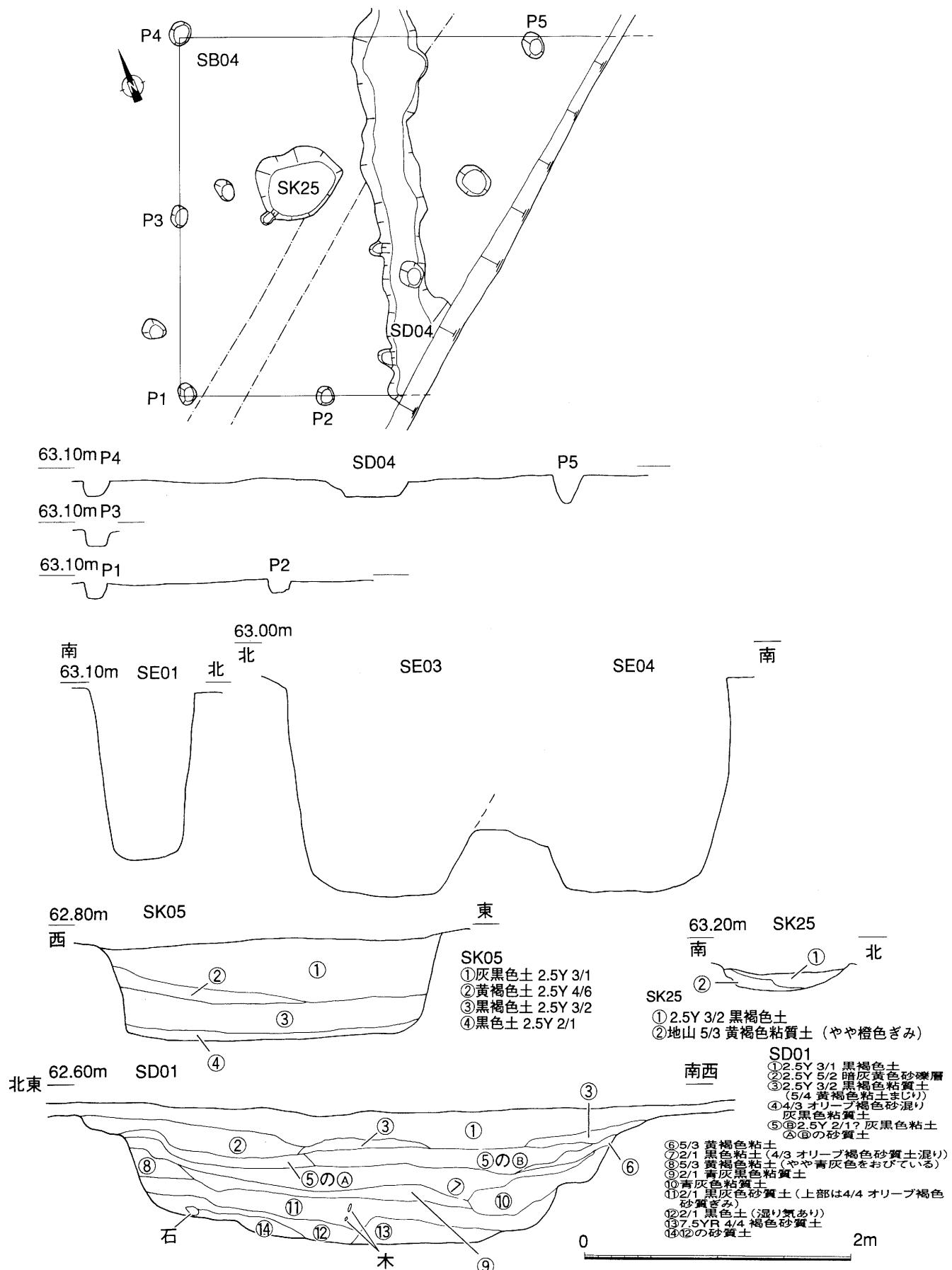
第11図 梅原胡摩堂11地区の遺構(3) (SK17は1/80)



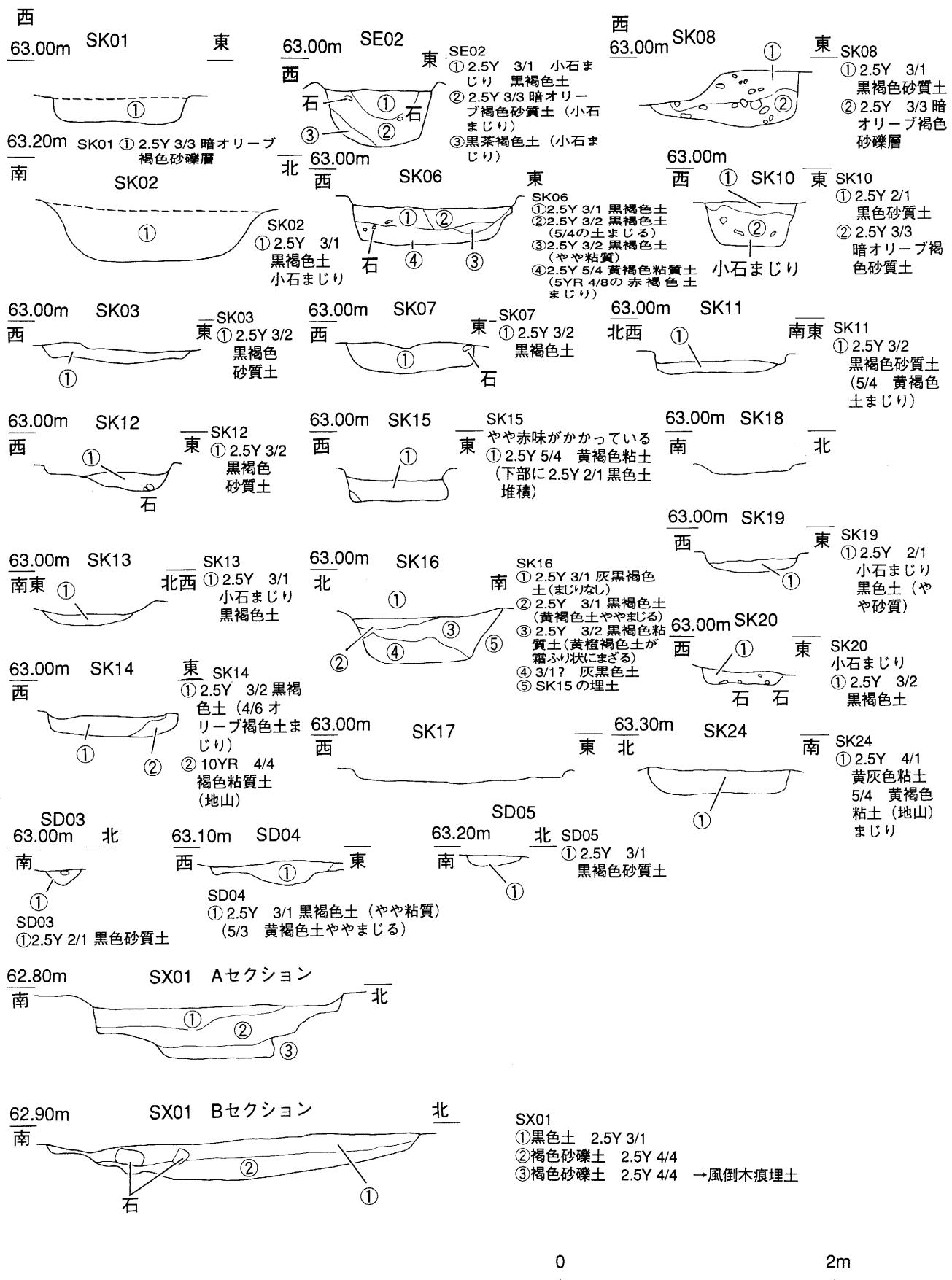
第 12 図 梅原安丸 V 遺跡 2 地区の遺構 (1) (SB02 断面図は 1/30)



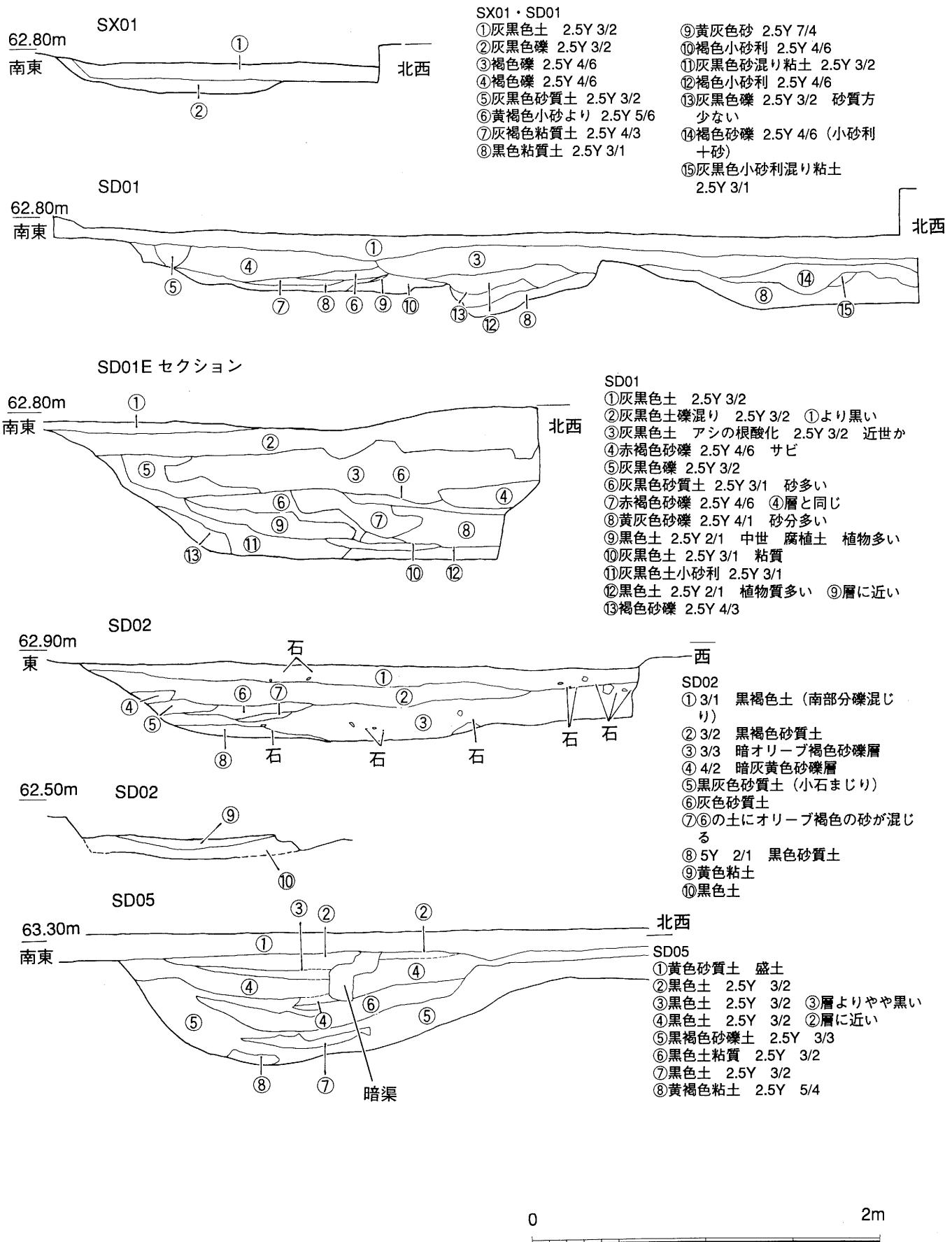
第13図 梅原安丸V遺跡2地区の遺構(2) (SB03・05の平面図は1/80)



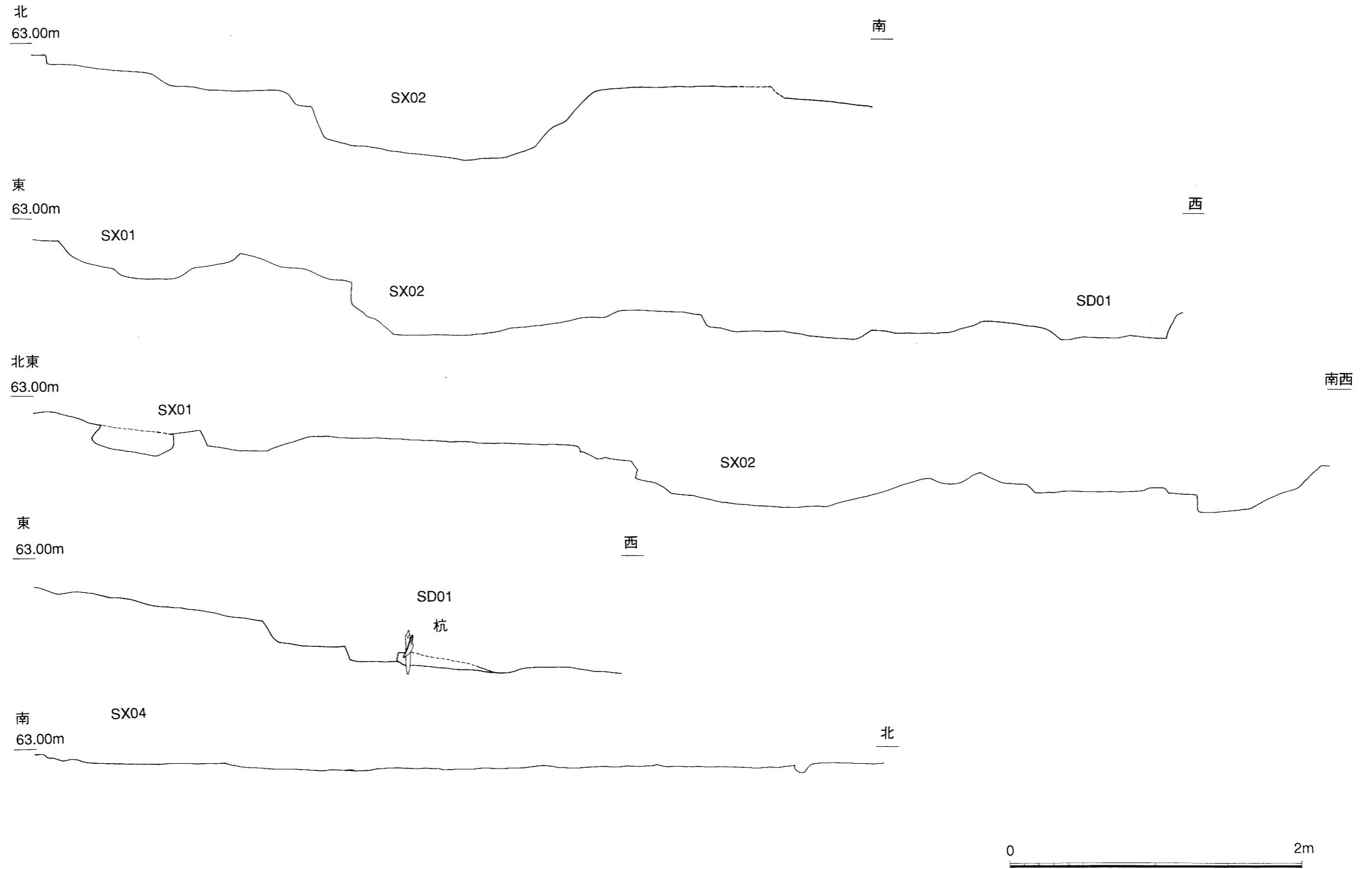
第14図 梅原安丸V遺跡2地区の遺構(3)



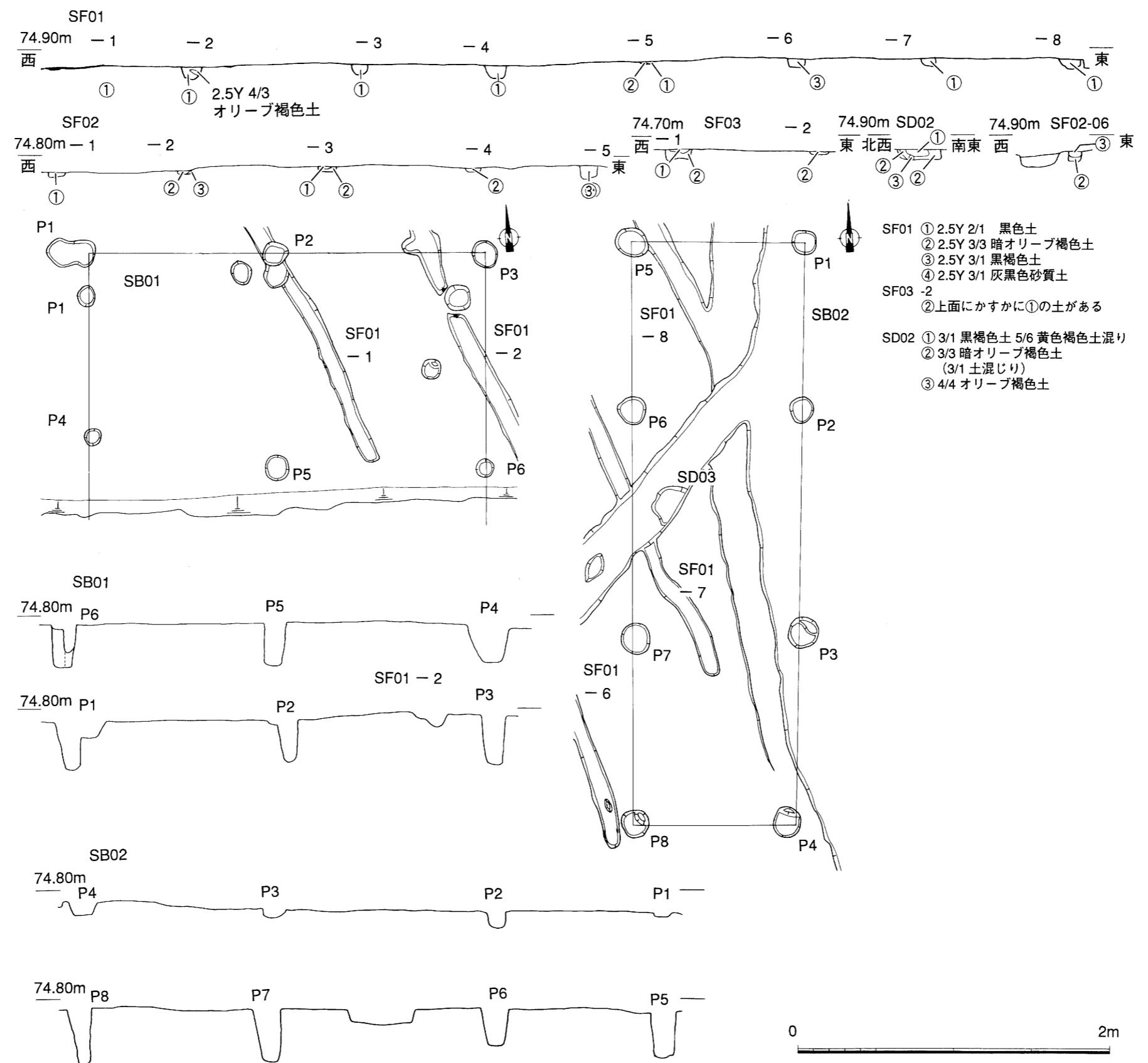
第15図 梅原安丸V遺跡2地区の遺構(4)



第 16 図 梅原安丸 V 遺跡 2 地区の遺構 (5)

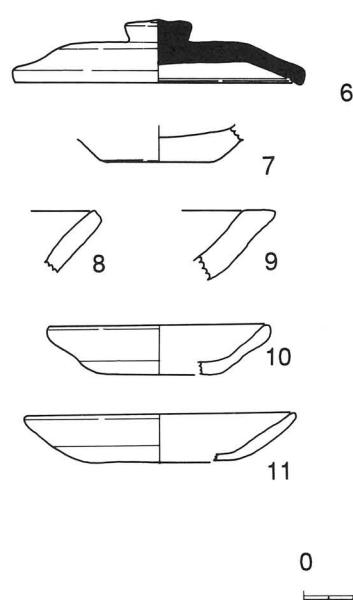
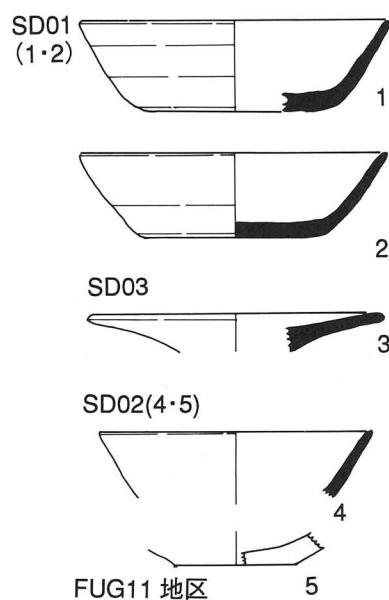


第 17 図 梅原安丸 V 遺跡 2 地区の遺構 (6)

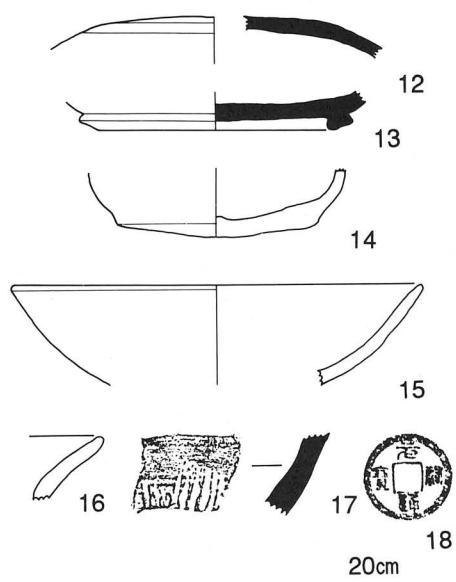


第18図 梅原胡摩堂遺跡13区の遺構 (SB01・02平面図は1/80)

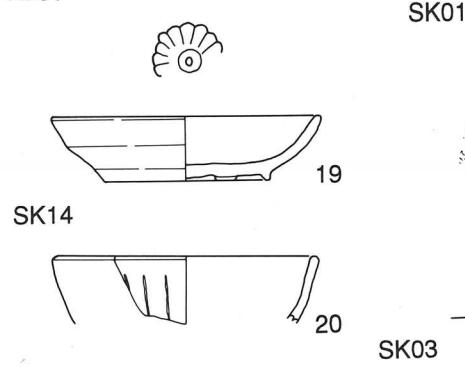
FUKG1 地区



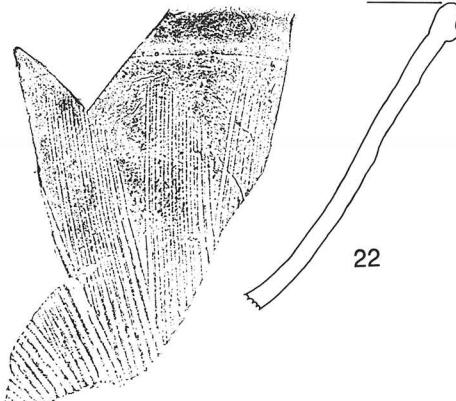
FUO10 地区



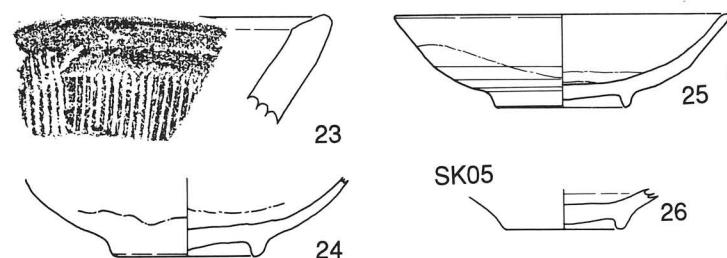
SD01



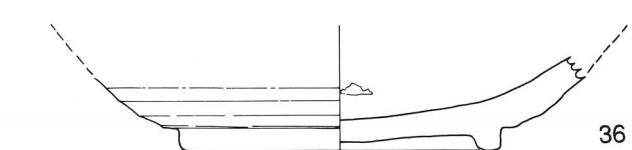
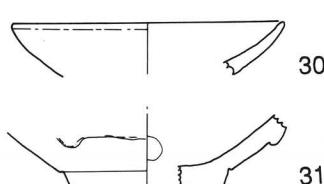
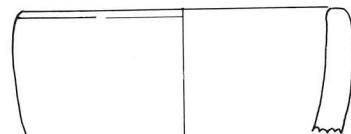
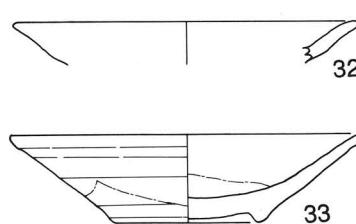
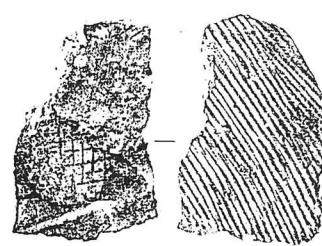
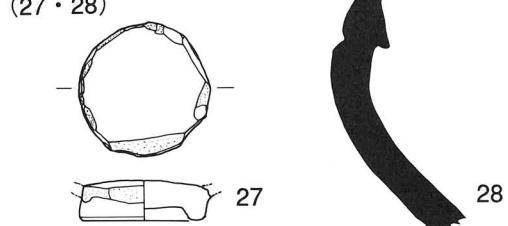
SK07



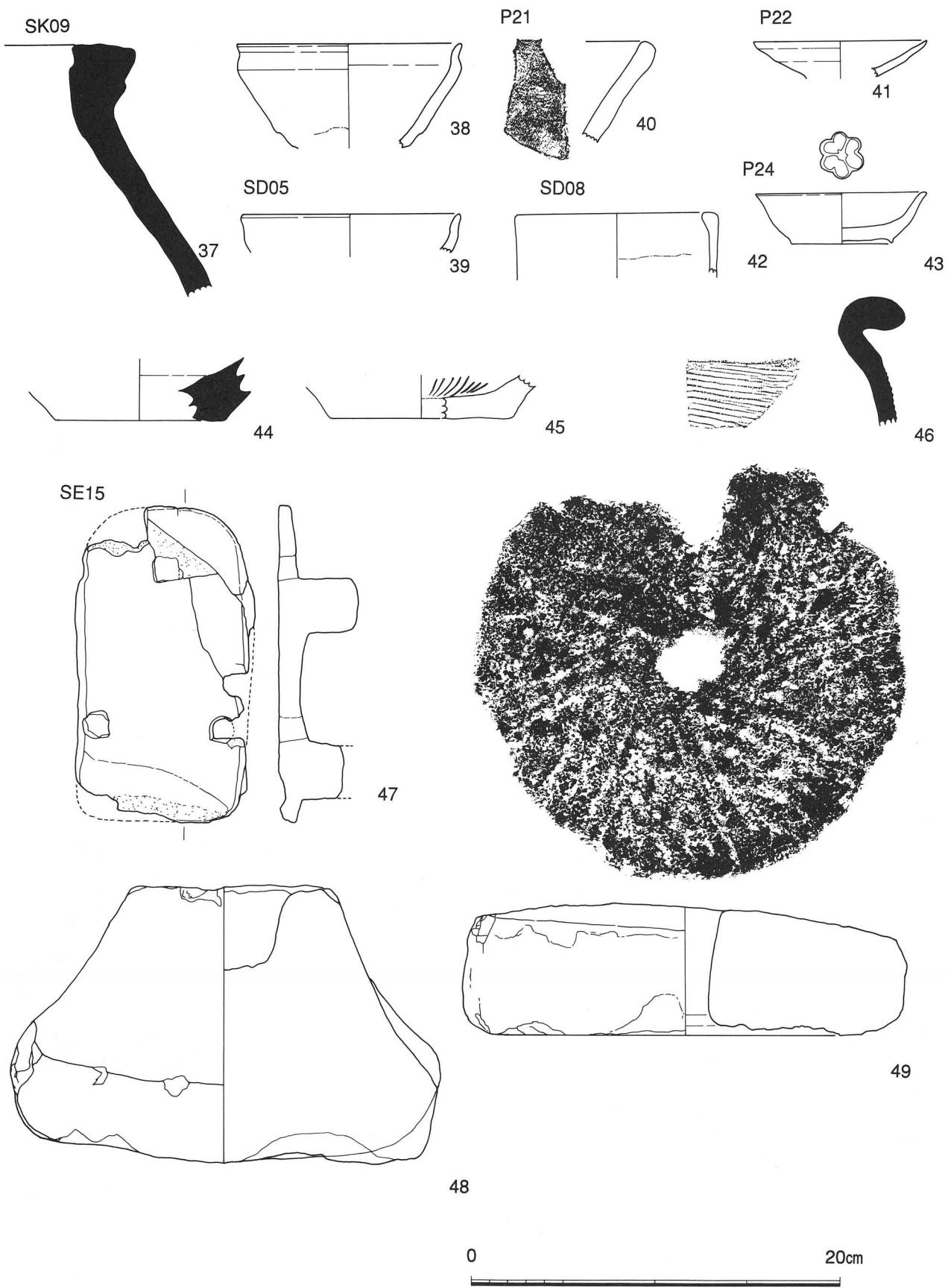
SK03



SK05

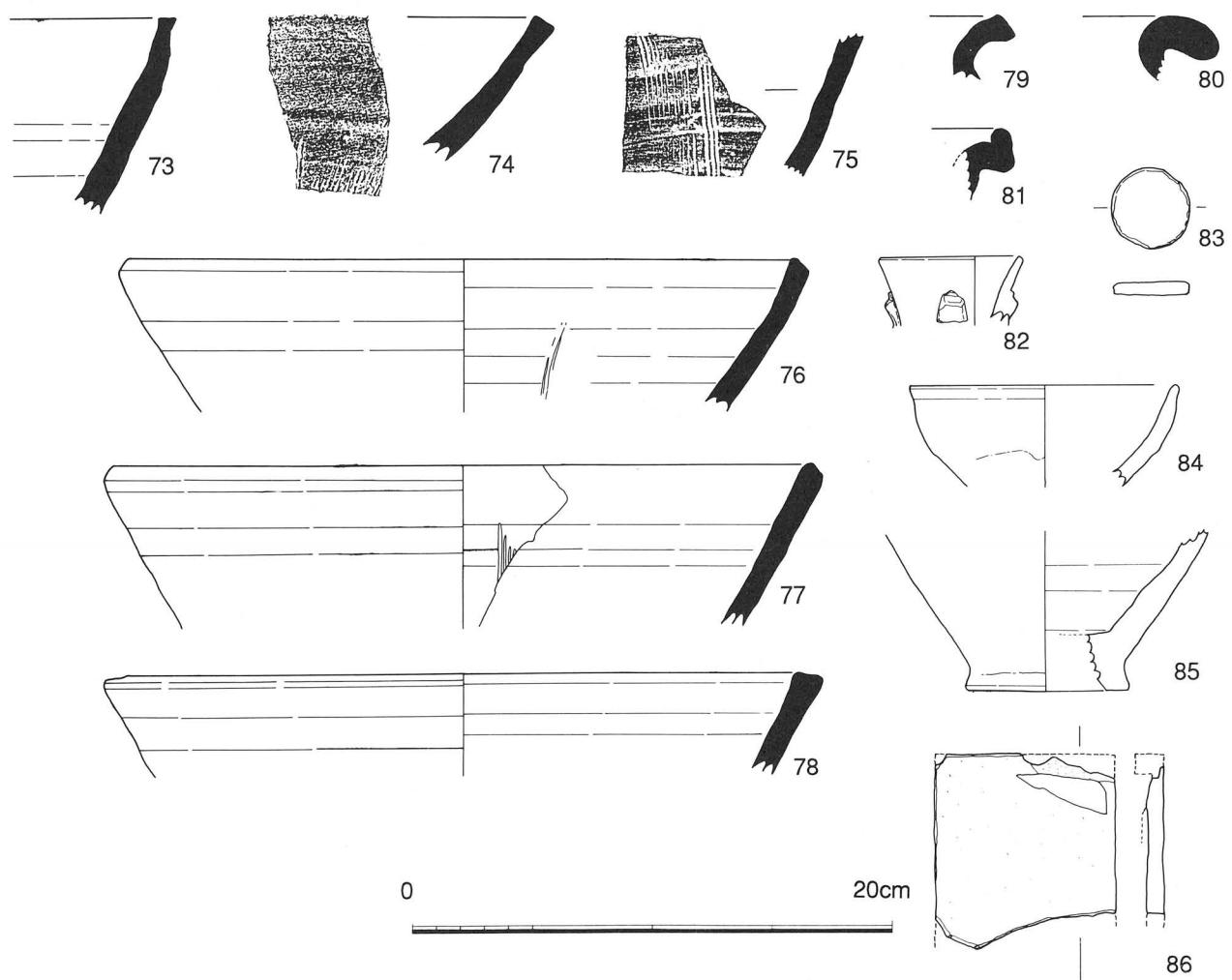
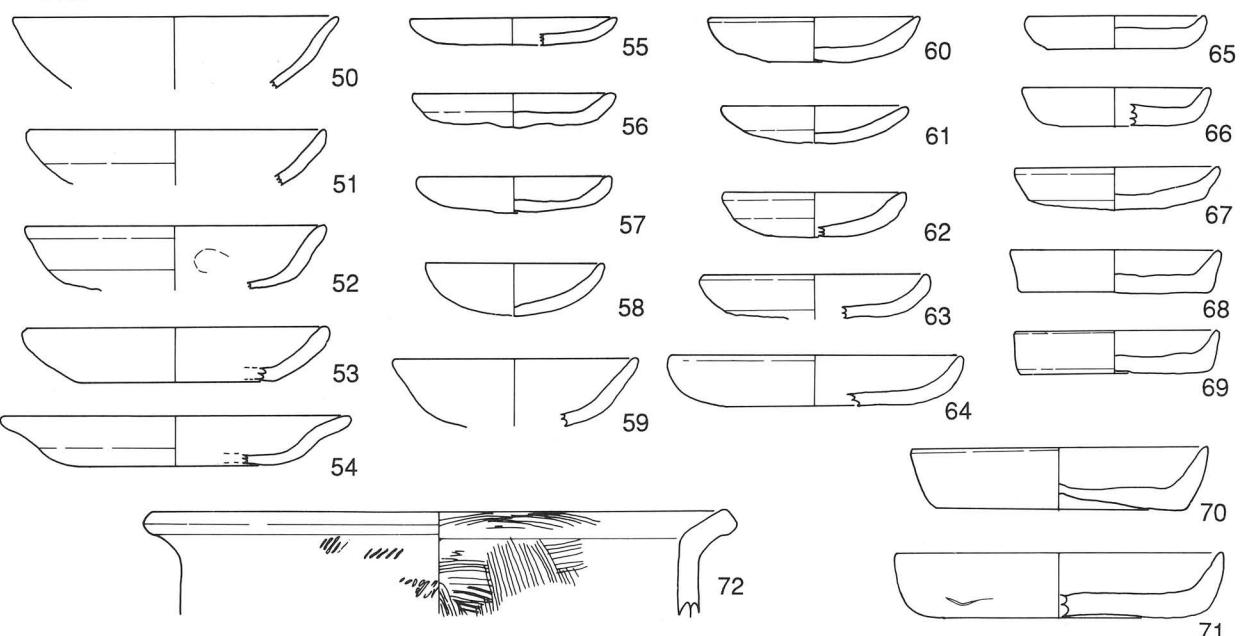


第 19 図 梅原加賀坊遺跡 1 地区・梅原落戸遺跡 10 地区・梅原加賀坊遺跡 11 地区の遺物 (18 は 1/2)

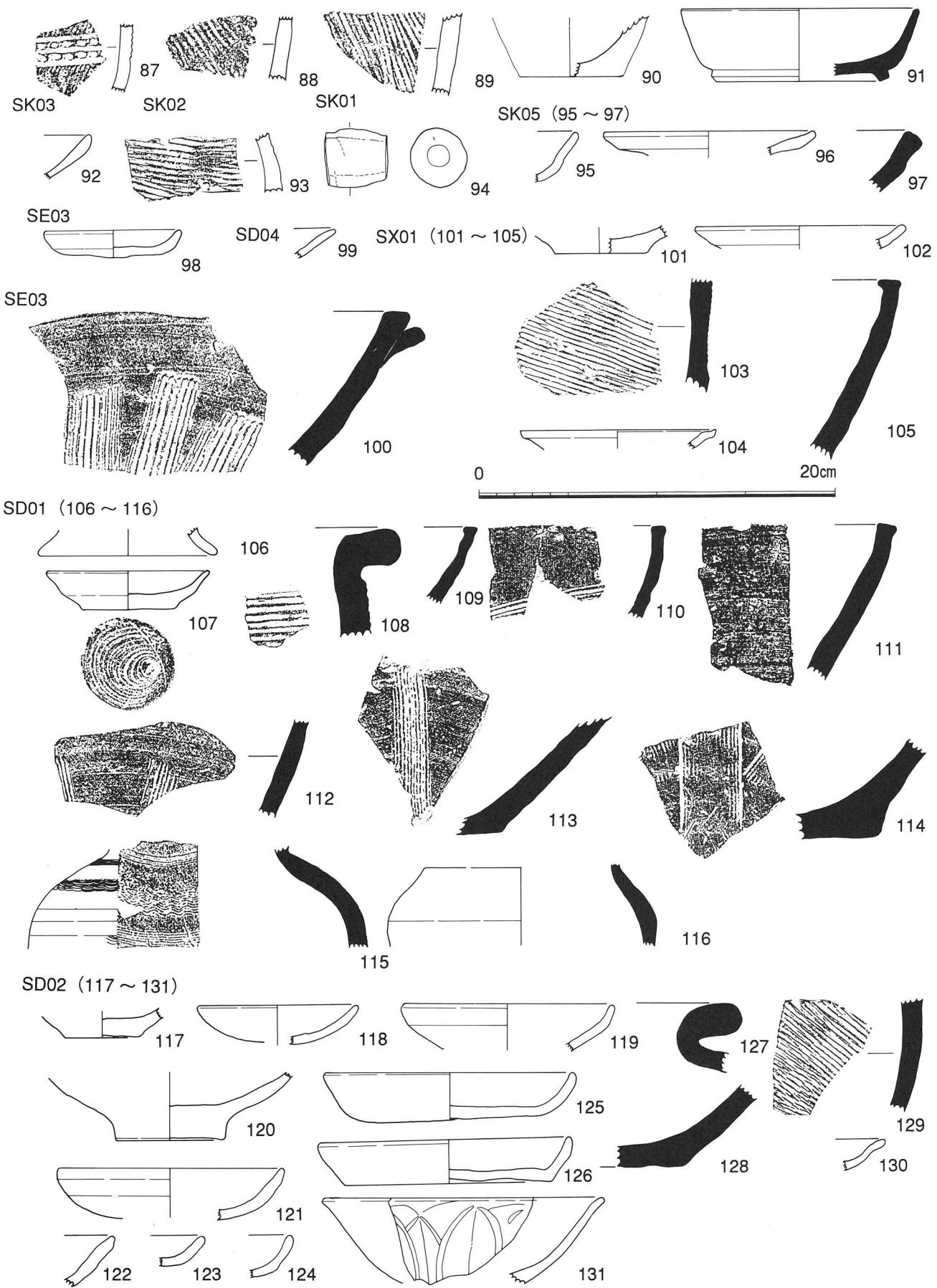


第20図 梅原胡摩堂遺跡11区の遺物(2) (49は1/4)

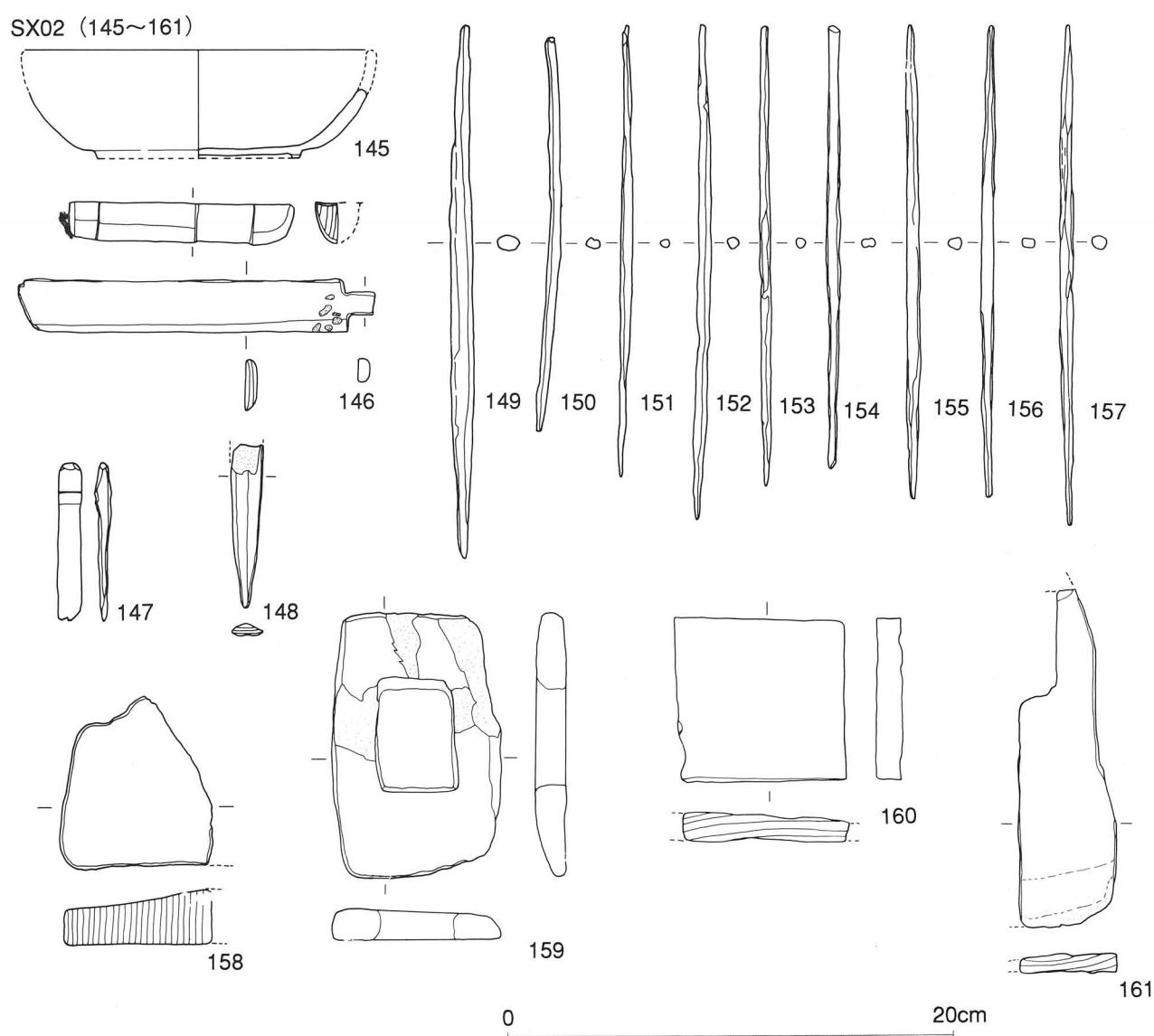
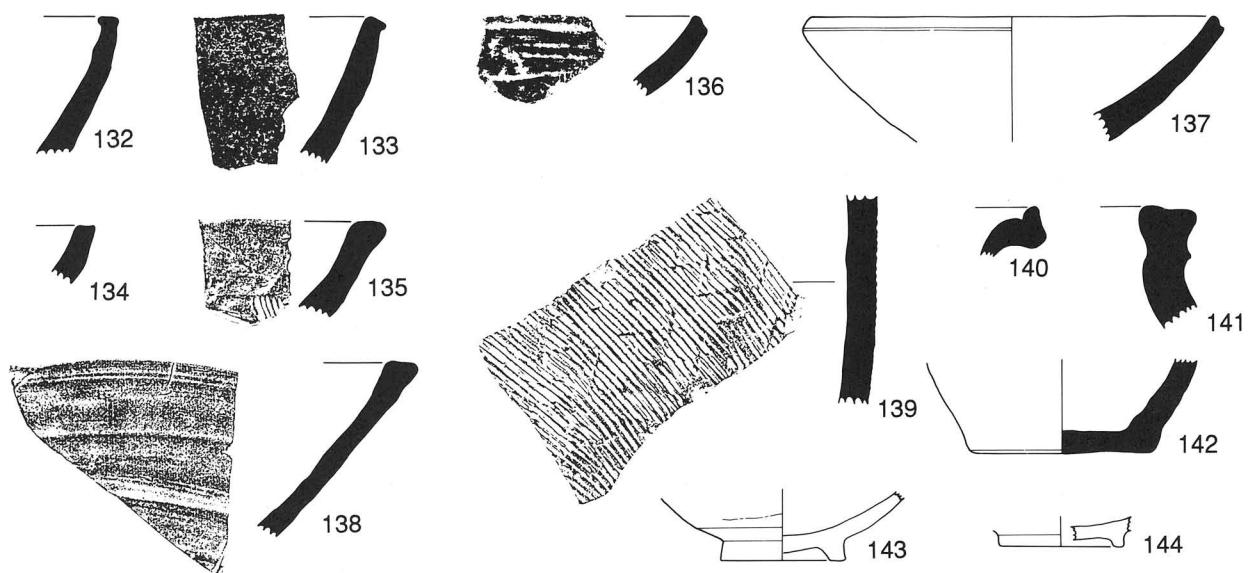
包含層



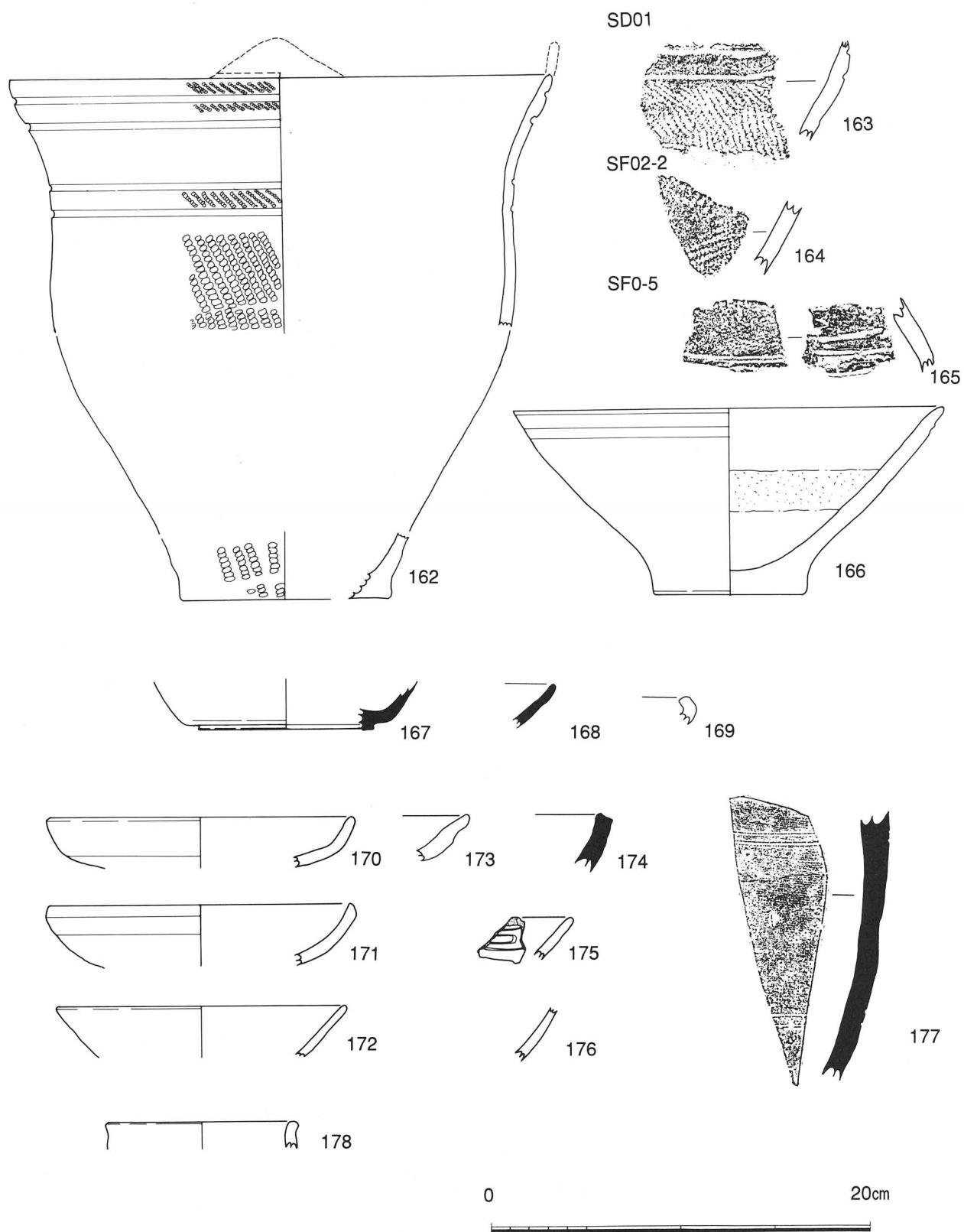
第21図 梅原胡摩堂遺跡11地区の遺物(3) (83は1/2)



第22図 梅原安丸V遺跡2地区の遺物(1)



第23図 梅原安丸V遺跡2地区の遺物(2)

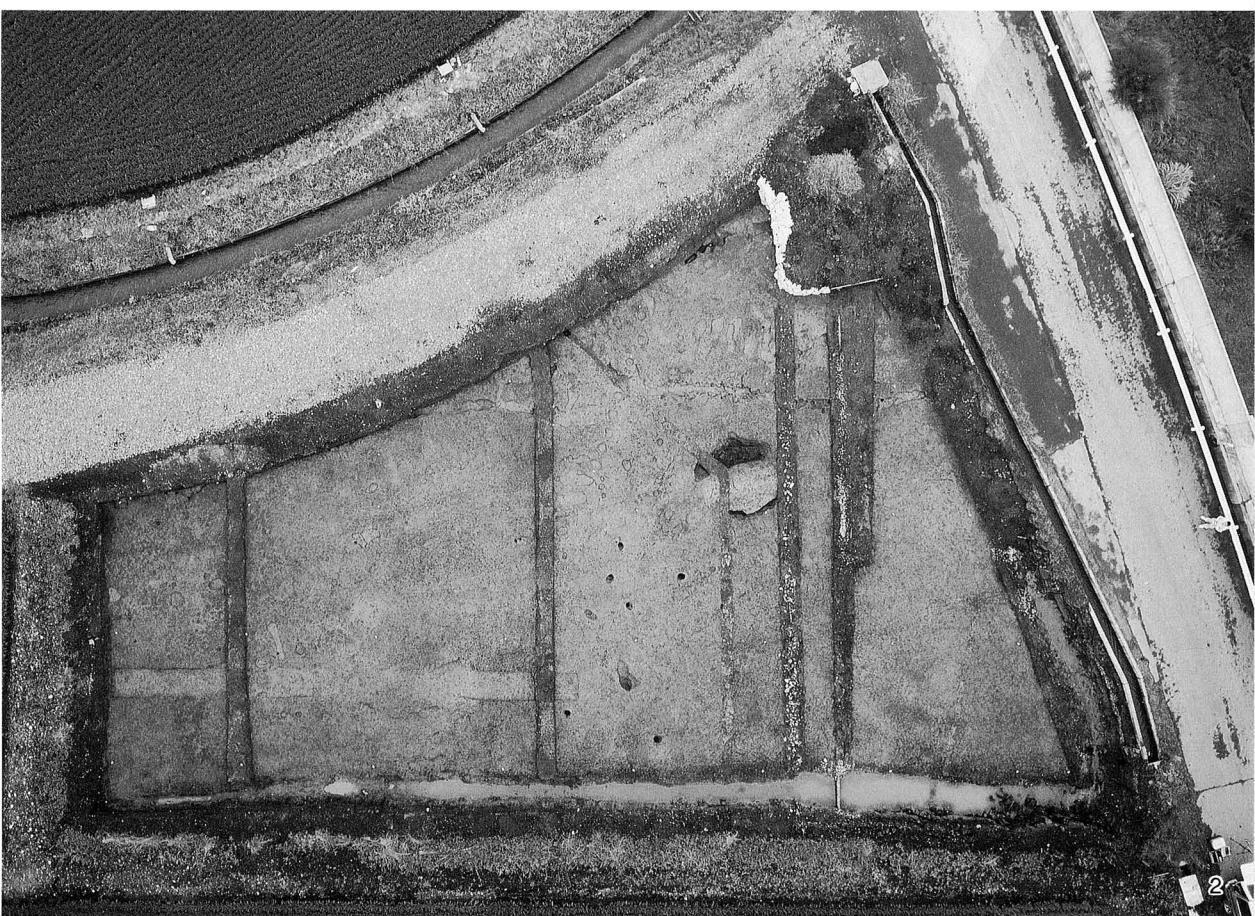


第24図 梅原胡摩堂遺跡13区の遺物

図版1

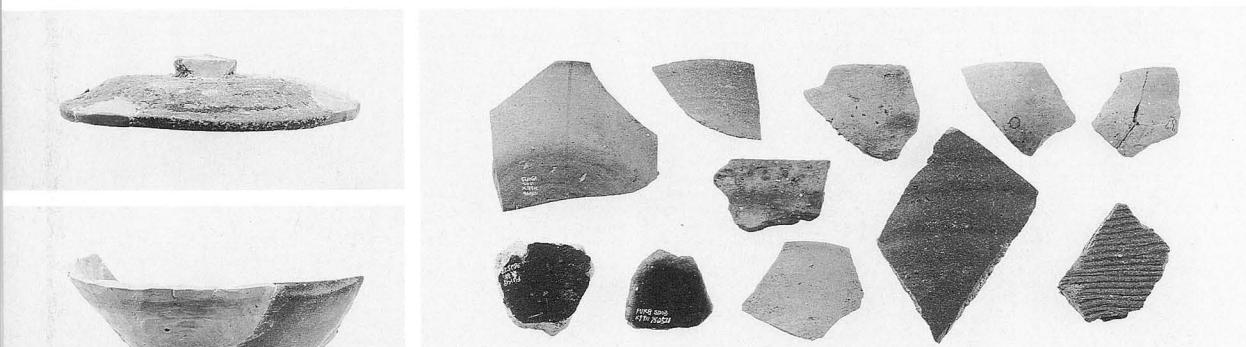
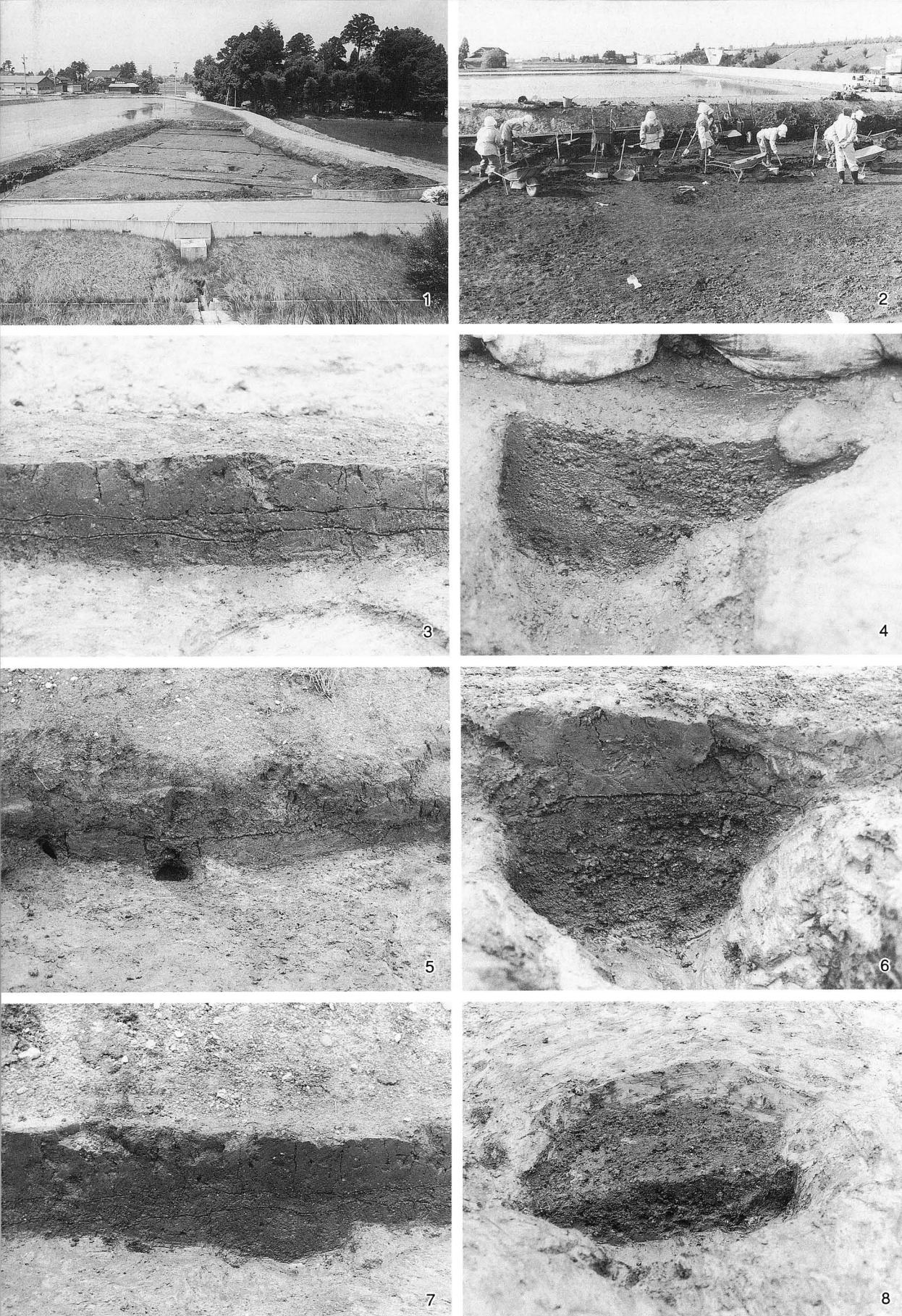
梅原加賀坊遺跡(1)

1. 遠景（北から）
2. 全景（上空から）
3. SD01（南から）
4. SD01（北から）



図版2
梅原加賀坊遺跡(2)

1. 全景（東から）
2. 発掘作業風景
3. 基本土層
4. SD03土層
5. SK02土層
6. SD01土層
7. SK01土層
8. P3土層



須恵器・土師器 (1:3)

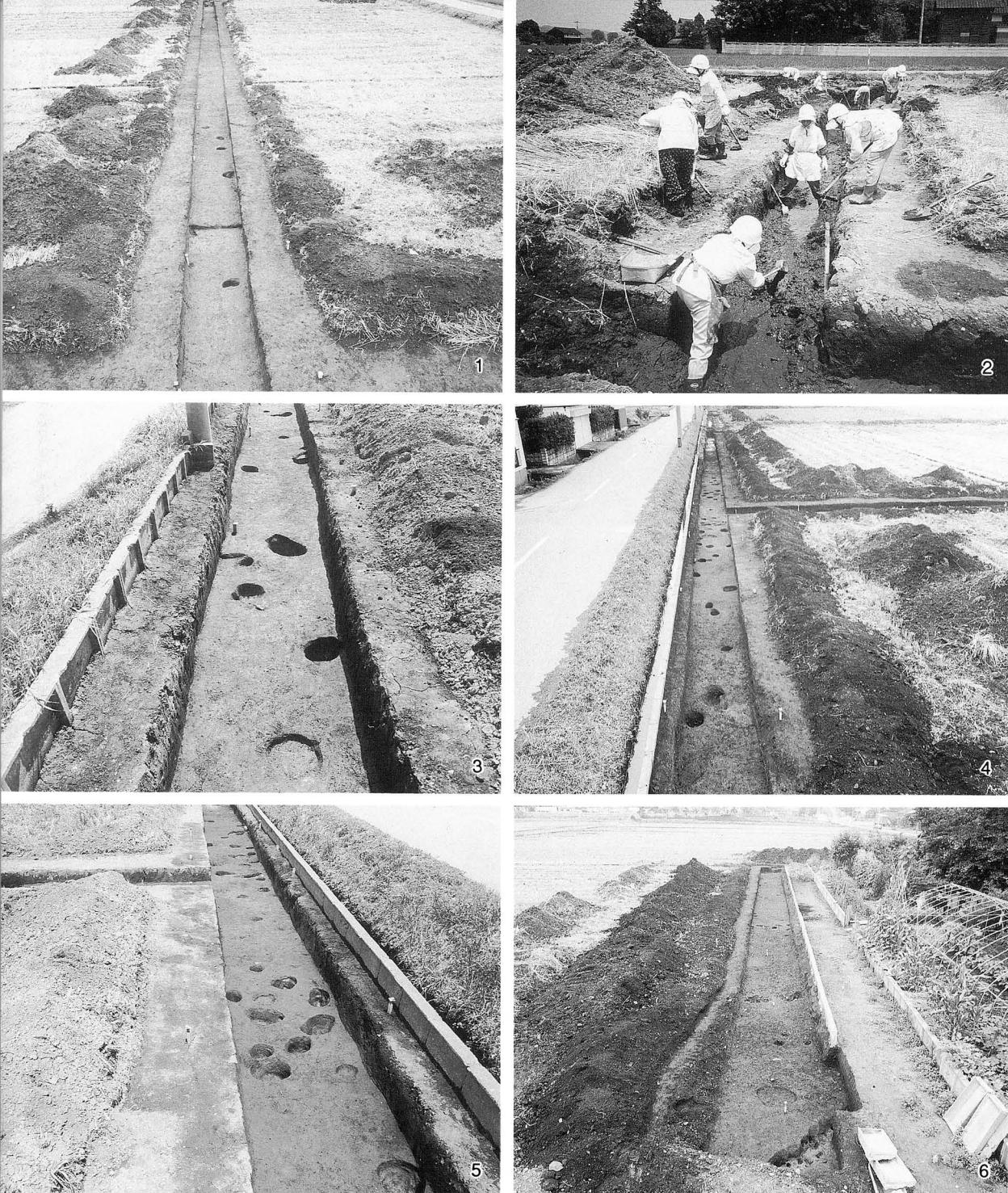
図版3

梅原落戸遺跡(1)

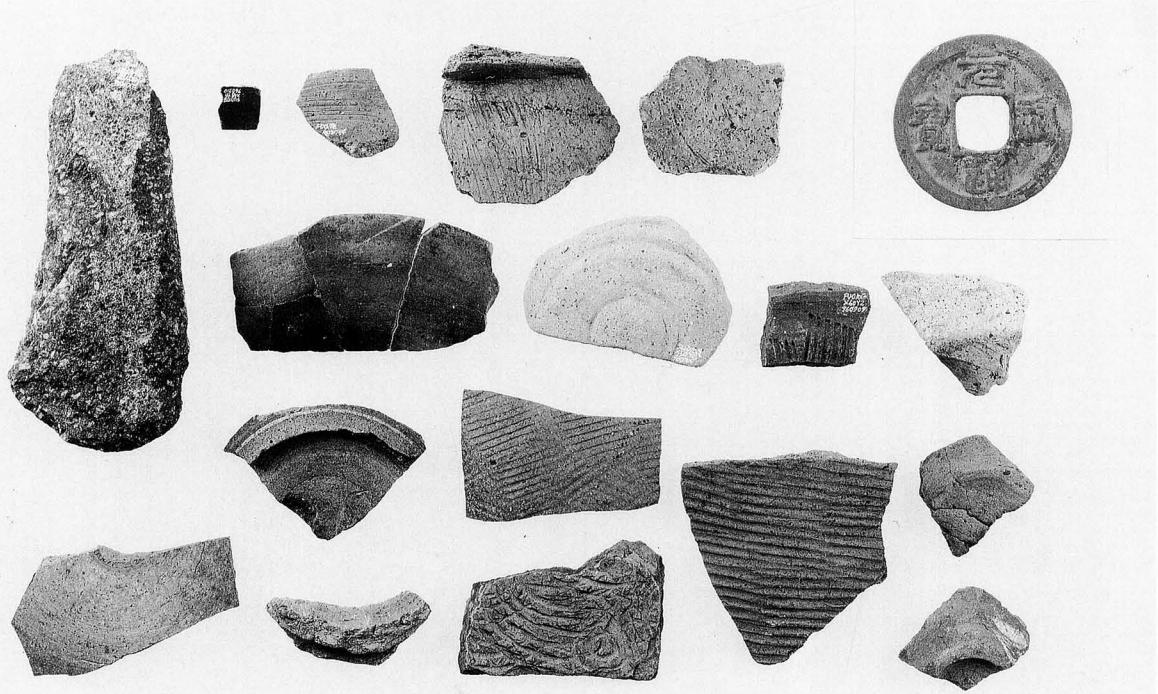
1. 西側X60列全景
(西から)
2. 中央Y91列全景
(北から)
3. 東側X29列・Y91列
全景 (東から)



図版4
梅原落戸遺跡(2)



1. 中央X51列
(東から)
2. 発掘作業風景
3. 西側 X 60Y15～30
区穴群 (西から)
4. 中央 X 50～60
Y69・70区穴群
(北から)
5. 中央 X 45～50
Y69・70区穴群
(南から)
6. 西側X30～49区穴
群 (北から)



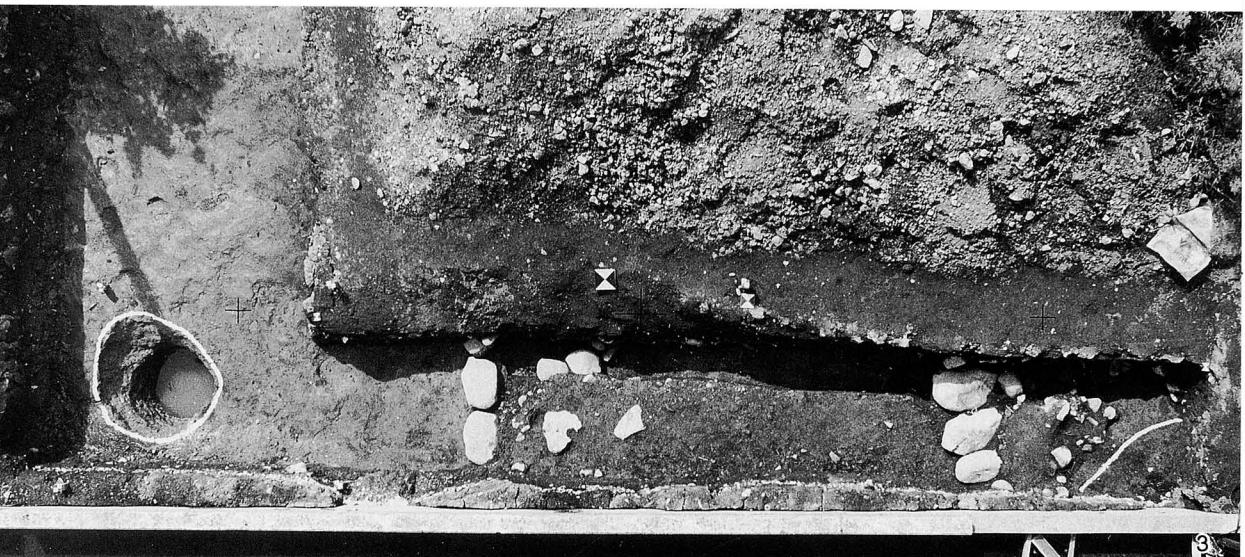
打製石斧・土師器・須
恵器
宋錢 (右上、1:1)

図版5

梅原胡摩堂遺跡(1)

11区

1. 遠景(北上空から)
2. 遠景(西上空から)
3. SK08 (上空から)



図版6

梅原胡摩堂遺跡(2)
11区南部

1. X1～31Y1・2区
(南から)
2. X33Y1～36
(西から)
3. X39～54Y41
(北から)
4. X54・55Y40～57
(西から)
5. X20～38Y68・69
(北から)
6. X20～38Y68・69
(南から)

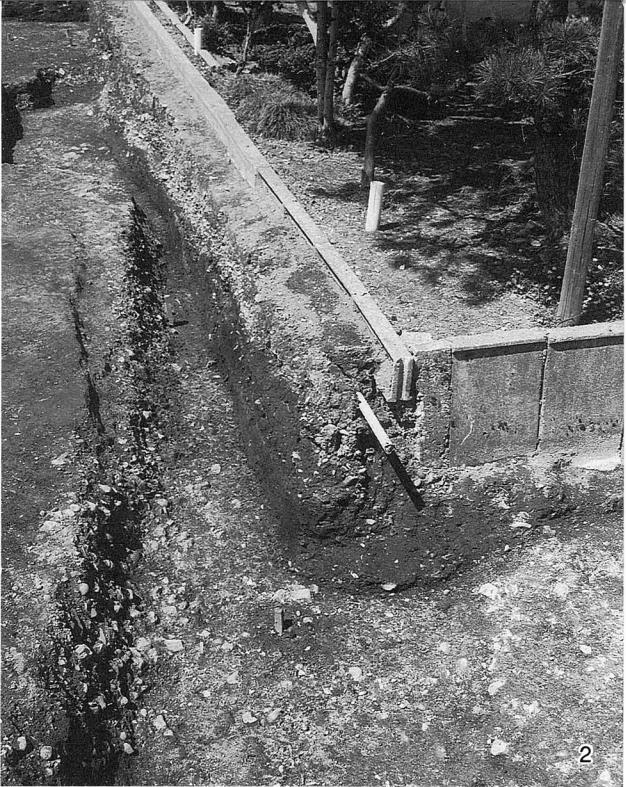


図版7

梅原胡摩堂遺跡(3)

11区南部

1. X62～77Y10・11
(南から)
2. X76・77Y10～19
(東から)
3. X71～88Y76
(南から)
4. X104～125Y75
(北から)
5. X38Y58～74
(西から)
6. X142～147Y74
(北から)



図版8

梅原胡摩堂遺跡(4)
11区



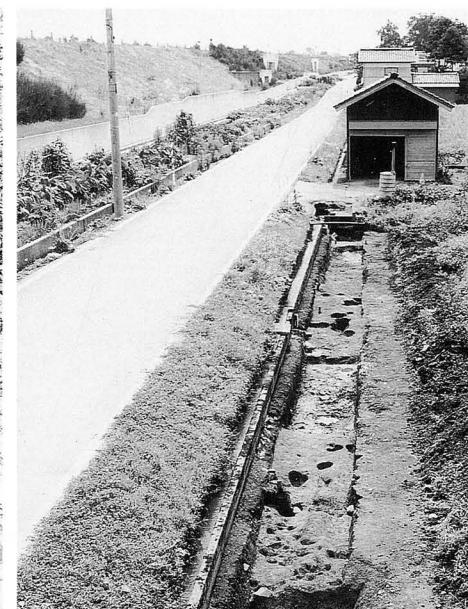
1



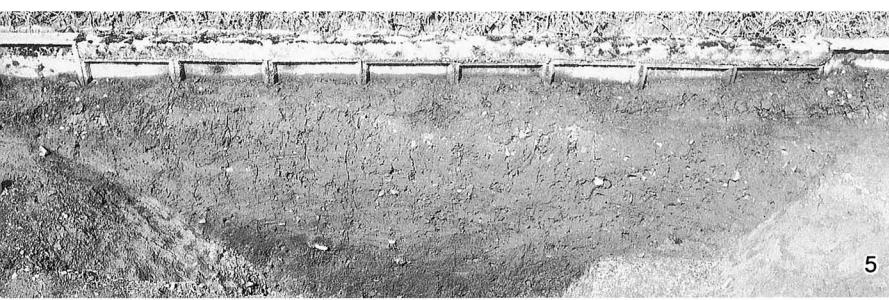
2



3



4



5



6



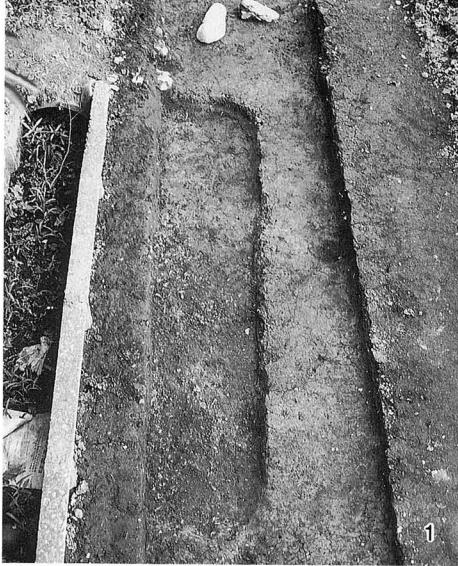
7

図版9

梅原胡摩堂遺跡(5)

11区

1. SK13 (西から)
2. SK12 (北から)
3. SK14 (東から)
4. SD06 (南から)
5. SX02・P17
(南西から)
6. SK01 (西から)
7. SK08 (東から)
8. SK08土層
(北から)



図版10

梅原胡摩堂遺跡(6)
11区

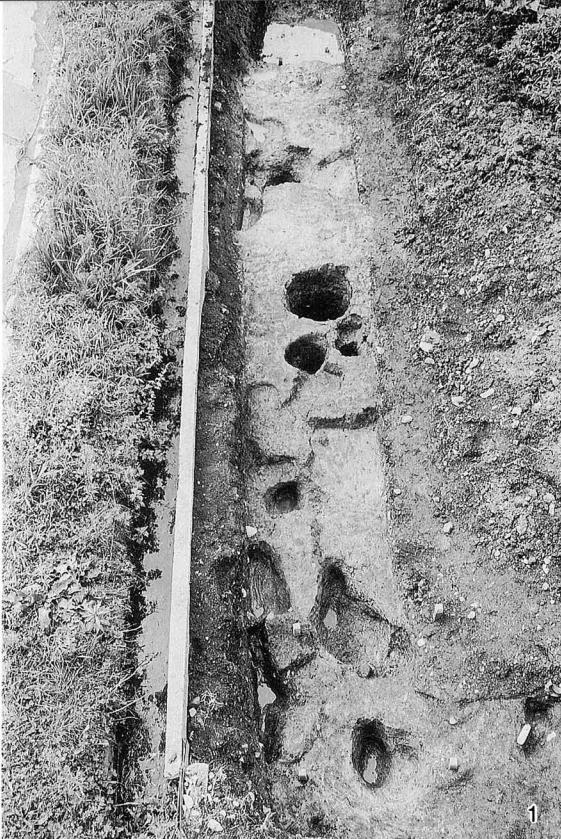


図版11

梅原胡摩堂遺跡(7)

11区

1. X121～125Y75
(北から)
2. SK11 (東から)
3. X67Y56～61
(東から)
4. SD07 (西から)
5. SK16 (北から)
6. SE13 (北から)
7. SD05 (西から)



図版12
梅原安丸V遺跡(1)

1. 全景 (上空から)



図版13

梅原安丸V遺跡(2)

1. SB01・02 (東から)
2. SB01・02 (南から)
3. 土坑群 (南から)



1



2



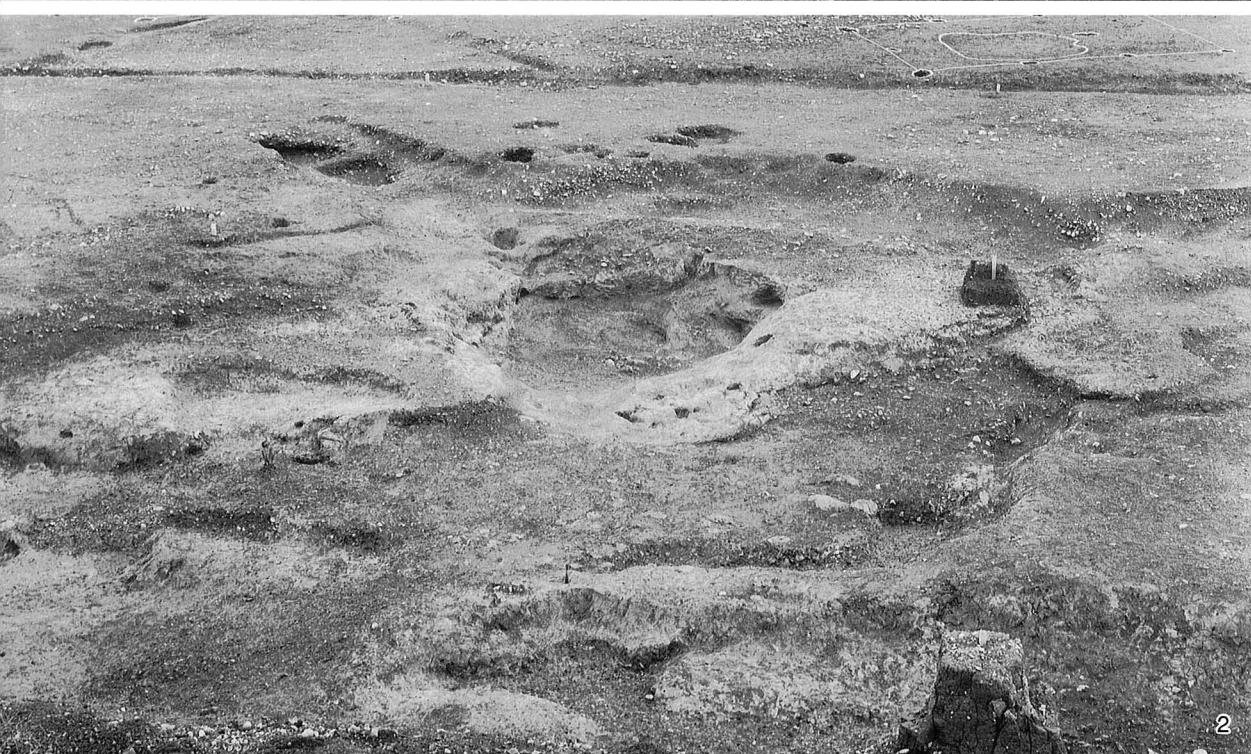
3

図版14
梅原安丸V遺跡(3)

1. 船着き場(西から)
2. 船着き場近景
(西から)
3. 船着き場近景
(南から)



1



2



3

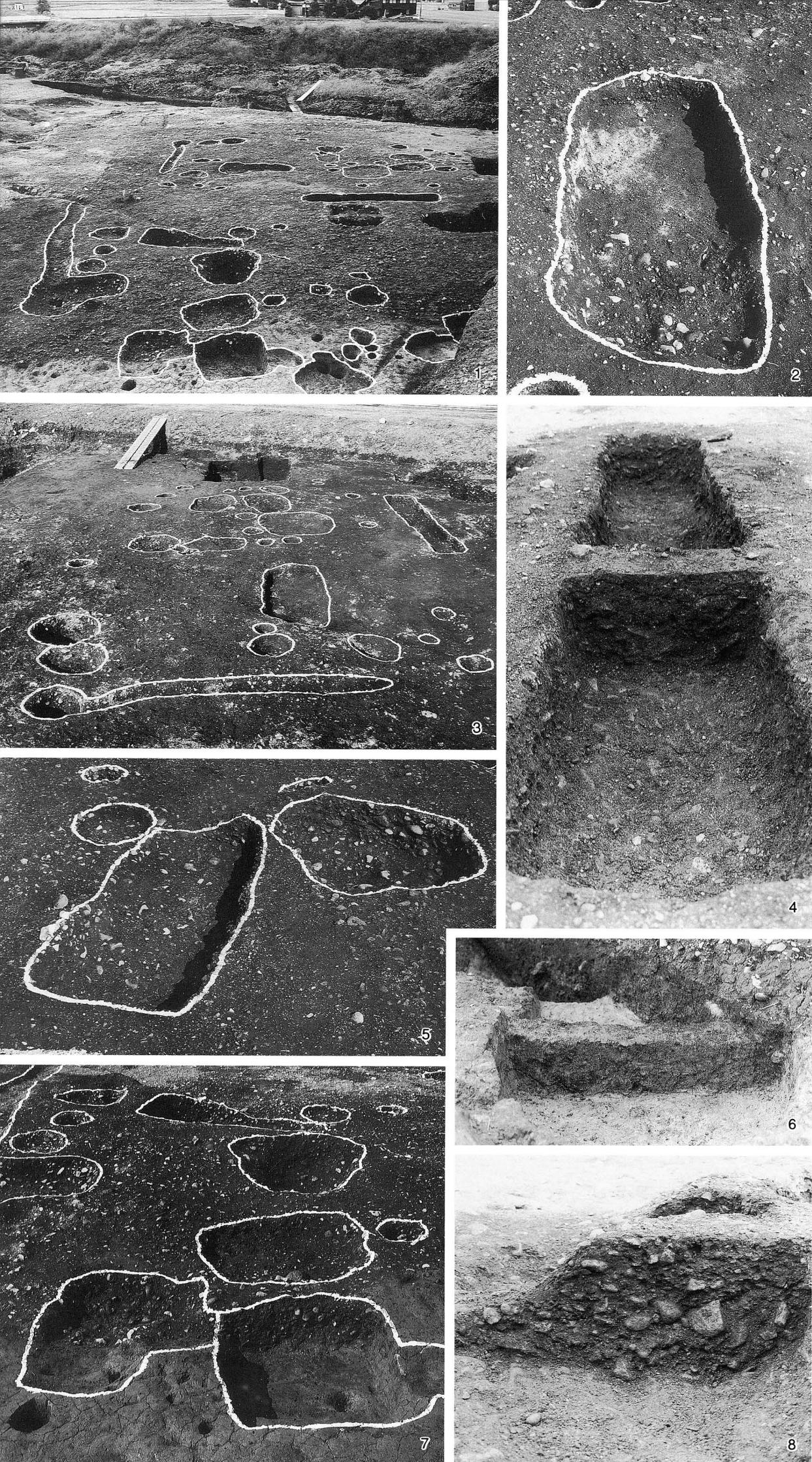
図版15

梅原安丸V遺跡(4)

1. SB01・02 (西から)
2. SD05 (西から)
3. SB03・05 (南から)
4. SD01 (北から)
5. SB04 (西から)
6. SK05 (北から)
7. SX04 (南から)
8. 基本土層



図版16
梅原安丸V遺跡(5)



図版17

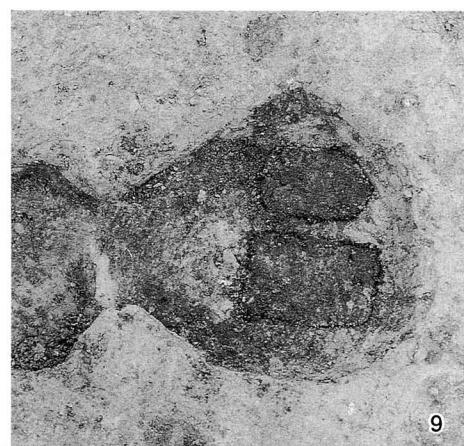
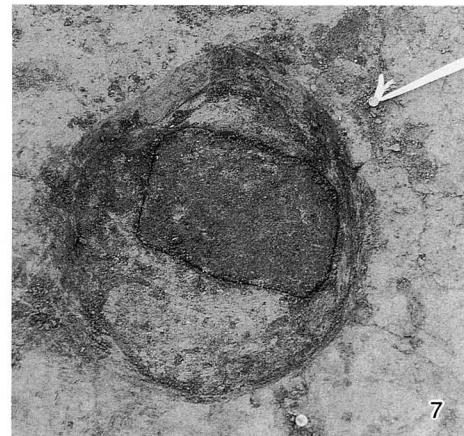
梅原安丸V遺跡(6)

1. 船着き場(西から)
2. SX02漆器出土状況
3. SX02土層(西から)
4. SX03土層(北から)
5. SD01土層(北から)
- 6、7. SD02土師器出土状況
8. SE03土層(西から)



図版18
梅原安丸V遺跡(7)

1. SX01 (東から)
2. SD01出土の杭
3. SB04 (南から)
4. SX01土層
(西から)
5. 鍤・鋤跡
6. 遺跡遠景(東から)
7. SB01埋土
8. 発掘作業風景
9. SB01埋土



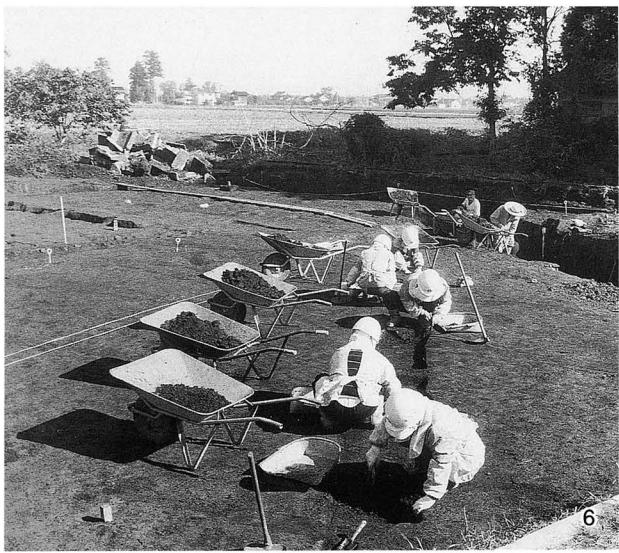
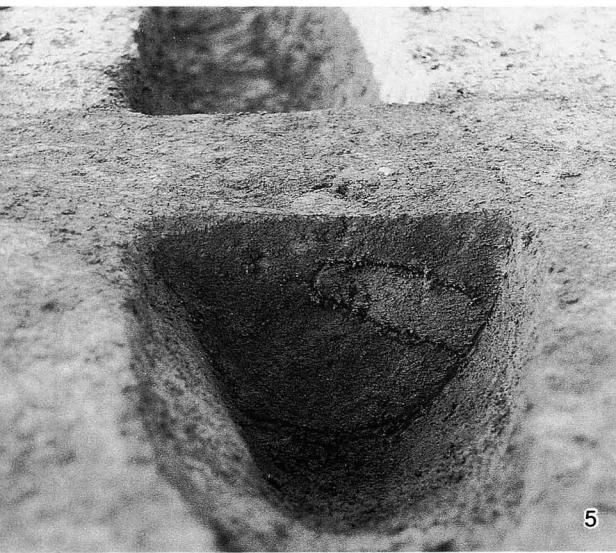
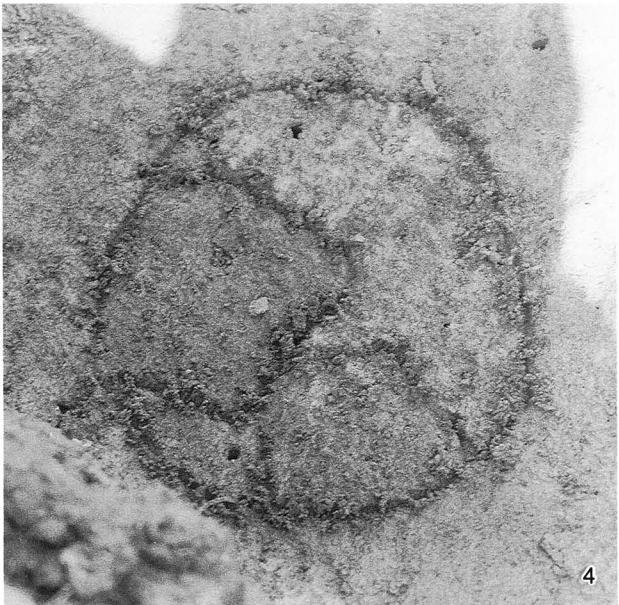
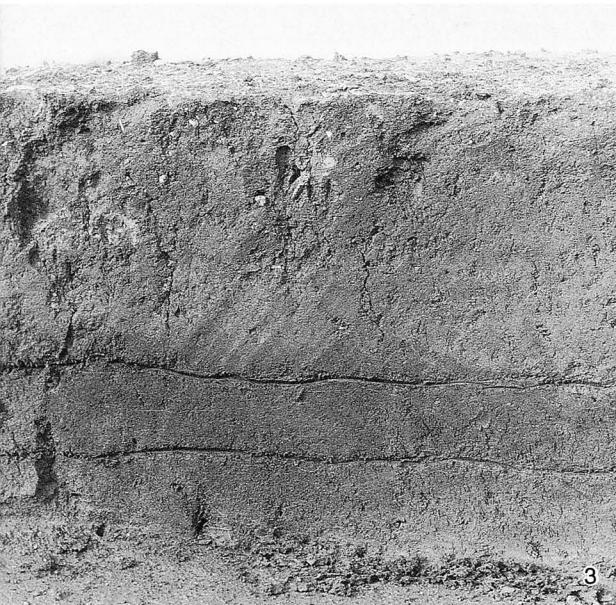
図版19

梅原胡摩堂遺跡(1)

1. 遠景(南上空から)
2. 全景(北から)
3. 全景(西から)



図版20
梅原胡摩堂遺跡(2)
13区



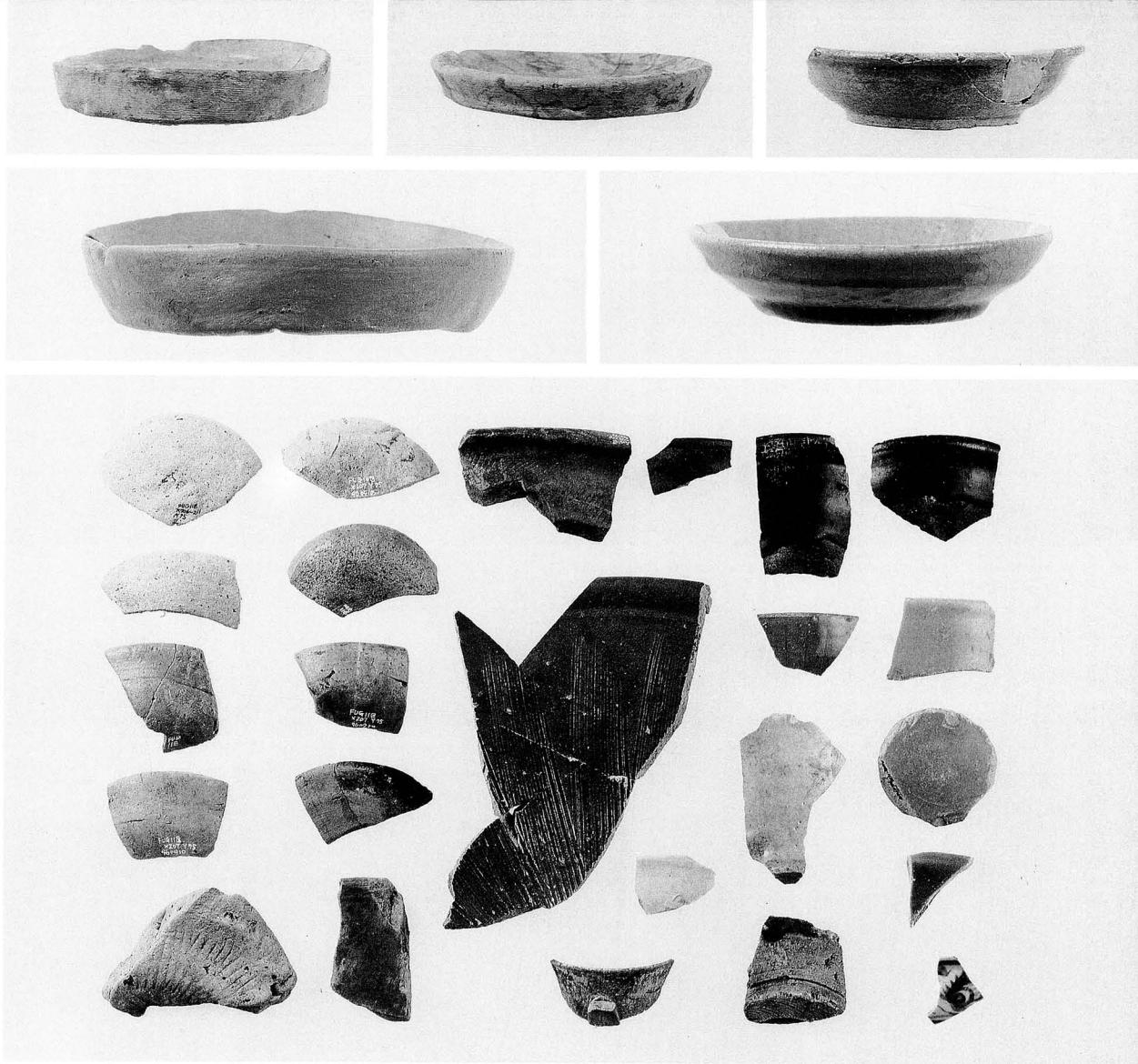
1. SB01 (西から)
2. SB02 (南から)
3. 基本土層
4. SB01柱根痕跡
5. SF01-2土層
6. 発掘作業風景
7. 繩文土器出土状況
(南から)
8. 繩文土器出土状況
(東から)

図版21

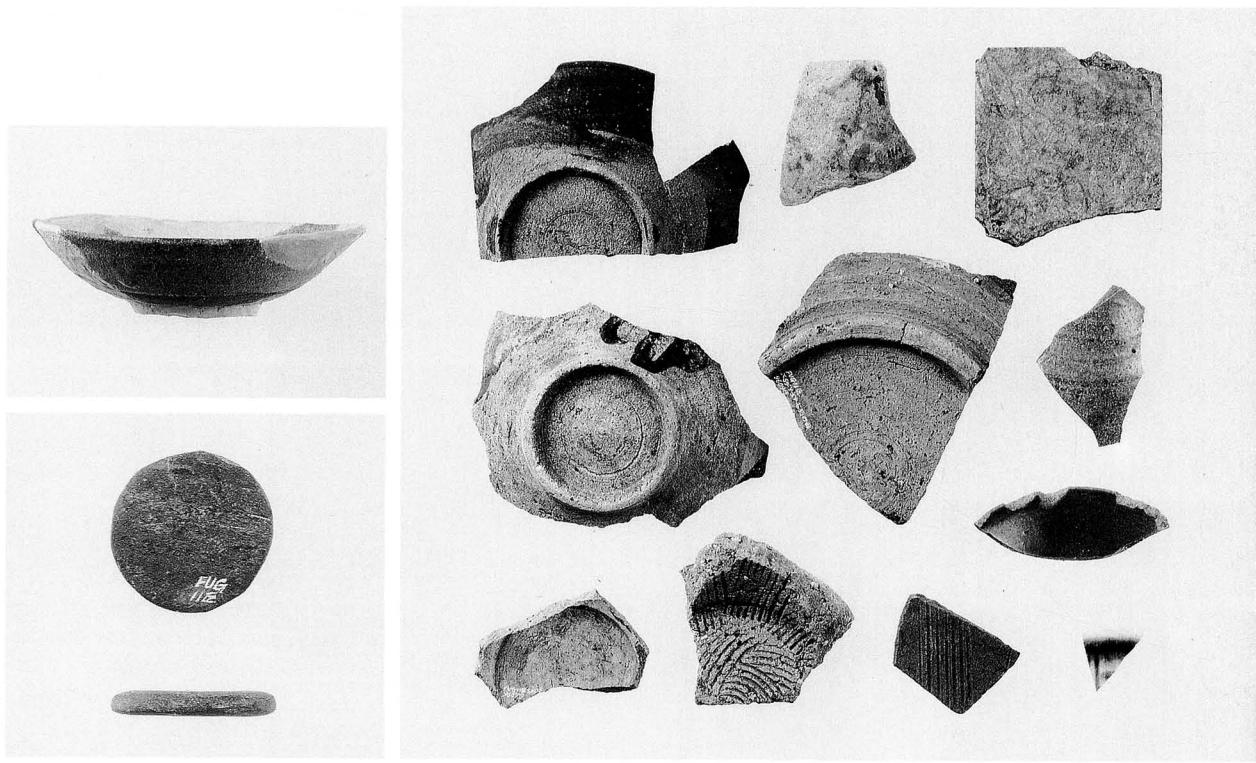
梅原胡摩堂遺跡(8)

11区遺物

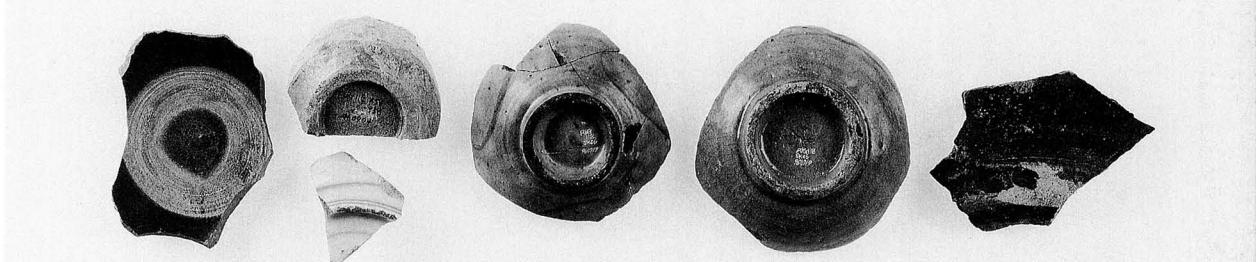
土師器皿・瀬戸美濃
(1:2)



土師器・瀬戸美濃・青
花・青磁・白磁



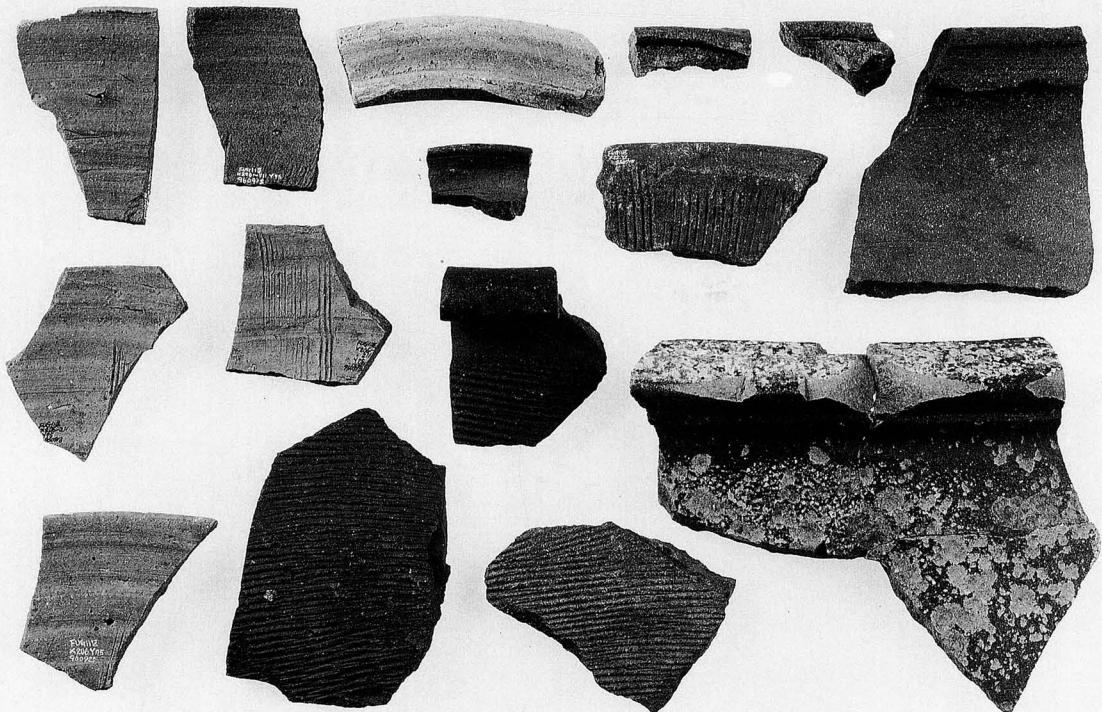
越中瀬戸皿 (1:3)



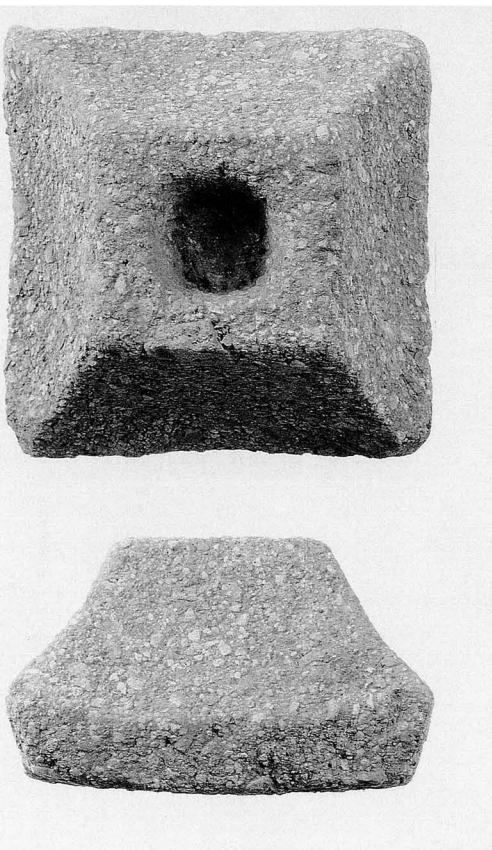
碁石 (1:1)

伊万里・唐津 (1:1)

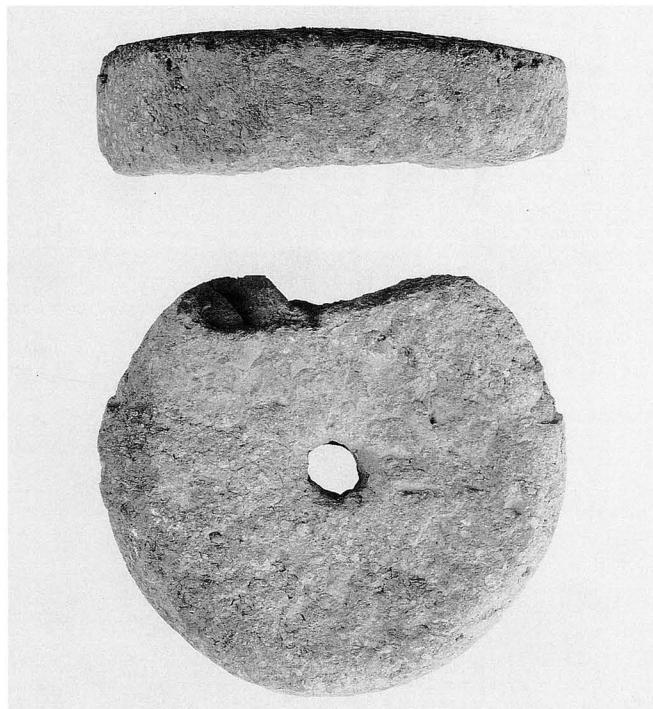
図版22
梅原胡摩堂遺跡(9)
11区遺物



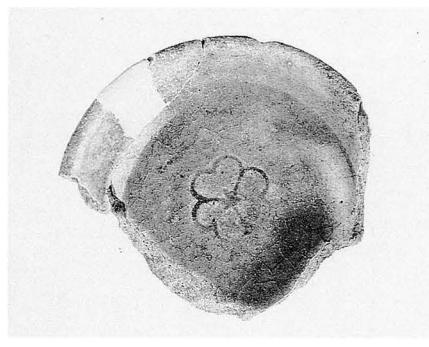
珠洲・越前 (1:3)



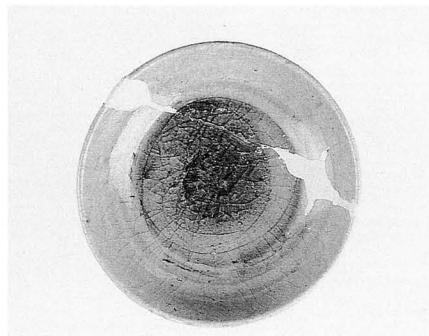
五輪塔火輪 (1:4)



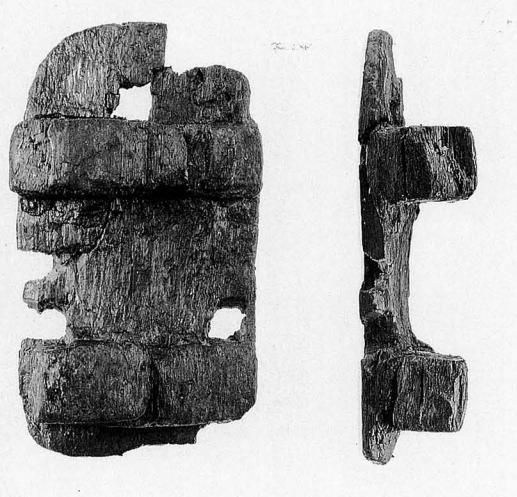
石臼 (1:4)



下駄 (1:3)



瀬戸美濃印花文

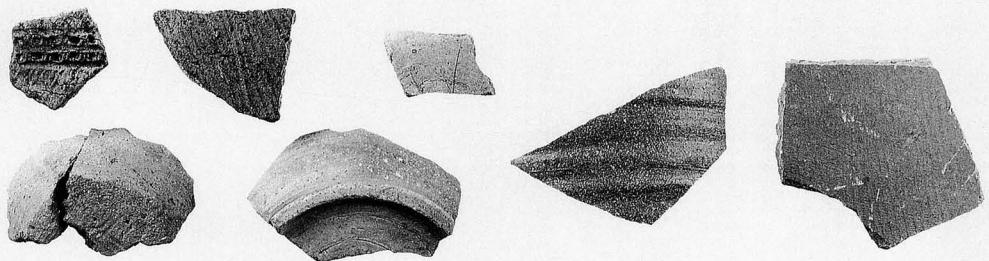


図版23

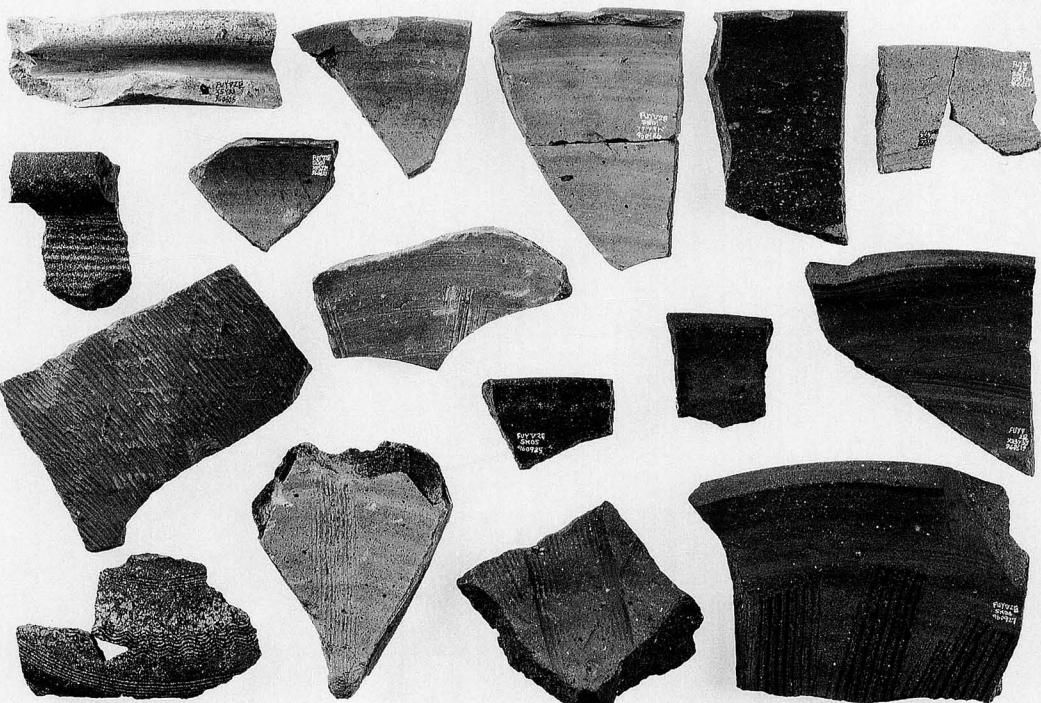
梅原安丸V遺跡(7)
遺物



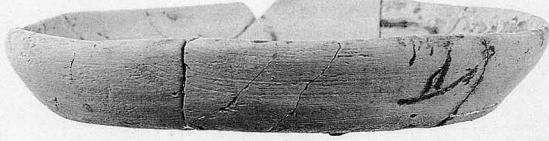
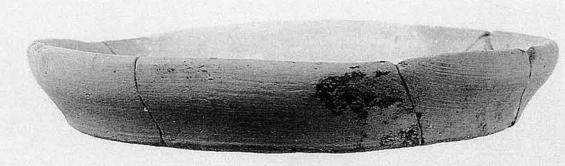
磨製石斧（左上、1:3）
打製石斧（1:3）



縄文土器・須恵器
(1:3)

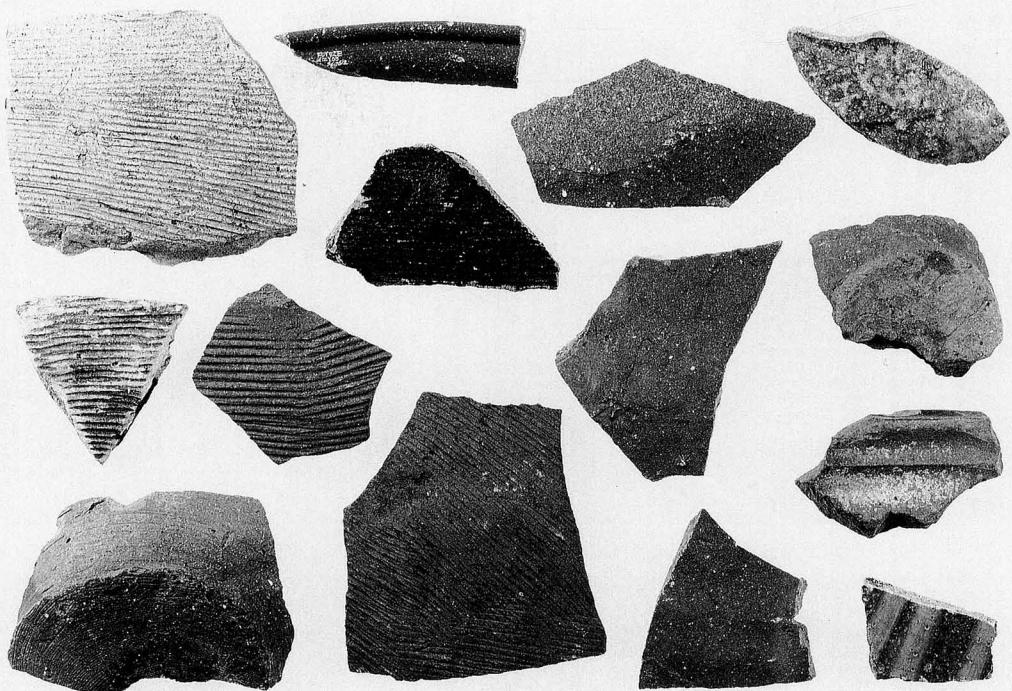


珠洲（1:3）

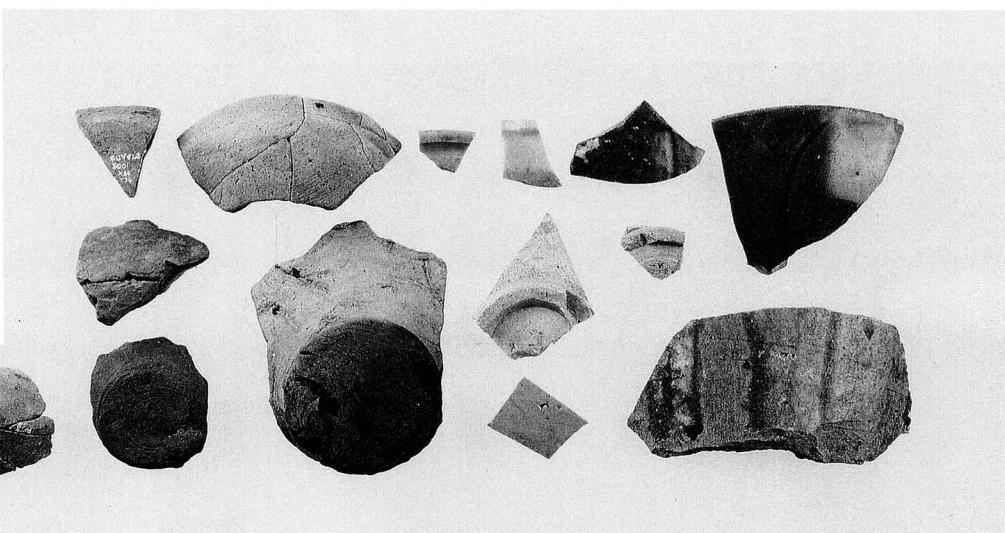
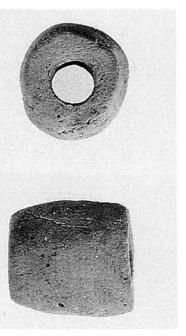


土師器皿（1:2）

図版24
梅原安丸V遺跡(8)
遺物

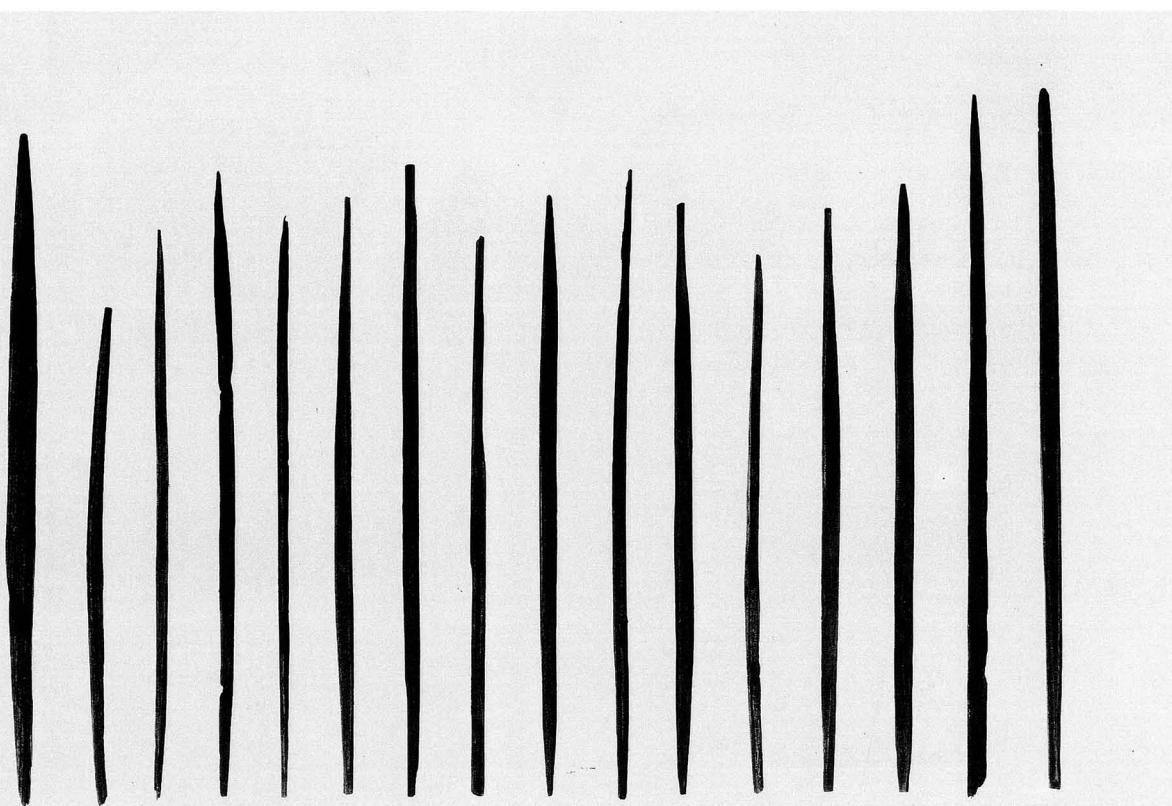


珠洲・越前 (1:3)



土錘 (1:2)

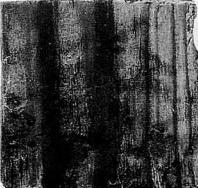
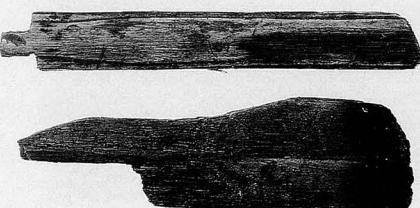
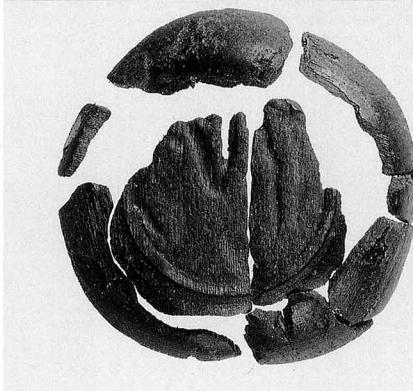
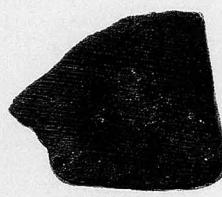
土師器皿・青磁・白磁・
瀬戸 (1:3)



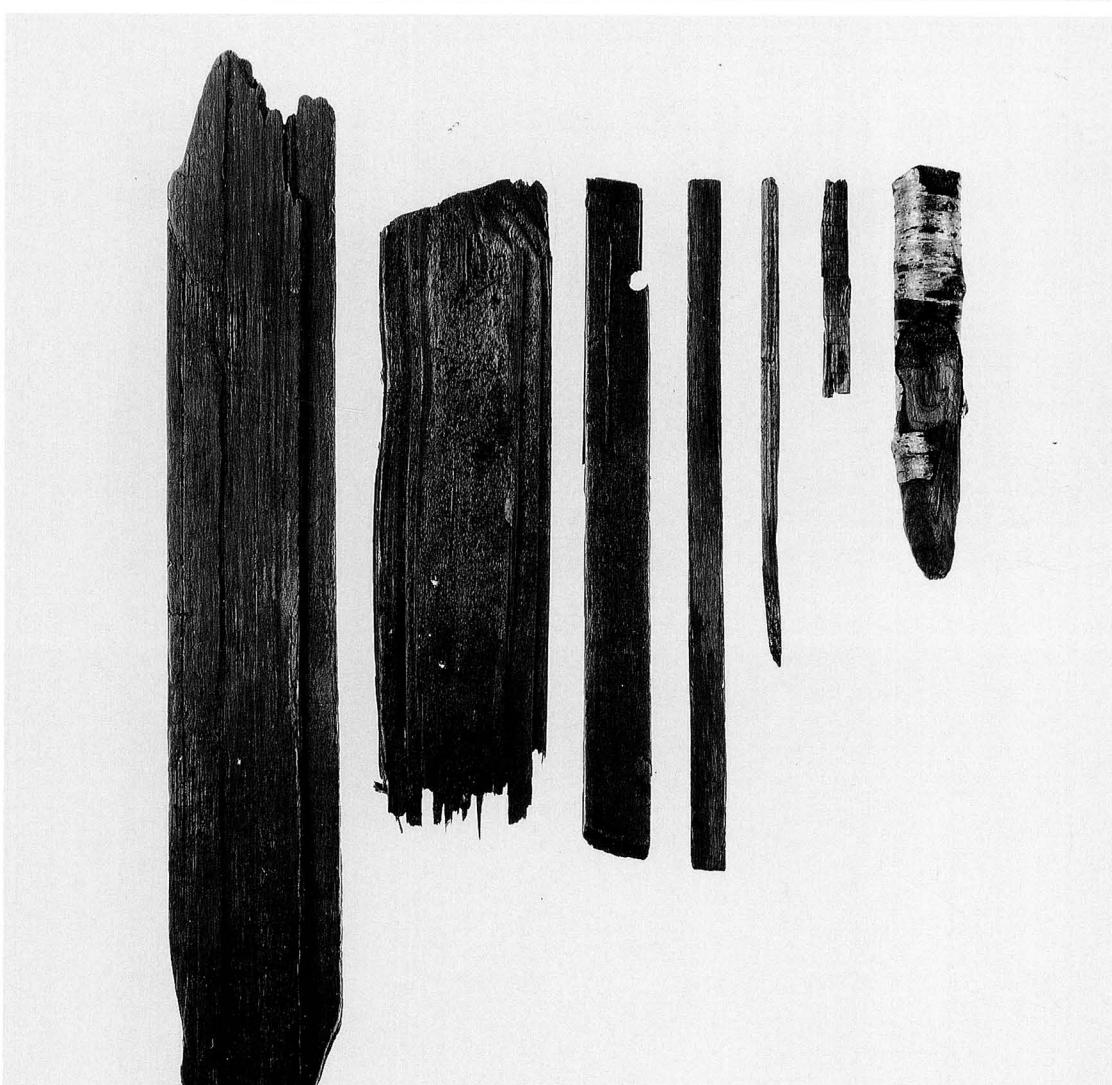
箸 (約1:3)

図版25

梅原安丸V遺跡(9)
遺物



木製品 (1:3)
漆器碗 (1:3)

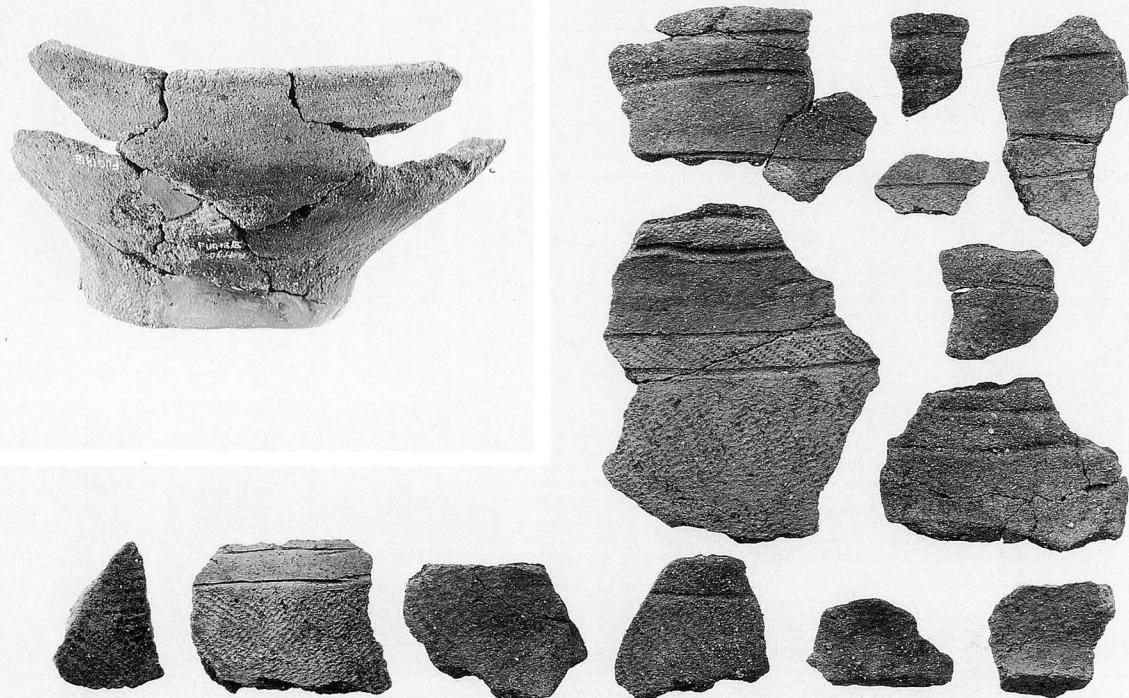


杭・板・棒 (1:3)

骨 (1:1)



図版26
梅原胡摩堂遺跡(3)
13区遺物



縄文土器・(1:3)



須恵器・土師器・珠洲
渥美 (1:3)



発掘調査参加者

報告書抄録

| | | | | | | | |
|-------|--|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな | とやまけんふくみつまちうめはらかがほういせきいち・うめはらおとしどいせきぐんよん・うめはらごまどういせきぐんいち・うめはらやすまるいせきぐんさん | | | | | | |
| 書名 | 富山県福光町梅原加賀坊遺跡Ⅰ・梅原落戸遺跡群Ⅳ・梅原胡摩堂遺跡群Ⅰ・梅原安丸遺跡群Ⅲ | | | | | | |
| 副書名 | 県営低コスト化水田農業ほ場整備事業（梅原地区）に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7) | | | | | | |
| 編著者名 | 久々忠義、佐藤聖子 | | | | | | |
| 編集機関 | 富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒939-16 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL(0763)52-1111 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1997年3月31日 | | | | | | |

| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 。' " | 東経 。' " | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|---------------|-------------|-------|------|------------|------------|-------------------|------------------------|--------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 梅原加賀坊 | 富山県 | 16421 | 175 | 36度33分52秒 | 136度54分20秒 | 960515～ 960524 | 550m ² | |
| 梅原落戸 | 富山県 | 16421 | 177 | 36度33分38秒 | 136度54分10秒 | 960701～ 960711 | 310m ² | |
| 梅原胡摩堂 | 福光町梅原 | 16421 | 180 | 36度33分20秒 | 136度54分20秒 | 960701～ 961129 | 1,485m ² | 県営ほ場 整備事業 |
| 梅原安丸Ⅴ | 福光町梅原 | 16421 | 169 | 36度34分06秒 | 136度54分16秒 | 960605～ 961028 | 2,245m ² | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|----|--------------------|--------------------------|--|------|
| 梅原加賀坊 | 集落 | 縄文時代、平安時代、中世 | 溝、土坑（平安） | 縄文土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲 | |
| 梅原落戸 | 集落 | 縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世 | 穴、溝 | 打製石斧、土師器、須恵器、珠洲、中世土師器、銅錢、唐津 | |
| 梅原安丸Ⅴ | 集落 | 縄文・中世、近世 | 掘立柱建物5棟、川跡、舟着場、水田跡、井戸、土坑 | 縄文土器、打製石斧、須恵器、中世土師器、珠洲、越前、青磁、白磁、瀬戸美濃、土錘、漆器椀、箸、農工具 | |
| 梅原胡摩堂 | 集落 | 縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世 | 畠跡、掘立柱建物、溝、堀、竪穴、井戸 | 縄文土器、打製石斧、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、越前、瀬戸美濃、下駄、五輪塔、石臼 | |

発掘調査参加者

井口富士雄・大井川安太郎・奥野豊次・棚田俊雄・棚田正男・土居光明・中村俊雄・山田善之・吉田清三・荒井とよ・井口よし子・大井川あや子・大井川花枝・大島笑子・尾川澄子・片田敏子・川島芳江・大門そと・館田きよ子・橋本華子・溝口秋子・溝口あさ子・溝口悦子・水口浜子・山田きみ子・山道文子

県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(7)

富山県福光町 梅原加賀坊遺跡Ⅰ
梅原胡摩堂遺跡群Ⅰ
梅原落戸遺跡群Ⅳ
梅原安丸遺跡群Ⅲ

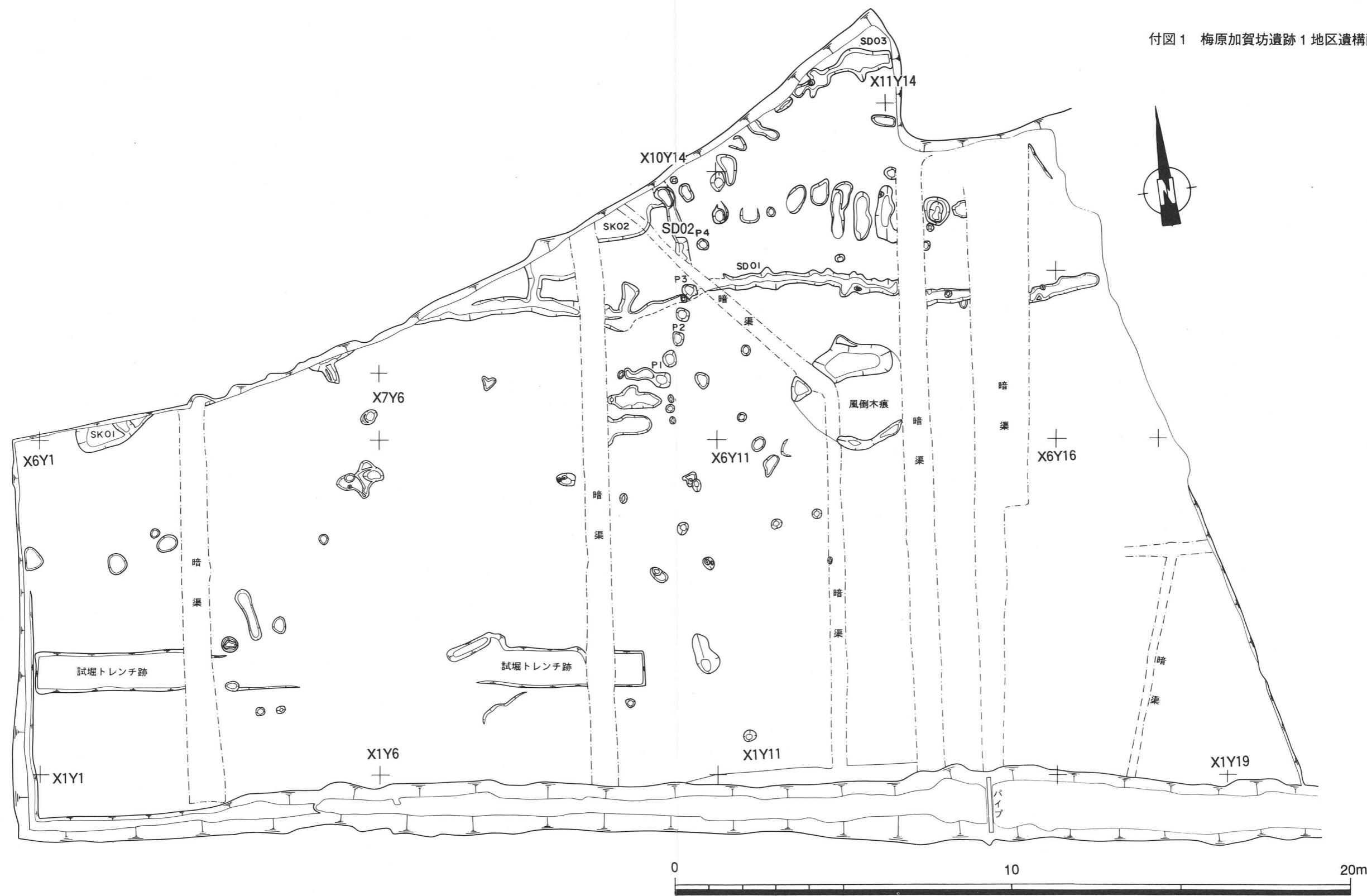
平成9年3月28日

編 集 福光町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター

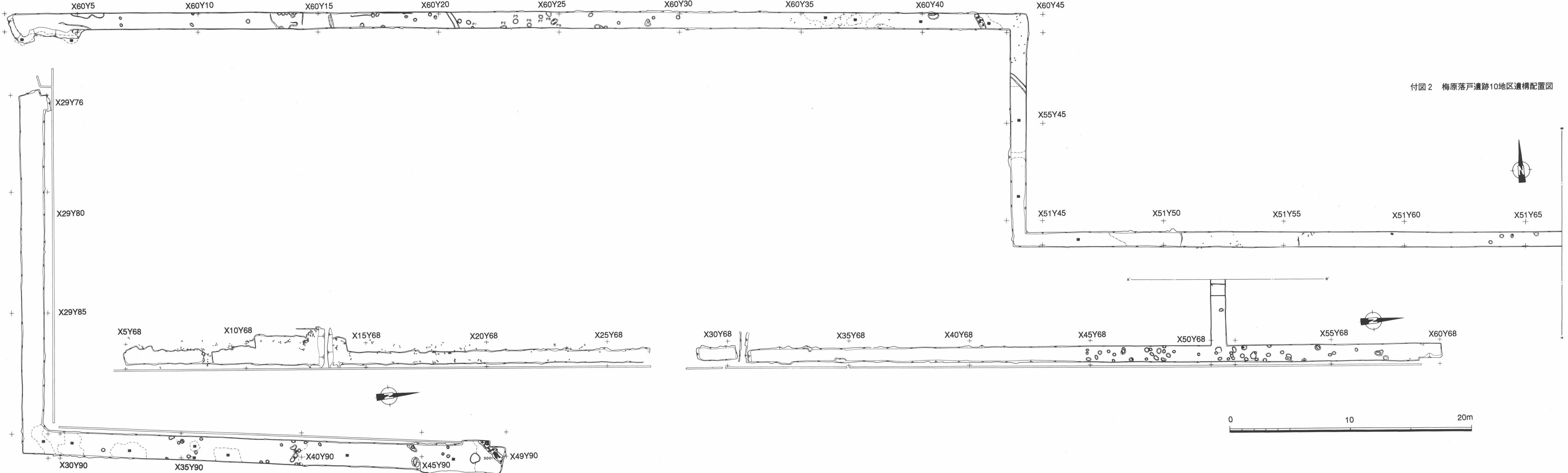
発 行 福光町教育委員会

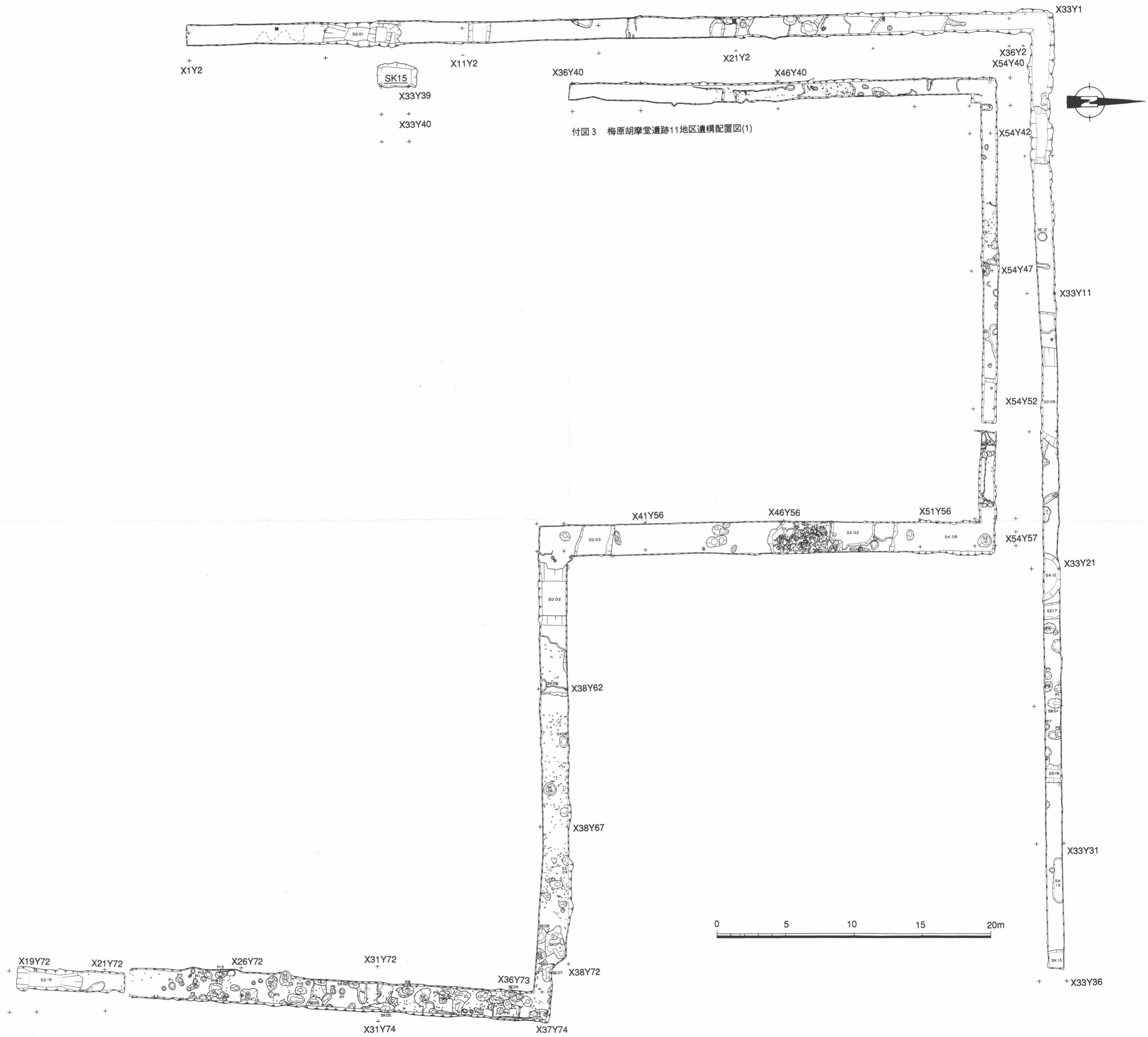
印 刷 研波印刷

付図1 梅原加賀坊遺跡1地区遺構配置図

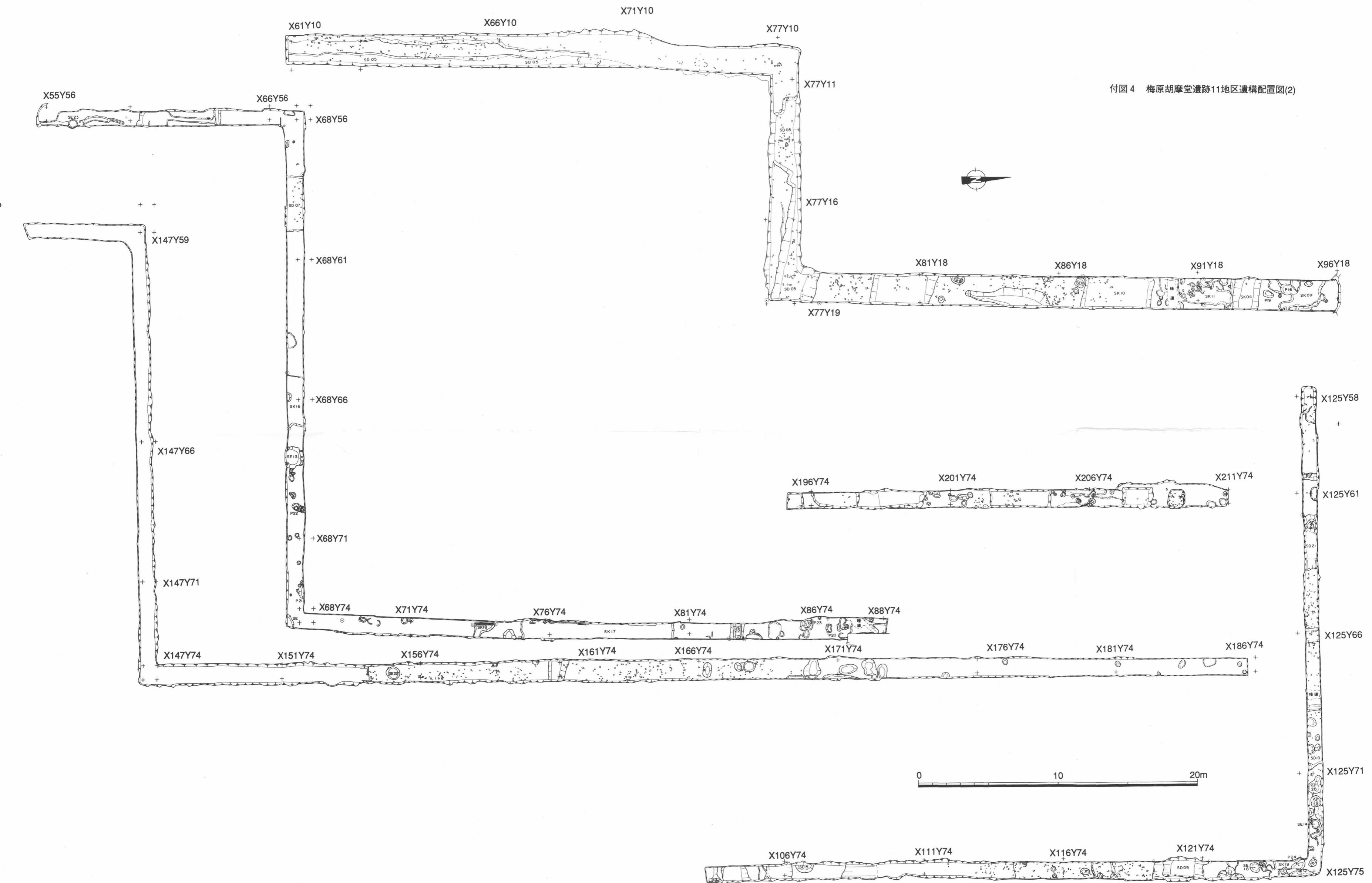


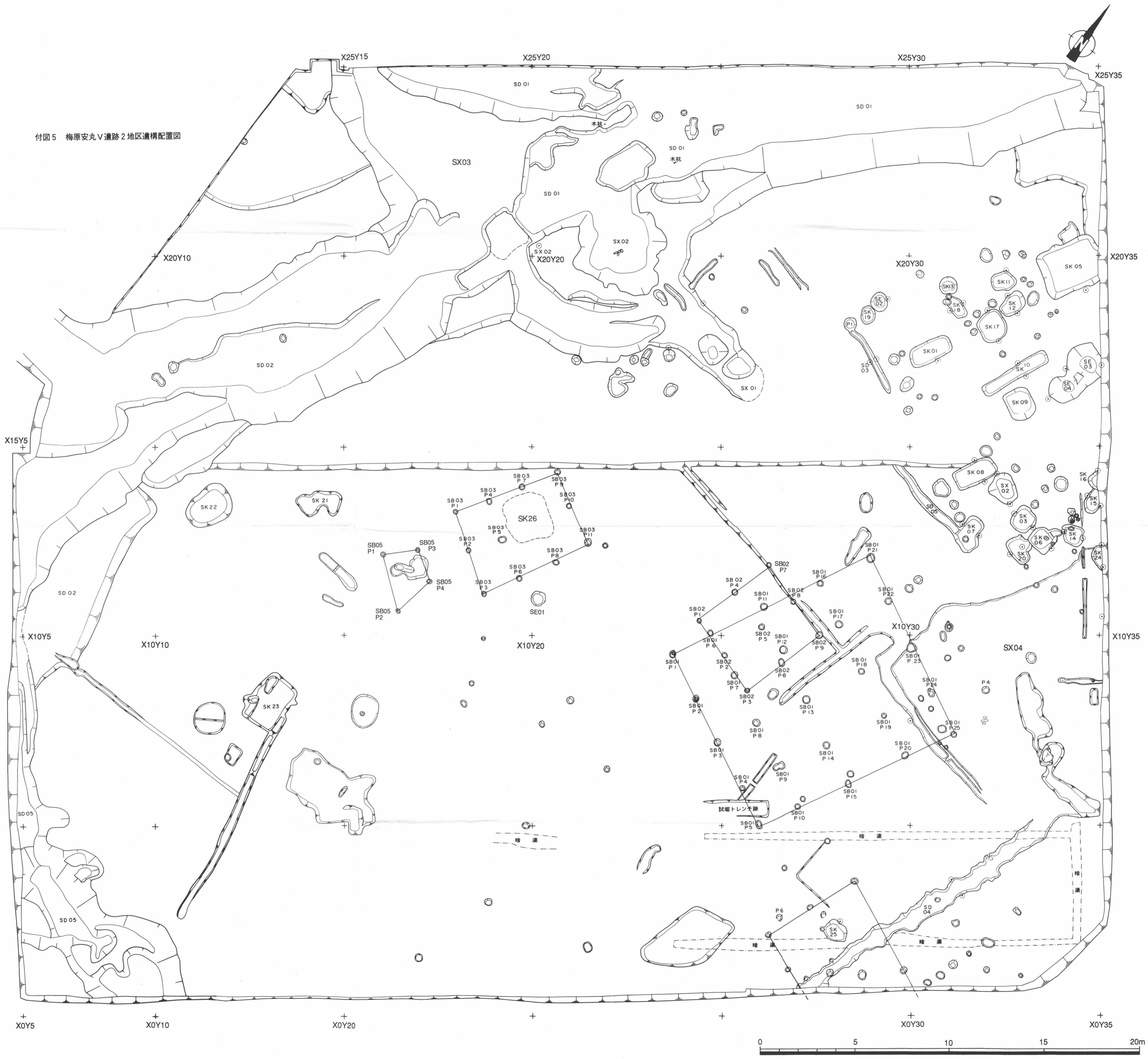
付図2 梅原落戸遺跡10地区遺構配置図





付図4 梅原胡摩堂遺跡11地区遺構配置図(2)





付図6 梅原胡摩堂13地区遺構配置図

